
三人のフィアンセ！？

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人のファインセ！？

【Zコード】

Z6419I

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

僕、秀句 四季。

ごくごく普通の高校生。

普通だったはずが、いつしか普通じゃなくなつた！？

え、あの、弥生ちゃん？あの、夜闇さんも、何してるんですか……

零ちゃんもやめて！

……あ、ちが、違うんだ間宵ちゃん！僕はやましいことなんかにもしてない！頼むよ！信じて！

といつも、なんで彼女でもないのにそんなこと言わねえきや……

続きは本編へ！

第一話～プロローグ！～（前書き）

この小説には、ギャグ成分、少しの赤面部分、そのたもろもろがたくさんあります。御用法に注意せざ、いくつとも楽しんでください。

第一話～プロローグ！～

三者三様の告白、一人は告白にすらなつていな。

「す、す、好きですー結婚してくださいー。」

「好きです。お仕えさせてくださいー。」

「興味が出た。研究させてくれ」

僕、秀句　四季の前に立っている三人の女の子。

なぜ、こんな状況になっているのだろう?

それを今から、説明しようと思つ。……

僕の自己イメージは、どこにでもいる普通の男の子、だ。
実際、成績もそうだし体育もそうだし、身長、体重、座高、そして好きな女の子のタイプまでもが普通で平凡の中間な、そんな男の子。

でも、少しだけ人に誇れるとこはどこかと訊かると、僕は『人助けをするのが好き』と答える。

今日もいじめに遭つていた女の子を助けたし、ナンパされていた

女の子を助けたし、おそれていた女の子を助けた。

詳しい状況は自慢っぽくなるので省くけど、そうやって人助けができる、っていうのが僕の数少ない人に誇れるところだつたりする。

で、いつものように僕は学校を終え、幼馴染の東堂 間宵ちゃんとひどうまゆいちゃんと一緒に帰つて、いつもどおりにアパートに帰つた。

帰つてきて、数瞬。

かばんを置き終え、服を着替えてさてくつろいつか……という時に、インターフォンがなつた。

「はい」

僕は少しいらつさながらも、来客を出迎えた。

すると。

おつとり系の、前髪で田元を隠した僕の高校の制服を着ている女の子……確か、今日いじめられていた子……かな？ その子が、

「す、す、好きです！ 結婚してください！」
と言つてきて。

モデルも裸足で逃げだしそうなほどの人形みたいな顔立ちの、長身でスレンダーなメイド服姿の女人……あ、この人さつきナンパ

されていた人だ。その人が、

「好きです。お仕えさせてください」と言つてきて。

眼鏡をかけてまるで研究者ですとでも言いたげなちびっこい白衣姿の女の子……あ、この子今日黒服たちに追いかけられていた子だ。その子が、

「興味が出た。研究させてくれ」と言つてきて。

僕はそう答える以外に反応できなかつた。

「…………は？」

で、いくらなんでも追い返すのはどうかと思つたし、僕も男の子なので一応話だけは聞いておくことにした。

まず、おひとつした、ところどころかはおどおどした印象の女の子が、

「わ、わた、私、如月 弥生と言います……！あ、あの、一目、いや、じやなかつた、ず、ずっと、あなたのことが、好きでした、いや、好きです！結婚してください！」

と、恥ずかしそうにむじむじしながら、飛んでもないことを言つた。

次に、人形みたいにきれいな少し冷徹な印象の女人が、

「私の名は十三夜月 夜闇。昔の縁であなた様にお仕えするよう

仰せつかいました。以後、ビツビツよしなに

と、冷静に飛んでもないことを言つた。

最後に、ちびっこい、研究者のように白衣を着た頭のよさそうな印象の女の子が、

「ボクは心葉零。いちおう研究者なんかをやつてる。そのせいかこの前助けてくれたお前に興味を抱いてな。無期限で研究させてほしい」

と、えらく尊大に飛んでもないことを言つた。

「……え、ええと。まずは整理しようか。如月弥生ちゃんは僕と結婚したくて来て、十三夜月夜闇さんは僕に仕えたくて来て、心葉零ちゃんは僕を研究したくて来た、つてこと……？」

え、ええ? なにそれ。

そりや僕だつて男の子だよ? こんな風にいきなり女の子が押し掛けてくる夢想をしなかつたつてわけじゃないし、結構頻繁にしてた気がする。

でも、この状況は僕の望んでたのとはちよつと違つよつな……?

「あ、あ、あ、ああの一わ、私、家には『尼僧になる』って出て出できちゃつたんで、帰れないんですけど、ここに住んで、いいですか……?」

「私はすでに『円』からひきに降りて来た身。もう戻るといふなどあなた様以外にはありません」

「ちなみにボクは研究所から抜け出て来たからね。しばらくかくまつてくれたら嬉しいな」

さらに、追い打ちをかけるような三人の言葉。

え、ええと！？

一体何が！？

ていうか、どうしてこんなことに！？

いつたい

ガチャヤ。

いま、聞こえてはいけない音がしませんでしたか？

「お～い、四季！そろそろ干上がつてんじゃないかって、この優しい間宿様が食事を運んできてやつたぞ！喜べ！」

なあ、聞いてくれよ、今日はどうも野菜が少なくてな、相対的に肉の方が多いなつちまつたんだよ。まあ、けつしてお前のためにわざわざ肉を買い足した、なんてことはなくな、ただ野菜が少ないか

ら肉が多く感じるだけ…………なん…………だ…………よ~。

……ああ。

「あの、お優しい間宵様？」

なんで、そんなに肩を震わせておられるのでしょうか？

「…………なんだ、四季。遺言、か？」

なんで、そんなに女子高生が発するべきでない殺氣を発しているのでしょうか？

「あ、危ない、四季君ー！」

「何奴」

「誰だ！？」

弥生ちゃん、夜闇さん、零ちゃん、三人がほぼ同時に僕を守りつと背中にかばつた。

「…………オーケー、オーケー。理解したぜ、四季。たしかその妙にきょどつてんのが今日私と四季が助けたクラスメイトだな？ そんで、隣にいるメイド服の奴は確かにナンパされてた奴だ。な、そうだろ？ で、その隣のちびっこいのが黒服に襲われてたやつだ。…………へえ、そうかそうか。今日助けた奴みんなてめえんとこに転がりこんだか。そうかそうか。そんで、てめえは受け入れた、と。…………へえ。

てめえに自殺願望があるとは思わなかつたぜーー！」

空手、剣道、柔道、合氣道、合計一五段。

格闘面では学校一を誇る東堂間甫ちゃんの鉄拳が、僕ら三人をまとめて吹き飛ばした。

怒った間甫ちゃんは、冗談抜きで怖い。

気を失う前に思ったことは、それだけだった。

第一話～プロローグ！～（後書き）

こんにちは！作者のコノハです！

今日から始まるラブコメ『ディ、『三人のファインセー！？』です。

とまあ、現段階ではファインセー一人しかいないんですけどね。
まあ、『ー？』ですからいいんです。

楽しんでいただけたでしょうか？きっと楽しんでいただけたと信じています。

では、駄文散文失礼しました！

「愛読感謝！」

では次回！

第一話～交渉成功！？～

……僕らは座らされている。

僕は自室で、本来一人暮らしなはずなのに、女の子に説教されている。

氣絶から覚めたら、もうすでに他の三人は正座中で、且覚めると同時に正座を強要された。

まあ、この子は女の子、と言つていいのかどうかわからないほど乱暴だけど。

「ああ！？四季、てめえ、今失礼な想像したろ！？今どんな状況かわかつてんのか！？てめえの前に得体の知れねえ人間三人も押しかけてんだぞ！」

「得体が知れなくはありません！」

「私は『月』の人間です」

「僕は研究所の人間だよ」

三者三様に言いわけをする。

「だ、か、ら！てめえらわけわかんねえこと言うんじゃねえ！つうか四季！てめえも玄関で追い返せ！なんで家に入れてんだ！こいつらがやばい関係の人間だつたらどうするつもりなんだよ！？」

「だから、私は怪しいものでは……」

「私は『月』に所属していた十三夜月夜闇です」

「ボクは国立研究所から来た心葉零だよ」

正直、今のところ弥生ちゃんが一番不利なんじゃないだろ？
けどとか遠くの世界のことのように思ってみる。

「おー、四季一聞いてんのかー！」

どうやら間宮ちゃんは、少しの現実逃避も許してくれないようだ。

「聞こてるよ。……なんでこの子たちを入れたか、って？」

「そうだよ。どうせ女の子だったからだろ？お前モロ結婚詐欺に
引っ掛けりそいつらしてくるもんな」

「ひむせー。僕だって男の子なんだ。ちょっとぐらこ色番につられ
ても仕方ないでしょ。

「はじめなあ。なに開き直つてんだよ。言わなくてもわかるぜ？
今絶対心の中で私のこと否定しただろ」

「こ、しないよー！」

なんでそんなことまでわかるんだー？超能力者か、この子はー？

「……まあ、どうせ女の子だから、って理由で入れたんだろ。こ
れがむくつけ男だつたらその場でドア閉めるくせに、何考えてん
だか。ほんと男つてのは馬鹿だね」

「ハ間宮ちゃんが達観するのには理由があった。

たとえば、間宮ちゃんの通う道場に女の子の門下生がほとんどい
なくて、男女合同でやるしかない時。

少し胸元を開けて戦うだけで、一瞬で勝負がつくんだとか。

同じ人に何度も面倒いぐらいいに引っかかるので、間宮ちゃんは男の愚かさを悟ってしまったようだ。

「で、なんでもめえらはここに来たんだよ。ああ、その理由を訊いてんじゃねえ。どうやって、だよ。ホワイじゃなくてハウな。じやあ、そこ内の生徒から」

でも、間宮ちゃん意外と自分の胸の大きさ直覚していないんだよな

……

「おい、てめえ話の最中になに人の胸見てんだこら。用のかなたまで投げ飛ばすぞ?」

「『めんなさい』

速攻で土下座。

じゃないと本当に投げられる。

用まではないとしても、アパートの端から端までぐらこはあるかも知れない。

「よし、仕方ねえから許してやるわ。……で、あんたらはどうやってここを知つた?」

間宮ちゃんがそう訊くと、三人は口をそろえて、

「尾行しました」

と、言つたのだった。

わすがの間宮ちやんも、ずつこける。

「な、なあー。む前からそりつヒストーカーかよー。ます満しいな……」

「で、でもー。」

「ううで、弥生ちゃんが声を大きくした。」

「で、でも、私、家に黙つて出て來たので、行くあてないです……」
「追い出されちゃつたら私、野宿するしかありません……それが、本当に厄になるか……」

「う、と間宮ちやんが言葉に詰まつた音が聞こえた。

「私も、『円』からぼもう名を排された身分ですので、もし」と
から出ていけと言われるのなら、私は死ぬしかありません、『円』
の人間が生涯仕える人間は一人ですので」

「うぐ、とまた呻く間宮ちやん。

「ボクも同じようなものだ。研究所から抜けだしてきたからな。
ここを追い出されれば引き戻され、罰として死にも等しい苦痛を与
えられるだら」

「うぐぐ、と間宮ちやんはさうと呻いた。

「…………ね、ねえ、間宮ちやん、ひとつとびらこなさいの部屋スペ

ースあるし、別に泊ぬべりこなら……」

「「いのせえ四季ー　てめえそんなこと言つていいこいつとやつちな
！」とかるつむりだらー……その、口にするのも汚らわしこ」とを
！」

「僕はそんなつもりないよー　で、でも、行くあてないなら、ね
え？」

「うぐ、とまた言葉に詰まる間宮ちゃんに、僕はさうに追っ打ちを
かける。

「もし、追い出しこの子たちが事件に遭つたらどうかのやへ
ね、少しだけだから、いいでしょ？」

「ふ、うぐぐ、としばりく呻いた後、間宮ちゃんは言った。

「し、仕方ねえ！　いいだり、泊めたきや泊めりー私はもう知ら
ねえからなー不純異性交遊してたつて、先生に聞こつけてやるー。」

「わああああああああああああああああああああああんー

と、間宮ちゃんは田に涙をためて走り去つていった。

……なんで泣いてたんだる？

「よ、よひしー、みんな

僕は三人に向直り、三つ指をついた。あれ、ちょっと違つよつ
な……でも、ま、いつか。こんなのは雰囲気だよ、雰囲気。

「え、うるさいやー。」

「よろしくお願ひします、四季様」

「お話をなるよ、四季」

挨拶が終わつたわけだけど。

「ねえ、君たち、ちょっと訊いていい?」

「も、もちろんです! なんでも答えちゃいまさよー?」

「どうぞ、」自由

「好きに訊け」

うん、許可が出たみたいだし、訊いつかな。

「どうして、僕のところに来たの?」

「好きだからです!」

「好きなり、使えたくなつたからです」

「興味が湧いたからだ」

なんだか、わざわざからこんな理由ばつか。なんか話す氣ないんじやないかとも思えてくる。

……ま、いつか。もしやうなう、きっとこいつか話してくれるよ。

「そつか。ま、とにかくよろしくね

「はい!」

「はい」

「わかつた」

ま、そんなこんなで。

僕たちの同居が、始まつた。

第三話～食事時の恐怖！～

「はい、あの、お、お食事、作りましょうか？」

そろそろ夕暮れ時、弥生ちゃんがそう言つた。

「うん、ありがと」

僕はそう軽い気持ちで言つた。

「四季様にお食事をお作りするのは従者たるこの私はです

「ボクは研究対象に餌をやる義務がある」

でも、最終的には一つしかない台所を取りあつ結果になつてしまつた。

「い、いえ！ わ、私が作るんです！」

「私は

「ボクだ」

弥生ちゃん以外は口調こそ大人しいが、絶対に引こうとしない。

「……ねえ、一人ずつ作つたら？」

僕は毎日交代して作つたらどう？ って言つたつもりだった。

本当に、それ以外の意味はなかつたはずなんだ。

「そ、そ、そうですね！じゃ、じゃあ、私から作りますー。」

そう言つて料理に向かつたのだけれど、さつきみたいに「一人が割り込もうとはしない。わかつてくれたのかな？」

しばらくすると、料理が出来上がった。

「あ、あの、少しだけ、待つてくださいー。」

そう言つて、どんな料理ができたのかは見せてくれなかつたけど、きつとおいしいんだろうな。

と。そう思つたのもつかの間。

今度は夜闇さんが料理をし始めた！？

「え、ええ！？な、なんで夜闇さんまでー！？」

「夜闇、とお呼びください」

料理を作つたまま、僕に呼び掛ける夜闇さん……じゃなかつた、

夜闇。

「よ、夜闇はどうして料理を？」

「決まつています、私の番だからです

ええと、なんで？

僕は戸惑いながらも、ああ、明日の朝ご飯作ってるのかな？とか勝手に納得しておぐ。

「完成しました。では」

と、やはり料理は見させてくれなかつた。

次に、少しは予想してたから驚かなかつたけど、やっぱり零ちゃんまでもが料理に取り掛かつた。

「……なんで？」

集中しているのか、零ちゃんは答えてくれなかつたけど。

「……できた。ではみんな、お披露目といひつか

零ちゃんがやつぱり同時に、僕の目の前に三つの料理が差し出された。

三人とも料理全てがどんでもない量があり、どう考へてもその量を二つも食べるなんて、無茶もいといひだつた。

「え、ええと？」

「た、食べてくださいー！」

「食べてくださいー！」

「食べろ」

だから、なんで? 三つも? し、しかも……

それ、本当に料理って呼んでいいの?

三人共の料理がみんな、その、なんて言うか……作つてもらつたのに失礼なのは重々承知だけど、正直ゲテモノ料理のほうがまだおいしいやうだらうといつほどの出来だった。

「……」「これ、なに?」

弥生ちゃんとのべつべつと煮立つてゐる鍋を指して、言ひ。

弥生ちゃんの氣弱そくな正確に反して、その料理は自己主張の激しい赤が主体の辛そうな料理のようなものだった。

「」「これですか? か、カレーです!」

カレーって、茶色いよね?

そう突つ込んだら負けな気がした。けど、勝つてもない。

「あの、よ、夜闇?」

「肉じゃがで」「やります」

「やりますって、……け、消し炭にしか見えないんだけど……

炭になってしまった、ところよりはもともと炭を作るつもりだったんじやないかってほどきれいな炭化つぶりだ。炭として使えても、食べられないだろ?……食べさせませんよな?」

「ええ、と、零ちゃんのは?」

「…………うどんだ。」これしか作れなくてな。で、でもーこれ、ボクはよく研究所で食べていたんだ、特に問題は……!」

あるでしょ?よ。だって、うどんのスープに錠剤がこくつもこくつも浮かんでるんだもん。

ケミカルすぎて食べる氣起きないよ……健康にも悪そうだし。

「…………あ、あのあのあのー、どれが一番おいしそうですか!?」

「私のものに決まっています。料理は肉じゃが。『月』でもそれが一番だと……」

「ボクのだらひ。研究所でも評判だったんだぞ?」

「な、何を言ひます!私は信作なんですよ!あ、味見もちゃんとしたし、調味料も間違つてません!私が一番おいしいんですよ!」

…………ですね、し、四季君」

「何をおっしゃいます。私は従者。従者は主人の好みを完全に把握できています。事前調査でも、四季様は肉じゃがが好きだとありました。私に負ける道理はありません……ね、四季様」

「ふん!そんな食べたら死にそうな料理を出すなんて神経を疑うね!キミたちもつとめちゃんとした料理を作れないのか!?この調子だと僕が一番のやつだな!どうだ、四季!」

……間宮ちゃんの牛丼が食べたいな……

とか言つたらきっと泣かれるんだろうなーとか思いながら、僕は

油汗をかきながら二つの料理を眺めた。

いちばん右。赤々しくて味は想像できる。……正直、これが一番

病院直行コースなんじゃないだろうか。

真ん中。黒々しくて味は想像できる。……これは将来的に危ないんじやないだろ？ 焦げつて発癌物質だつて聞いたことあるし。

一番左。真っ白けつけで味は想像できない。うどんの白に、錠剤の白。これが一番安全に見えてきた僕は、おかしいのだろ？

悩んで、悩んで、悩んで……最後に僕が出した結論は。

「僕と勝負しようか。もし僕が勝つたら自分で作った料理は自分で食べる」と一矢、料理を作るよ

結果、僕の圧勝。でも、彼女たちは自分の作った料理を笑顔で食べてましたと/or/ちやんちやん。

……なんだか、料理係は僕になりそつた予感だな。

第四話～登校時の災厄！～

「…………すみません、四季君……お料理作れなくて……」
「すみませんでした四季様。なんなりと罰を申しつけください」
「すまなかつたね、四季。あれがボクのスタンダードなんだよ。
まあ、キミの作った料理もうまかったけどね」

「あはは、いこよいこよ。そろそろ夜も遅いし、寝よつか?」

三者二様の謝られ方をした僕は、そう言つて布団を敷き始める。
と、言つても布団は一組しかないんだけど……。

「ねえ、君たちほこの布団で固まつて寝てよ。僕は外で寝るから
やつぱり女の子と同禽はできないよ。
そう思つて言つたんだよ、僕は。

なのに、なのに、なのに！

「え、私と、一緒に嫌、ですか？」
「従者たる私と一緒に嫌いですか？」
「研究者のボクと一緒に嫌かい？」

完全に嫌だから断つてるみたいに取られてるー。

「なんでみんなそう取るのー！女の子と一緒になんかダメだから言つ

てるんだよー。」「

まつたぐ、一つ屋根の下ってだけで危ないのに、一緒に寝るなんてダメだよ。ダメダメ！

「……わ、私、は、その、はい、覚悟はして、来ましたから……」「

「私はもとより四季様の従者であり道具。四季様の欲情を満たすのも、また勤めかと」

「ま、ボクは別にかまわないよ。興味ある」

皆さんは全然ダメとは思っていないようですが。

どうして？今日初めて会つたんだよ？

「あ、あの、みんな！？なんでそんなにノリノリなの！？」

僕が訊くと、みな一様にして答えた。

「四季君のことが好きだからですー！」

「四季様の従僕だからです」

「四季に興味があるからだ」

もつ、どうにでもしてよ……。

僕は学校では結構評判がいい。らしい。

この間間宮ちゃんが、

『あんたさ、結構女子の中でも人気あるんだぜ、知ってたか？あんたがいつも人助けしてるところを見るやつがかなりの数いるんですよ。だからな、四季。

お前は誰にも見られてねえわけじゃ、ねえんだ』

『うう言つてくれた時には、ちょっとびり涙が出た。

僕には両親がいない。少し前に、死んでしまった。
だから僕には保護者がいなくて、もう誰にも見てももらえないんじ
ゃないだろうか、って思つてた。

だから、誰かに見てもらえるよう、人助けをした。

それは簡単なことじゃなかつたけど、ちゃんと評価をれていた。

それをしたから、とてもうれしかつた。

『お、おい！なんで泣いてんだよ！私何にもしてねえぞー！？お、
おい泣きやめつて…………四季、泣きやめよ…………泣きやめつ
つってんだろ…………』

『うう言つてドロップキックをかまされたけど、励ましてくれた間
窓ちゃんに、感謝していた。

「よお、四季」

で、僕に感動をもたらしてくれた天使は。

信じられないほどドスの利いた声で、僕をとりえていた。

「え、あ、あの、間窓、ちゃん？」

「そんなに死にたかったのか、四季」

むらり……と、間宮ちやんの後の鬪氣が歪む。鬪氣が空気を曲げているのだ。

「……え、なんで」

「てめえ、如月弥生と寝たな？」

ぐさつと、僕の胸に何かが刺さった。

「あ、ぐ、なんで知って……」

「私とあいつは友達なんだよ。向こうが知らんぷり決めてたから私も付き合つたけどよ……でも、弥生がそんな風な目的でてめえに近付いたとはな、思わなかつたぜ」

そ、それをなんで僕に言つてくるのかなー?なんて訊いたところで無駄だらうな……。

「それで……?」

「てめえの節操のなさを教育しに来てやつたぜ、感謝しな。そして死ね」

鬪氣が、形を持つて僕に向かつてくる。

え、あの、その……

「！」の、色狂いの大馬鹿野郎――――――――――――――

ズド――――――――――――

人のこぶしが出したものとは思えないような轟音が、朝の学校に

響き渡りました。僕はもちろん、気絶しましたよ。

「…………」

で、なんとか気絶から覚めた僕は、朝のホームルームで先生の話を聞いていた。

「…………で、今日は突然だが、転校生が来る。…………正直、彼女たちは私からも説明しづらいので、詳しく述べ本人たちに言つてくれ。…………そして、嫉妬はほどほどにな」

まだ頭の痛みがとれない僕は、先生の話がほとんど聞こえていません。

からり…………！

そんな音がして、教室中が騒がしくなったことだけは、聞こえた。

…………なんだろ…………？

僕は教壇に目を向けた。

先生が本来いるべきところだったのです。

「今日からこのクラスで四季様ともじもお世話になります、十三夜月夜闇です。よろしく」

「今日からこのクラスで世話をしなる、心葉零だ。四季のことはなんでも教えてくれ!」

また氣絶しそうな予感しか、しませんでした。

第五話～転校初日で言い争い！～

「……は？」

教室中が、そんな声を出したよつて僕は感じた。

「……な？ わかんねえだろ？ ジヤ、『質問な』

先生の質問に答える生徒はいなかつた。ただでさえ、意味のわからない人間なのだ。何が地雷なのかわからないのだらう。

「……あ、あの……」

同じクラスの、弥生ちゃんがおそるおそる手を挙げた。

その自己主張に、クラスの中の何人かが、驚いたような顔をした。

如月弥生。このクラスのポジションはいじめられっ子、であった。

僕が頑張つていじめはやめさせたんだけど、それでも、弥生ちゃんの根暗な子、というイメージは拭えなかつた。

そんな子が、自分から手を挙げている。

「……あ、あの、夜闇さん、零さん、ビッシュ…ビッシュ、四季君に付きまとうんですか…？ わ、わ、私は、一緒に、四季君と寝た、仲なんですよ……？」

またも、教室がざわめく。

「はあ！？秀句と如月が？マジかよー」

「すげえ、進んでるな～！」

「……ふちつ……四季の奴、調子に乗りやがって……」

そんな声が教室のあちら～こちらで起ころる。ぼ、僕が一体何を？

しかし、さらに混乱を招いたのは、教壇に立つ一人の女の子の言葉だった。

「何を言つているのです如月弥生。四季様と回廊をさせていただいたのは私です。冗談は名前だけにしてください……なんですか、二月三月つて……」

「私が一月一九日生まれだつたからです！ほつといてください！あなたこそなんですか、『十三夜月夜闇』つて…どう考へても偽名じゃないですか！」

教室がざわめいているのを氣にも留めず、弥生ちゃんとは思えないほどはつきりとした口調で言つあつ。

「私の名前は『月』にちなんでつけさせていただいた『従名』です。名前がその者の能力を表すのです、偽名とはなんですか、偽名とは名前！」

「『十三夜』つて満月一歩手前つて」とじやない！大方、料理だけがダメなんでしょう！」

「へ、ぐー？な、あなたにだけは言われたくありませんー！」の激辛料理女！普通真っ赤になつたカレーなんて食べませんよー。」

「消し炭食べるような味覚音痴に言われたくありませんー。」

なんか、二人ともヒートアップしそぎてない？

「……キミたち、言い争うのは勝手だが、少しは場の雰囲気といふものを読みたまえ。……見る、四季が宇宙人でも見るような目を向けていろ。」

そう零ちゃんが言ひた途端、ぱっと赤くなつて口を開いた弥生ちゃんと、冷めた氷のような表情に戻つて一礼した夜闇。

「……ちなみこ、四季はボクとも布団を同じくした」

まるで小学生のような体の零ちゃんが言つたんだから、教室はまたたつむさくなつた。

「おいおいおいー四季ばっかりずることぞー！間宵に続いて二人かよーやるねえー」

そんな風に、冷やかしてくれる声は少なかつた。

よくこの教室の喧騒を聞いてほしい。誰彼かまわず話しているように聞こえるでしょ？

でも、違うんだよ。

ほり、男の声はほとんど、いや一切聞こえない。

女子や教師に聞こえないように、声の調子を変えていろのだ。

「の声を聞きとれりとするなら、一ヶ月近い地獄の特訓に耐えなければならない。……あれは、つらかったな……

でも、僕もこのクラスの男子生徒、その声の調子は聞きとれる。

「……さて、どうする諸君。闇討ち、夜焼、いろいろあるが……やはり定番のトイレが一番書きやすいのではないか?」

そう、さつきのようこ冷やかしてくれるのなら、まだ恩の字だつたのだ。

女子や先生は気付いていない。こんなにも恐ろしげ会話が、今かわされていることを。

「拷問って、ほんとに効果あるのか?」

「あるわ。別に死んだといふで構わねえし」

「裏切り者だからな。死を持つて償わせるのが当たり前、というものがどうづ」

誰か一助けてー

そういう心の奥で呟んでみたけど、無駄みたい。

「……まずは、トイレ、そして裏庭、体育館裏、ラスト路地裏だ。

……わかつたな?」

口クリと意思に燃えた瞳でうなずく男子生徒諸君。

……明日の朝日、拝めるかな……

「……四季君ー」

「四季様」

「四季」

いきなり、名前を呼ばれた。

え、と見回してみれば、教室はいつの間にか静かになっていた。
もちろん男子の秘密会話は続いたままだが、誰にも聞こえない声なんて、ないと同じだろ？

「……なに？」

「四季君は誰のことが一番お気に入りなの？」
「四季様は誰のことが一番なのでしょうか？」
「四季は誰のことが一番好きなんだい？」

……え、いきなり、なんで？

会話を聞いていなかつた僕がそんな質問に答えられるわけがない。
ど、どうしよう？

「……四季」

もう悩んでいた時だった。

「へ？」

本日一度田の、悪鬼羅刹修羅、東堂間宵本氣モードだった。

「おい、四季。てめえが家でメイド従えてよつが乱交しそうが文句はねえ」

え、文句ないの？って声が女子の間で起きた。

「だがよ、ここは学び舎だぜ？ 学校だぜ？ てめえのハーレムのブレイスピットと同列にみられちゃ困るな……ああ、本当に困るぜー。」

目が、間宮ちゃんの目が真っ赤に燃えて、僕をにらんだ。

「おい、最後に何か、遺言はあるか？」

え、あ、そ、その

詩在局一
局宜在人
人得其事
事得其人

またも鬪氣の塊とじぶしが僕にクリーンヒットし、僕はまた氣を失つたのでした。

第六話～神の申し子、妹襲来！？～

放課後に田が覚めた。

今までどうも昏睡状態が続いて、死にそうだつたらしい。

うん、さすが間宵ちゃん、暴力の桁が違うね。

そう思つて体を起しすと、ここがどこだかよくわかつた。

ここは保健室。白いシーツと白い壁の清潔の象徴ともいえる部屋だ。

「……四季様」

「あ、夜闇」

なんだか、こうやつて夜闇を呼び捨てにするのも慣れちゃつた。なれない方がいいんだろうけど、慣れてしまつたものは仕方ない。

「……みんな、は？」

あれ、そう言えば僕なんでみんながそばにいてくれるなんて思つてるんだろう？

いつもいつも一人だった僕に急に人が増えて、混乱してるのかな。

「……四季様」

もう一度、夜闇が僕の名前を呼んだ。

「四季様、私はあなたのしもべです。あなたが死ねと言えば、死ぬ道具です。……ですから、何かありましたらお話ください」

夜闇は強い意志を感じられる瞳を僕に向けたまま、僕にそう囁つた。

「…………うん、そうするよ」

なんだか、いい相談相手ができたみたいに僕は感じていた。

「…………四季様、少しお話が」

「ん、何?」

神妙な顔つきで、夜闇が言つてくる。
僕の生活を変えかねない、重要な事を。

「四季様の妹様がおいでなさっています。……どうしますか?」
「…………え?」

僕は口に出してそう驚いた。

秀句 四様。

愛を示す杯の紋章、知性を示す杖の紋章、意志の強さを示す剣の紋章、価値や気品を示すダイヤの紋章の四つの紋章……つまり、トルンプの模様の四つの意味を丸めて、四様。

彼女は十三歳になる僕の妹であり、僕が八歳の時、両親が死んでしまったことをきっかけに生き別れてしまった。

そんな彼女が今、はるばる僕のところまできた。……ああ、元氣にしているかな、四様。

僕は四様が待っているといつ学校の玄関まで夜闇と一緒に行った。

すると。

「……ら、あんたははどうしてお兄ちゃんと一緒に帰るってことになつてんのー?普通、遠いところから兄に会いに来た妹に隣を譲るもんでしょうー?」

「そ、それはどうの普通ですか……?」

四様がいると案内されたところでは、弥生ちゃんと女の子が喧嘩をしていた。

女の子は黒髪で、とても美人だが、言動の乱暴さが少し魅力を損ねている。……間宵ちゃんみたいだ。

「……あ、お兄ちゃん!」

女の子は僕の姿を見つけると、ダッシュでこちらに駆け寄ってきて……

「わっー?」

いきなり、抱きついてきた。

「……四様様、四季様からお離れください」

夜闇がさりげなく、でも確実に四様を僕の体から引き離そうとする。けれど、四様は離れようとしない。

「何、あんた?私とお兄ちゃんの再会を邪魔するわけ?」

「私は四季様の従者、十三夜月夜闇です。……とにかく、お離れ
ください」

「バチバチ……つて、効果音が一人の間に流れた気がした。

「……さて、弥生君、そろそろ四季が来るこりだらう?……おや
?」

そして、今までトイレにでも行っていたのか、第三者、研究幼女
がやってきた。

「……新しい君の愛人かい?」

「私はお兄ちゃんの妹よ!なんなの、あんたは!」

「ボクは心葉零。……ふむ、妹、か。……離れたらどうだ?四季
が嫌がってる」

また、バチバチ。

「おい、四季ーさつきはその、少しやりすぎた……すまない、じ
ゃなくてーあの、その、一緒に帰らねえか……つて、何してやがん
だてめえらはー!?」

ああ、これで僕終わったな。間宮ちゃんの登場だ。

「私はお兄ちゃんの妹よー……あんた、何?」

さすがに四様もおんなじような質問を4回もすれば煩わしく感じ

るのか、少しだからびくびくだった。

「私は東堂間宵。……くえ、四季の妹ねえ。昔話にや聞いてたが実在したんだ？てつまつ四季の妄想かと思つてたぜ」

三度目のバチバチと、僕と四様を同時に攻撃する間宵ちゃん。
……おーい、頼むからこれ以上刺激しないで。四様はキレるとんでもなく怖いんだから……。

そう不安になるのは遅かつたのかもしれない。

「…………如月、弥生」

ひびく、冷めた声が抱きついたままの四様から聞こえた。

「……十三夜月、夜闇」

ふわりと、地獄の底からわき出るよつなそんなエネルギーが四様の周りを囲む。

「心葉、零」

周りの空気がそれにつられてひびく冷えた気がした。

「……そして、東堂、間宵」

「な、なんですか……？」

「何でしょう」

「何だい？」

「何だよ」

「……名前は、覚えた。覚悟しててね。ちやあんと、闇討ちしてやるから」

ああ、言ひたやつたよ。秀句四様の『闇討ち』。

四様が本気でキレた時にしかしない宣言だが、めちゃくちゃ効果ある。

何せ、闇討ちと言つても四様が手を下すんじゃなくて、世界が手を下すのだ。

もともと、四様は神様に愛されているような人間で、運が向こうからやってきて不幸が向こうから去っていく、そんな天運の持ち主だった。

だから、彼女が闇討ちすると宣言された人間は、数日間の内に間違いなく不幸な目に遭う。

たとえば、7歳のころ僕をいじめていたガキ大将たちは、四様に宣言されたその次の日に両手両足複雑骨折で一年近く入院して、小学校の時点で留年する羽目になった。

これは噂だが、一度四様に告白した馬鹿な奴がいて、そいつも例の「」とく宣言された。

『私にはお兄ちゃんがいると言つて、それを知つてなお、私にそんなことを言つとは……！』

それが理由らしい。

宣言された一週後、その馬鹿は……

隠れた、絶対に秘密だったはずの趣味である女装がばれて、しかも全国区で噂が広がって、名前まで公表されてしまい、日本に居場所がなくなつて今はアメリカ暮らしなんだとか。

四様との学校は遠く離れているのに僕まで噂が届いているのが、四様の力の証明だらう。

「……四様、そんな簡単に闇討ち負けじゃダメだよ……」

「えい、お兄ちゃん。闇討ち取り消し」

そう言つて、四様に取り巻いていた地獄のような雰囲気はきれい
わざり消え失せる。

あれ、四様つて結構沸点低かったはずだけど……？

四様が怒りを引つ込めた理由は、すぐに分かつた。勝者の余裕だ
ったのだ。

「なんたつて、お兄ちゃんは転校して私のところに来るんだもん。
……あなたたちが、ここでお、わ、か、れ！」

……聞いてないぞ妹よ。

第七話～妹裏来の眞実解明！～

よくよく考えれば、今までおかしかったのだ。

僕は8歳で両親が死んだ。

そして、それ以来一人暮らしをしている。

当時五歳の妹は母方の祖父母に引き取られたが、なぜ僕は8歳の時分で一人暮らししなくてできたのだろう。

僕が、強く言つたからかも知れない。

間宵ちゃんが主張したからかも知れない。

でも、一番の理由は。

『私には特殊な力があるけど、お兄ちゃんが一緒にいたら発揮できないの』

と、四様が嘘をついたからなのでは、と今になつてならわかる。

祖父母は四様の特殊な神懸つた運に惚れこんで、利用しようとしていたのだろう。

だから、今まで僕は四様に近づけてももらえなかつたし、四様は僕に近づけなかつた。

僕があのアパートに残りたい、なんて我がまま言つたから、そうなつたのだ。

「お兄ちゃんともう一度暮らしたい、今度は大丈夫になったから、つて言つたら快諾してくれたわ。あの一人は私の運にあやかれたらもう何でもいいみたい」

そう四様が悲しそうに言つても、僕には否定の言葉は見つからない。

「……で、でも、四季君が断つたら……」
「断るわけないでしょ」

四様は自信たっぷりに言い放つた。

「昔からお兄ちゃんは私のことが大好きだつたんだからー。いつもこつも、一言田には『四様をぼくのおよめさんにする』だつたもの。いきなり出てきてあなた達に気持ちが揺るべはないわー！」

「こじは僕のアパート。あれからこいつか言い争いをしながらも、全員無傷で帰つてきた。

ちやぶ台に僕、弥生ちゃん、間宮ちゃん、夜闇、零ちゃんが円を書くようにして座つている。

「いや、勝ち誇つてるとこひいけど、僕行かないよ?」

ちやぶ台に足をのつけかねない勢いで勝ち誇つていた四様の顔が、凍つたように固まる。

「え、ええ? お兄ちゃん、なんで、どうしてー?」

四様せわつあまでの傲岸不遜はビックやう、いきなり泣きべやくなりながら僕にすがるよつに抱きつこうとした。

「だ、か、らー僕はこのアパートから離れるつもりはないの！なんできなりやつてきて僕がここから出る前提で話が進んでるのさ！四様、少し見ない間にかなり我がままになつてるよー？おじこちやんたちに迷惑驅けてるんじゃないだろ？」「…」

「……お、お兄ちゃんが男らしくなつてゐる……」

僕の必死の説教を、その言葉で済ませた四様。

「なに黙つてゐるんだい、君はー！」

「男トニロ余わやれば、舌田してみよ、とせよへ黙つたものね……お兄ちゃん、お兄ちゃんといへなつてね……」

なんだか本氣で馬鹿にされてゐる気がしてきた。

昔の四様つて、もつといつかわいらしかった気がするナビ……。

「わあ、用事が済んだなら帰つて！僕は君のところには行かない

よー」

それが、四様との最後の会話だった。

「……うそ」

やう言ひと、すゞしくと呑めぐらがり、まるで幽霊のよつて扉を開

けて、出て行ったのである。

パタン。

物悲しげな音を立てて、扉が閉まった。

「追いかけなきやいけません！」
「追いかけた方がよろしいかと」
「追いかけなよ」
「追いかけやがれ！」

「きなり女性陣から追いかけろコール。……一応、触らぬ神にな
んとやら、ここは従つておこうかな。

「……………」

僕はそう言つと、四様を追いかけに扉を開けた。

公園

「いつも、いつも、お父さんたちと一緒に遊んだ、公園だった。

この街の公園は、僕らにとっての思い出の場所だ。

「……四様

そんなところに、僕の妹はいた。

ブランコに座って、さみしげにキイ……キイ……。

「……お兄ちゃん。追いかけてきて、くれたんだ」それが意外なことであるかの様に、四様は言った。

「何意外そうな顔してるんだよ。いきなり出でつたら驚くだろ

「でも、邪魔なんじょ、私……？」

そんなことない。

でも、さつきの言葉を言ってしまったあとでは、取り繕つよう

しか聞こえないだろ？

「……お兄ちゃんは、変わったね」

「因様も、変わったよ」

何年ぶりになるんだろう。いまさらながらにそう思った。

「……お兄ちゃん、私ね、ほんとはね、お兄ちゃんに会いに来ただけだつたんだよ」

急に告げられる、真実。

「私ね、ほんとはね、……外国、行くんだ

……え？」

一瞬何を言つているのか理解できず、僕は口を開けたまま突っ立つている格好になった。

「私、この能力をもつと開花させるために、有名な脳開発の先生のところに行くことになつてるの。……おじこちやんたちが、そう言つてたの」

の人たち、……そんなこと、まで。

「嫌がつたのか？」

「……さつき、お兄ちゃん言つたよね、答えてあげる。『迷惑なんてかけてない』。私はね、今のところ、搾取されてるの。……迷惑なんて、かけようがないんだよ」

ひどく悲しげで、四様は言った。

「……………お兄ちゃん」

もう悲しげで四様に、僕は

第七話～妹裏来の眞実解明！～（後書き）

第八話／新たな決意と死の香り！？

「行かせないぞ」

僕はつよい口調で言つた。

「……え？」

四様はどうも驚いているみたいだった。

「絶対に、行かせないぞ。そんなバカみたいな理由で、外国になんか行かせるもんか」

そうだ。何考えてるんだ、祖父母達は。

能力を増強する？ そんなことしたら、今まで病院送り程度で済んだ闇討ちが今度から本当の意味での闇討ちになっちゃうだろ？

「……おにい、ちゃん。……ありがたいけど、無理だよ」

「無理じゃない。……絶対、外国なんて行かせるもんか。行かせないぞ。……絶対にだ」

僕は強い口調で言つた。

四様は驚いたような顔をしているが、その顔にうれしいとか、そう言つた表情はない。

「……無理だよ。……だって、もう一週間後には先生のところへ行くことになつてるんだから……」

「大丈夫。おにいちゃんに任せて。四様はしばらく休んでて。」

……長旅で疲れたらう？」「

僕はできるだけ、優しく言った。

正直、何をすれば四様が外国へ行かずといられるかなんて僕には思いもつかない。

でも、いったん部屋に戻れば。

弥生ちゃんも、夜闇も、零ちゃんも、間宵ちゃんだつている。

三人あれば、文殊の知恵。

五人でなら、文殊よりもきっとといい知恵ができる。

……四様を、守るんだ。

「…………うん。お兄ちゃんの部屋で休んでて、いい？」

「いいよ。…………じや、帰ろうか

僕はともすれば泣きだしそうな顔の四様を見ないふりをし、前を行つて歩く。

「よかつたよ！」

ふと、注意していなければ聞こえないほど小ちぐ、四様は言った。

「よかつたう…………私、お兄ちゃんに嫌われたんじゃないかなって、ずつと、ずつと思つてた…………」

……どうか。あの時、僕があのアパートから出たくないと言つたのは、自分と会いたくないからだと、思われたのか。

「嫌う？誰が誰を？僕のたつた一人の血を分けた妹を、嫌うわないじゃないか」

僕は少しだけキザつたらしく、そう言つた。

「……うん、私も、お兄ちゃん大好きだよ」

「僕もさ」

僕と四様は夕日に染まりかけた道を、昔のように歩いて帰つた。

なんだか、家に帰つたらお父さんもお母さんもいるんじゃないだろうか。

そんなありえない想像をしてしまつべりい、懐かしかつた。

お父さんはいなかつた。
お母さんもいなかつた。

でも、はなぜかエプロン姿の彼女たちはいた。

「……みんな？」

「な、なんですか？」

「なんでしょう」

「なんだい？」

「なんだよ」

同時に返答が返つてくる。

「……何よ、あんたたち」

四様がそう引きながら言つのも、今では無理なかつた。

だつて、四人とも、エプロン姿。

こまでは、いい。

うん、たしかにみんな似合つてゐる。でも、その四人が囲つている鍋の中身が、まずかつた。

いや、まずそつた。

「……お、お料理、作つてます」

「料理をしてこます」

「料理をしているんだ」

「料理してんだよ」

僕は四様に対抗するために魔術の力でも借りようとしていたのかと思つたけど、どうもみんなの答えを聞く限りでは、料理をしていたようだった。

でも、鍋の中身は確実にそつち方面の内容だよ？

黒、紫、緑、赤……

それらがマーブル状に形作つて、きれいな模様を描いている。もしこれがきれいなガラス球の中に封入されいたら、さぞかし美しいインテリアになるんだろうな、つてぐらいには整っている。

でも、これはインテリアではなく、料理だ。

……まさか、僕と四様が食べるんじゃない、よね？

「……お兄ちゃん、きっと食べれるお兄ちゃんだけだよ。だって、私運あるもん」

あ、そうか。四様は神がかった運があつたんだな。と、いまさらながらに妹の能力を再認識。

「な、何があつたかは知りませんが、ど、どうぞ四季君、た、食べてください！みんなで作りました！」

「四季様に食べていただくため、私たちは奮闘しました。……せめて、一口だけでも」

「四季、キミのためにボクが頑張つたんだ、ちゃんと食べてくれるだろ？」「…」

「わ、私、料理は少しだけ不得意だけど、お、おまえ、じゃなか

つた、四季、お前のために作ったんだ、食べてくれー。」

「はい、みんな誰一人として四様の存在を考えてる人がいない。
助けて……」

そう言ひ意思をこめて四様を見た。

「…………」

もう死を待つだけの病人を見るような顔をして、四様は首を振つ
た。

「…………お兄ちゃん、本当にお兄ちゃんはいいお兄ちゃんなんだつたよ」

別れの言葉までつけてきた。

「…………ええい、ままよー。」

僕は差し出されたそろそろ色が混ざつてなぜか金色銀色になりつ
つある鍋にいらみつけ……

最初の一 口を口に含んだとたん、僕の意識はブラックアウトした。

もう、この人たちにキッチンを明け渡すもんか。

第九話～夜闇の打開策！～

「……で、……なの」
「……そう。……で、……が、……あ、目が……」

声が、聞こえる。
多分、四様の声だ。
それと、間宵ちゃん。

「……ん、ですか？」
「誰だろう？」

「ああ、そうか、弥生ちゃん、かな？」

「……です。……はい、そのように……」
あ、これはわかる。夜闇だ。

「……く、これは一体……。……こんなことも……ものか

あと消去法で零ちゃん。

四様と間宵ちゃんはすぐに分かつたのに、他の三人は声だけじゃ
過ぐにわからなかつた。

でも、しょうがない氣もする。

だつて、まだ一日しか経つてないのだ。

三人が来て、僕の部屋に住み始めてから。

……だんだん、意識がはつきりしてきた。

「……あ、目が覚めるわ」

その、誰かわからない声をきっかけに。

僕は目覚めた。

「あ、起きた。ってか、生きてたのか。今から葬儀屋に電話しよ
うか悩んでたところなんだよ」

いきなり、間甯ちゃんがそんな辛辣な言葉を投げかけて来た。

「はい、ま、間甯さん、今まで氣を失っていた人に、その、その
言い方は、どうかと……」

「はー人の料理食つて氣絶するような奴に与える温情はねえーそ
のまま死ねばよかつたんだー！」

なんだか、いつもに増して乱暴な言葉遣いの間甯ちゃん。
どうしてだるー?

「……とかなんとか言つておりますが、四季様が寝ておられる間
一番心配していたのは間甯さんですよ~」

「う、うつせえうつせえ！嘘だよ四季ー！とつとと死ねばいい、と
か、私の手でどどめ刺してやるつか、とかずつと刺つてたんだから
な！」

「ふむ、それでかいがいしく頭の濡れタオルをこまめに変えてや
つたり、30秒に一回『大丈夫か、こいつ！死んだりしない、よな
……？』とか訊いていたのか。実に興味深いな
「そこ、黙りやがれ！」

「やつやまあでうるやくお兄ちゃんの心配してたのは誰だった？」

病院連れて行つた方がいいのかな』って、あなたたちお兄ちゃんに毒盛つたの忘れてそんなことまで言つて……」

まあ、調べて体から毒物が検出されたら間違いなく間甯ちゃんたちは警察の『厄介になるだろ』つ。

「ち、ちが、あれは、その、ってか、毒つてなんだよ……ってああ、もう一…」

そう言って突っかかるうとするが、相手が四様なのを見て、うつ、と動きを止める間甯ちゃん。

……なんだか今日は間甯ちゃんがかわいく見える。こんな日本人に言つたらまた氣絶させられそうだけど。

「……僕は、どれぐらい眠つていたの?」

頭にある冷えた濡れタオルを手でとかしながら、訊いた。

「おおよそ4時間、現在時刻は9時でござります」

すぐに答えが返ってきた。他のみんなは時計を見たりしてるので、ずっと僕の方を向いて、正確な時間を言つた。すごいな、夜闇は。

「私の名前は十三夜月夜闇。完全を示す『望月』一步手前を意味します。料理以外で、私が失敗することはあり得ません」

自信満々にやつ言つ夜闇。

「へえ、さすがだね。……じゃあ、四様の外国行きとか止めたり……しないよね、やっぱり」

さすがに冗談言いすぎたかな。ああ、お兄ちゃんに任せるとか言

つておきながら、僕は何を……

「可能です」

「」「「え？」」「」

僕、四様、弥生ちゃん、間宮ちゃんの四人が同時に声を上げた。

「か、可能つて、び、どうやつて？ 神の運を持つ私でも、こので
れ」とは、……回避できなかつたのに……

「いえ、おそらく四様さんの運は發揮しています。私に会い、四季様が四様さんの外国行きを止めたい、そうおっしゃつたというだけでもうその願いはかなつたも当然。……まあ、四季様。私にご命令を。『四様の外国行きを止める』、と」

「ど、どうじよつ？、

「正直、夜闇さんまできると悪い。……でも、一体どうやつて？」

「あ、あの、夜闇。どうやつて、止めるのかな？」

なぜか、それを訊かなきや絶対にダメな気がして仕方がなかつた。

「いくつか方法があつます」

「いくつも方法があるの？」

「はい」

「言ってみて」

「了解しました」

いつたん息を切つて、夜闇はその方法を、語り始めた。

「まず、第一に。

四様さんを引き取つておられるという祖父母さん達一人を、亡き者に。そうすれば四様さんに外国に行けと強要する人間はいなくなるわけです」

さつきの僕の直感も、四様の運の内なのだろうか。夜闇の話を聞きながら、僕は思った。

「え、あ、その、つ、続けて?..」

あれ、なんで僕、こんなこと言つてるんだろう?

「第一に、外国におられるという能力開発の先生を亡き者にすることです。そうすれば目的がなくなり、祖父母さんも外国に行けと強要しなくなるでしょう」

また、訊いていてよかつたと思つた。もしなにも訊かずに止めてと命令していたら……

想像したくない。

みんなは急に頭角を現した夜闇の怖さに閉口し、何も言はずにいる。

「も、もつとないの?..」

できるだけ、安全なの。

夜闇にまじりやう、その意思をくみ取つてはくれなかつたようだ。

「第二回、四様さんを亡き者に。こゝへりなんでも、死体が能力を進化させるとは」

「本末転倒じやねえか！」

わりかし本氣で、間甯ちゃんが夜闇の後頭部をはたいた。よくやつた、とみんなも曰いてる。

「何をするのです？」

「何をするのですじやねえバカ野郎！ てめえをつきから黙つて聞いてりや物騒なことばっかりじやねえか！ てめえメイドじやなかつたのかよ！」

「今のメイドは戦闘するもののはうが多いと聞きましたが」「それは物語の中でのことだろ！ 本気にすんなバカ！」

間甯ちゃんが、なんとか夜闇の暴走を止めてくれた。

夜闇だけは、怒らせたらダメだ。

しだこ元氣なる部屋の中、僕は深く心、この言葉を刻みつけた。

第十話～平和な平和な金曜の夜！～

で、結局。

「……もつと効率的な方法があつたと思ひのです、四季様」

「てめえは黙つてろ、殺人メイドが」

「暴力女に言われたくありません」

「人殺し好きにも言われたかねえな！」

「私は殺人狂ではありません」

「じゃあさつきの提案なんだつたんだよ！全部人死に出でるじゃねえか！」

「仕方のない犠牲です」

「その犠牲の中に当事者混じつてどうすんだ！」

「別に犠牲になるのはあなたでもいいのですよ？」

「ああ！？ やんのか『ラア！』

で、結局、僕たちが四様のためにしてやれること、として決まったのは、

「あなたこそ。一発で泣きを見ても知りませんよ？四季様のお友達」ということで手加減ぐらうはしてあげますが

「んだと『ラア！かかつてこいやクソメイド！』

四様の実家に行つての直談判、といつことになつた。

まあ、ありふれているし、確実性があるし、何よりも死者がでない。」れはいいことだ。

「ええ、行つてあげましょ。お迎えが来るまで遊んでさしあげます」

「はあー？そりゃ」ひたちのセリフだクソメイドー・メイドを冥土に送つてやるぜ！」

「ぼけたつもりですか、暴力女。面白みに欠けます。まあ、人間性が欠けているんです、『冗談のセンスが欠けていない』という道理もありますまい」

「殺してやるぜ、クソメイドー！」

「どつちが殺人狂だか疑われるようなセリフですね。口には気をつけた方がいいですよ？自制できないようでしたらその口、縫つて差し上げましょうか？」

「ああー？てめえのむかつく口、一度と利けなくしてやるー。」

「どうせ明日は三連休で暇もしていたし、四様の家は観光地とも広く知れ渡つているのだ、これで行かない手はないだろ。」

「できるものならやつてみなさい、私の名前は十三夜月。料理以外は完全なのです！」

「やつてやるうじやねえか！」

それに、四様をいよいよ利用している祖父母の姿も、一度見えてみたかった。

「はう、あの、ふた、ふたりとも、あ、争いは、はふ、よくないです……」

「うるさい！」

「少し黙つていてください」

「はう、なんで聞いてくれないんですか……？　争いなんて、

「ここ」どちらもなこの……」「……」

「四様、君の家つて、どこに遊びにあるのかな？」

「え、お兄ちゃん、今それ遊び……や……」

「え？ 何か変なことでも？」

何言つてるんだろ？。今日も平和でいい夜じゃないか。喧嘩なんか起つてない、断じて起つていらないいい夜だ。

「ああ、うん、わかったわ。……ええと、熱海。温泉と海が有名

ね

熱海、かあ……

テレレ、テレーレー！

……みたいな場面しか思い浮かばない僕は、おっさんなのだろうか。

「……さて、準備しようか

「あ、は、はい……」

「……放つておいていいのかい？」

「何を？ なにも起きてないじゃないか

変なこと言つなあ、零ちゃん。何にも起きてないよ。そう、喧嘩なんて何にも起きてない……

「……わかった。では、準備を始めよつか

「そうね」

「そろそろ……へたばれ

「お前じゃ……早く倒れてください……」

なんかいい感じで勝負になつてゐる光景なんてまつたくない。ないつたらない。

「や、始めよっかー。」

僕達の三連休は、熱海で過ごすことになつた。

お金が妹持む、ところのが兄としては情けなく感じるのだけど。

第十一話～三連休の旅行計画～

「……すまん」

「すみませんでした、四季様」

「一人はなぜか、僕に謝つてきている。何故だろうね？」

「あはは、どうして謝るの？ なんにもしていないじゃないか！ 別に、謝らなくてもいいよ！」

「い、……もつ意地悪はやめてくれないか。頼む……」「普通にお叱りださって、お願いですから」

……むづ。

「なんで一人は喧嘩してるのー夜闇、君がめりやくちやな提案するからでしょー！」

「返す言葉もございません」

「おいおいおいーめえずいぶんと私の時と対応違つくね！？ 猫かぶりかクソメイドー！」

「間宮ちゃんー！」

僕が囁つと口を開ぢます間宮ちゃん。

「……わあったよ。で、いつ行くんだよ、熱海へは

「うーん、それなんだけじね、ビリやあればいいのかひょとわからんんだよ」

熱海へ行く、って目的はできたものの、そこまで電車で行くにしてもいくらぐらいかかるのか、とかそういう具体的なこと何一つわからんのだよな……

「その辺の事情なら大丈夫だ。ボクがいる」

零ちゃんが誇らしげにその小さな胸を張つて言った。

「どうこいつ」と?

「電車で行くのもいいだろ? しかしここから熱海まで行くのなら五人で万近くのお金がいるぞ。四季はそれほどのお金を移動だけに費やせるのか?」

無理。万単位のお金なんてすぐに使えるはずがない。

「だから、車で行く。車はボクが持つてるし、免許なら夜闇が持つているだろ? なにせ、完全一步手前、料理以外は完璧と公言してこりのだから」

零ちゃんが挑戦的な目を夜闇に向ける。

「お察しの通り、私は車の免許のみならず、ありとあらゆる乗り物に乗ることができます。戦車も乗れます」

そんなの乗れてどうするんだろう。

それを訊いたまた夜闇が残酷なことを言つたので、黙つておいた。

「なら、話は決まったな。どうせ三連休だ、じつへりと熱海を楽しもうじゃないか」

零ちゃんがきらきらとした笑顔でみんなに言った。

意外と、旅行好きのかもしれない。

「そうね。お兄ちゃんに私のことだけで來てもううつて言つのは申し訳ない気がするし。遊びの次いで、ぐらこがちょうどこのいわ

四様も特に文句はないみたいだった。

「……あれ、そう言えば四様、どうやつてこいつまで？」
やつと言えばどうやって来たのだら。

「電車よ」

「お金はどうしたの？」

「お金なら配り歩いてもいいぐらい持つてるの。株つて知ってる

？」

「いくら僕でも株ぐらことは知つてゐる。

「あれね、適当に会社選んだら勝手にお金が増えて行くの。私が選んだところは絶対に株価が上がるの。……それを何度も繰り返して、気が付いたら資産増えまくつて、小さな国なら買取できるほどになつたわ」

「……あれ、運とか特殊能力つて金儲けに使つたらなくなるのが定説っていうか定番なんじゃ？」

「まあ、やつこつわけで、お金ないあるわけ。おばあちゃんたちもそれで樂してゐる」

それなのに、まだ四様に能力を強くしりと。なんて勝手な。

「……では、明日明朝出発しましょ。零さん、足の手配よろしくお願ひします」

「任せられたよ。出発じるに間にかかるよういつとおく。ま、それまで旅行の準備としゃれこもつか」

「ねい」「
「はいー」

なんだか、楽しい三連休になりそうだ。

僕は旅行鞄を押し入れから取り出しながら、そう思った。

「……あ、あの……私、かばんないんですね……」

「はあー? なんでだよ?」

「ここには体一つできましたから……」

「服は?」

「抱えて持つてきた二着を洗い回します……」

「あ~うん、服は私のかばんに入れますよ。スペースなら余つてつかう」

「ありがと!」
「お、ねい……」

……まあ、とにかく楽しい旅行になりそうだ。

「……キミは熱海に何をしに行くつもりだい？」

「直談判でしょ？」「？」

「どんな談判をするのだらうか？参考までに聞かせてもらひえないだらうか」

零ちゃんがそう言いながら手帳に何やら書きこんでいる。タイトルは『研究手帳』とあつた。

「はい。まず、最初は建前として交渉を。一度でも断つたら、力づけて交渉を」

「具体的には？」

書き込みながら、さながら新聞記者のよひに記く。

「具体的には、ブラックジャックなどでの殴打や、ナイフなどの鋭利な刃物で皮を剥ぐ、などです」

「……実に拷問に近いね？」

「はい。最終的には拷問になると思います。一時間もやれば外国人四様さんをやられなどとこつ考えはなくなるはずです」

「ふむふむ……」

相変わらずブラックなことを平然といつ夜闇も、それを熱心に書かとめる零ちゃんも、僕は放つておいた。

「うん、楽しい旅行になりそうだ。……なんだか、最後の一人で自信なくしたけど。

第十一話／出発直前また喧嘩！？

明朝2時に、僕は起された。

眠っていたのは僕と四様だけで、他の四人はずっと起きていたようだ。

何をしていたのか訊いてみたら帰ってきた答えは実にかわいらしいもので、旅行がわくわくして眠れなかつたそうだ。

「さて、いろいろが四季、四様。車はすでに届いているよ」寝ていないはずなのに元気そつた零ちゃんにそう言われて、僕はアパートから出た。

「……なにこれ」

アパートの駐車場に、大きな車があった。

それも、十人ぐらいは乗れるんじゃないかつてぐらいの大きな車だ。

「ボクの私用車だ。研究所に無理言つて持つてこさせた。あやうくとらえられかけたけどね」

そう言えば、零ちゃんはどこかの研究所に属していて、零ちゃんは僕を研究すると云ひ名田で口の中に逃げて来たんだつた。……悪いことさせやつたかな……？

「気にするな。ボクは手に入れたかったからこの車を手に入れたし、行きたかつたからこの車を手配させた。キミは何も悪くない」

そういう気遣いができる零ちゃんって、本当に大人だよなあ……

体は子供のままだけだ。そういえばいくつなんだろう？高校に来ていたってことは高校生であることは間違いないんだろうけど……

「じゃ、じゃあ、行きましょうつか、四季君ーふ、一人での、初めての旅行、ですね！」

「おい、弥生。一人つきりじゃねえからな？勘違いすんなよ？」

「は、はう……」

おどおどしながらも勇気をだした弥生ちゃんを、間宮ちゃんが忠告する。……何でこんなに起こってるんだろ？、間宮ちゃん。

「では、まいりまじょつか、みなさん、四季様。では四季様、助手席に……」

「おい！？」

「あのー？」

「ああー？」

夜闇が僕を助手席に座らせようとしたとたん、他の二人から猛反発。

「おいおいおいおい、夜闇君、まさかキミ四季の隣に座るつもりじゃあるまいね？」

「そうですが、何か？」

「な、何かじゃ、ないです！な、なんで夜闇さんが、四季君の隣に……」

「私が運転するからですが、何か？」

「あのなー行先知つてんのは四様なんだぜ？普通なら四様を助手席に乗せるべきだろ？がー！」

つまり、僕が助手席に座ることに対する対して、もめていぬひしき。
そんなに助手席に座りたいのかな？

「……お兄ちゃんって、結構一^イブチ^チン？」

-
は
?』

いや、なんでもないわ。

四様は諦めたように、首を振つた。何か僕したかなあ……？

あああああああ！！

心のせりたりとせ靈ひやんと弥生ひやんめを勧も込んで、

そろそろ、日が昇る。
時刻はだいたい6時ごろ。

「あの、みなさん朝ご飯にしませんか?」

「そうだな」

「おひ」

「そうですね」

「いいわね」

「いいね」

「いいね」

僕らは弥生ちゃんの言葉に賛成する。

僕は助手席、弥生ちゃんは僕の後ろ、その横に間宮けやん、その隣が零ちゃん。

そして、後部座席には、夜闇が座っていた。

「……最後の1回飯になるかもしないしね」

「もう、お兄ちゃん、私の運転で事故すると困つてるので……思つてゐるよ……」

最終的に、なぜか四様が運転することになったのだ。

『私には神様の運がついてるわ。よっぽどのことがないかぎり事故なんてしないわよ』

それが、四様が運転席につけた理由の全てだつた。
これで怖くない人間がいるはずがない。

……と、思つていたのだが。

「わあ……すごいきれいなお料理ですね……四季君が作つたんですか?」

「ほんー四季は料理だけはうめえんだよ。私は毎日食つてたから

わかるけどな！」

「自慢かい? その程度のアドバンテージ、すぐなくなるさ。なぜならボクらはともに過ごしてこるのであるからね」

「その通りです。四季様のお料理を食したことが有利になるなど……」

そんな風に、僕の作つたお弁当を仲良くわけつつ言いあうぐらい

「が、かんばね布くがーの
はなしへいた

僕はたまらず訊いてしまつたけれど、

卷之三

「私もそんなに怖くねえな。四様の力が本物のはずつと前から知ってるし」

「ボクもそう思つ。多分どんなプロドライバーが運転するよりも安全だと思うね。なんたつて神の御加護があるんだから」

意外にも、みんなはなじんでいた。

「ね？怖がつてるのはお兄ちゃんだけだつてー。」

僕の心の叫びは、心の叫びなのでもちろん誰にも届かなかつた。

第十一話～出発直前また喧嘩～？～（後書き）

こんにちばな、作者のコノハです。

……すみません、一回更新がなかつたのにはわけがあるんです。
熱出して寝込みました。

はい、完全に風邪ひいて、今でも喉^{のど}が痛^{いた}いながら書いて
います。

でも、クオリティ（そんなのあつたのか）はこいつのままを保証
？しますので、どうぞ気楽にお読みください。

では、次回からはまた氣合い入れて毎日更新していきますか。

駄文散文失礼しました！
ご愛読感謝です！
また次回！

第一二三話へ代わり果てた四様の実家！？

……風が、なびく。

きれいな風だ。

色はきつと、薄い緑色なんだろうな。

私は、ふとそんなことを考える。

ここは熱海直前のサービスエリア。長旅、というほどではないけれど、結構長い道のりだったので少しへトイレ休憩、というわけだ。

……ふふ、お兄ちゃんったら、こんなところまで来てトイレ休憩もなにもないでしょ！うこ……

お兄ちゃんは、私をちょくちょく休ませるために、いつもやつてサービスエリアに入るよう提案してくれた。

私は全然大丈夫だつたけど、お兄ちゃんの好意を無駄にするのもアレなので、黙つて聞いていた。

……お兄ちゃん、怒るかな。

実は私、たとえ眠つていたとしても、ここに辿りつけたであらうといつ自信がある。

もう、私の天賦の運はもはや能力と呼べるまでに昇華している。外国に行くのだって、能力を強めるためじゃなくて、もつと広い土地で豪遊するため。私の能力で手に入れたお金で、なんでもする。私も、お金に限らずなんでもできる。

望めば手に入り、願えれば叶う。

でも……こんな能力持つてたって、なんにもうれしくなかつた。

おじいちゃんとおばあちゃんのところで使わされる能力は、お金儲けにだけ。

人助けなんか、使わせてもらえない。全然、幸せじゃない。

……でも。

お兄ちゃんのところに来て、全然違つた。

お兄ちゃんと、あの女人の人たちと一緒にいるだけで、私は幸せになれた。

あれが、私の幸せだつた。

……お兄ちゃん、怒るかな。

私は、もうすぐ神様に近づくとしている。
その能力を使って、お兄ちゃんとあの女人の人たちと一緒に、ずっとずつとずつとずつと暮らしていくみたい、なんて願おうとしてるつこと知つたら。

「おーい！四様！いくよー！」

お兄ちゃんだ。

お人好しで、鈍感なお兄ちゃん。

「うん…すぐ行く…」

私はお兄ちゃんに駆け寄つた。

「じゃあ、あとひょっとだ、もう少しだけ、頑張ってね」

「うん…」

全然かんばつたりはしないけど、頑張らなくともできるナビ、私はそう言っておいた。

できないことをするから、人は褒められるのだ。できないことを頑張つてやるから、ほめられるのだ。

……じゃあや、じゃあ。

なんでもできる人って、どうやつたら褒められるの？

もうじまじまの旅路を終え、僕らは田的池、熱海へとたどり着いた。特に特筆することはなかつたけれど、とても楽しい旅程だった。

祖父母の家のすぐ前で車を止めると、四様が降りて、他のみんなが降りる。

「……ついたよ、お兄ちゃん」

「ありがとう、四様。よく頑張ったね」

僕は車から降りてそつそつと褒めるけど、四様はあんまり喜んでくれなかつた。

「……どうしたの？」

「なんでもない。……なんでも、ない」

四様はうつろな瞳でそう言つだけで、ふいと祖父母の家へと向か

つた。

「うわ、……すげえ！？」

間宵ちゃんが祖父母の家を見て驚くのも、無理はなかつた。

「……これが、四様さんの運の結果、ですか」

そう夜闇がつぶやいて、氷の表情に驚きの色を浮かべるのも、無理ないだろう。

「……はう……」

弥生ちゃんが言葉が出ないのは仕方ないだろう。小市民過ぎて、このスケールについてこれないのだ。僕もそつだし。

「ふむ、これが四様と四季の祖父母の家か。くすくす、いかに四様の運を悪用して私腹を肥やしてきたのかが一瞬でわかる構図だな？」

零ちゃんがあまりにも適切な分析をするのも、今はほとんど聞こえていなかつた。

たしか、僕は一度この場所に来たことがある。そつ、ここですまないか、と誘われるときにお試し感覚で数日泊つたことがあるのだ。でも、その時の祖父母の家はどこにもある木造住宅で、時代劇に出てきてもなんら不自然じゃないほどの年季の入った家だつたはず。

こんな、絢爛豪華で城みたいに大きな家、僕は知らない。

白亜の城、ところものはヨーロッパ地方にあって初めて美しいのだ。こんな日本の住宅地のど真ん中にあっても、嫌味なだけれどいじやない。

そんな他人の気持ちはお構いなしなのか、とにかくお金を使いたくてしようがないのか、無意味なまでに、金や銀がいたるところにちりばめられている。

もとは白亜の城だったのだろうが、今は半分金閣寺並みに金が使われている。

「……」「」

四様は無言でうなずく。

……誰だつて、こんなところから出で行きたくなる。

「……」「お兄ちゃん

きゅつ、と僕の服の裾をつかんで、うつむいたまま四様が言った。さつきまで喧嘩していたことをすっかりわすれて、後ろの四人も仲良くなっている。

「うん、行こうか、みんな

「おうー」「
「はい」「
「はいー」「
「ああ」

さあ、直談判だ。

絶対に、四様を外国になんてやるもんか。

僕が四様を、守るんだ！

第一二三話へ代わり果てた四様の実家！？（後書き）

人は、お金を持つと変わるそうです。
おどき話に、よくそんなとえが出てきます。

鶴の恩返し、かぐや姫、その他もうもう。

僕が思うに、世界で一番広く使われる魔法の道具は、お金なんじ
やないかと、思います。

ただの紙、ただの金属が人の命をも左右するほどどの価値を持つな
んて、魔法としか思えません。

お金の魔力、そんなものがあるから人は狂うのです。
でも、お金がなければ人は何で価値を測ればいいのでしょうか？

そんな、一律背反。

お金は人を狂わす。けれど、お金が人を救うことができるのも、
また事実です。

……僕は狂う側になるんでしょうか、それとも、救う側になれる
んでしょうか。

……もしかしたら、救われる側、施される側になっているかも、
知れませんね。

第一四話～交渉開始と戦闘開始！～

インターフォンを押す。
もちろんカメラ付きで、しかもそれは常時録画だ。誰が来たのか
あとあと確認できるようになつてこる。

『誰だ？』

あなたこそ。

確かに祖父の声だつた。でも、態度が全然違つ。昔はもつと、優
しそうだつたのに。

「……僕は、秀句四季と言います。覚えてますか、おじいちゃん」

『……まあ？覚えとらんな。わしの孫はただ一人、四様だけじゃ

その声にも欠片も愛情は感じれなくて、なんだか急に悲しくなつ
てきた。

「……おじい、ちゃん」

『四様か。こいつは誰じや？』

「私のお兄ちゃん。……ね、入れて？少し、お話があるの。聞い
てくれなきや、能力の質が落ちちやうよ？」

そう言つた四様の顔は苦々しそうだつた。

多分、四様だつて自分の運を盾にしたいわけじゃないだろう。
でも、しないとなにも聞いてくれないと、四様は思つてゐるのだ
らう。

『……そ、うか、なら、入れ』

『なら』

その言い方に、心底怒りがわいた。
なんだよ、なんだよその言い方！

なら？なら、だつて？四様の価値は、能力だけか？神様の運だけ
か！？違うだろ！なんで、そんな風に四様が運以外に意味がないな
んて言い方をするんだ！

「……いー、お兄ちゃん」

「……うん」

もう、絶対に僕は決めた。

こぞとなつたら夜闇をけしかけるぐらいいの気持ちで、僕は四様に
ついて行つた。

絶対に、四様を守る。この子はここにいちゃダメだ。

無意味に大きくて金きらな玄関を通り抜けると、僕たちは客間に
通された。

金のふすま、金の畳、金、金、金……

そんな金が全体を埋め尽くす、20畳ぐらいいの客間に、僕たちは
通された。

広い部屋の真ん中には玉座みたいな仰々しい椅子があつて、その前に僕らは並び、座っている。椅子からの距離も、遠い。まるで王様に謁見しに来てるみたいな錯覚をつけてしまつ。

「……広いね」

僕は感想を漏らす。他のみんなは、どう反応していいのかわからず、黙つていろいろだった。

「……広いよ。……でも、広すぎるよ」

四様の悲しげな声が、広すぎる部屋に響いた。

「……で、今までどこに行っていたんだ、四様」
ガラリと重苦しい音とともにこの部屋に入ってきたのは、祖父。

でも、体中に装飾品をつけて、きらびやかな服を着ている祖父の態度はどうこまでも尊大だった。

「……おじいちゃん、僕は」

「私ね、外国に行かない」

すつぐと立ち上がり、四様は直言した。

「……なんじゃと？ それがどういう意味か、わかつておるのか？ 今まで育ててもらつた恩を、忘れたか？」

「何言つて」

問い合わせようとした僕を、四様は止めた。

「お兄ちゃん、私がやるから。……一人で、できるから」

そう言って、一步、四様は前に出た。僕からは、四様の顔が見え

なくなる。

「な、何をするつもりじゃ、因様」

「黙つて。おじいちゃんは知つてゐるよね、私は望めばなんでも手に入るつてこと。だからこのおつかまこさんにも大きくなつて、おじいちゃんたちはそんなにもきれいな服を着てる。」

「ねえ、養つてるのは、どつち? 私? それとも、おじいちゃん?」

声からは感情が読みとれない。……因様は何をしようとしてるんだ?

「……答えないの? いいよ。別に。……もつ決めた」

「な、何をじや?」

四様は質問に簡単に答えた。いつそすがすがしさまで感じれるほど、軽快に。

「決まつてゐるじやない。」の家は、滅ぶべきよ。完膚なきまでに、完全に。……お兄ちゃんは、初めてだよね?」

ぐるりと振り向き、僕たちに微笑んで四様は、どいか危うさがあつた。

「何が?」

「私が世界に願つていい。じや、始めるよ」

ぐつ言つと、四様は両手を天に掲げた。

「『世界よ世界、聞いてちょうだい。私の願いを、聞いてちょうだい。私はもうこんな家うるさり。もうこんなところにいたくない。でも、おじいちゃんは居るといつ。もつ嫌。嫌なの。だから、だから』」

世界よ世界。この金にまみれて、意味なく広いこの家をどうか壊して』」

変化は、起きない。

「……三田、ぐらいかな。三田ぐらいは、この家はこのまま。でも、もうこの家は滅んじやうよ。外国行くお金も、残らない」

悲しそうなのは変わりなかつたが、どこかすつきりした表情の四様。

「な……、な……なんてことを……貴様か、四様をたぶらかしたのは！誰か！誰か！こいつらを……殺せ！」

わなわなとふるえ、僕を指し、そして命じる祖父はもう、田の焦点が合つてなかつた。

自分がさんざ利用してきた能力に牙向かれ、恐れのあまり正常な判断ができなくなつたんだ。

「……お兄ちゃん」

「大丈夫だよ。……ね、みんな？」

心配そうな表情の四様に微笑むと、皆を見回す。

「おうよー！久々に暴れるぜえ！」

「四季様の命令とあらば、私はいかなることでも実行します」

「……ふむ、実験したい道具が2、3あつたな。それを使うか」「わ、私も、が、ががが頑張ります！」

いや、弥生ちゃんはいいから。

「…………おおおおおおおおおおーー！」

大量の用心棒らしき人間が、この広い部屋に押し寄せて來た。

「行くぜ行くぜ行くぜー死にたくねえやつあ裸足で逃げ出せー命だけなら、助けてやんぜー！」

真っ先に飛び出し、一番近くの用心棒に鋭い蹴りを入れたのは、やっぱりというか、間宵ちゃんだつた。

「……それでは皆様、四季様のご命令です。死んでください」
メイド服から無骨なナイフを取り出した夜闇は、手当たり次第に殺そうと、手にした武器を振るつて……つて！

「夜闇、殺しちゃダメだー！」

「了解」

用心棒の一人の首にナイフが滑り込む直前、夜闇は手を返して気絶させることどめた。

ま、間に合つた……。

「……さて、始めようか」

零ちゃんは呟くように言つと、白衣から何かを取り出し、それを用心棒たちの群れに放つた。

第一四話～交渉開始と戦闘開始！？～（後書き）

第一五話～戦闘終了と腕試し～

ボン！

部屋に小規模な爆発が起ると、数人の用心棒が倒れた。

「ふむ、『スタンボム』成功、と。……まあまあの出来だな」「おいてめゴラ！」

スパコーンと小気味いい音を立てて、零ちゃんは後頭部をはたかれた。

はたいたのはさつき爆発が起きた近くにいた間甯ちゃん。

「むう、何をする」

「何をする、じゃねえ！ てめえ私も巻き込むつもりだつたろ！？」
「キミみたいな野生児にでも効くのか試してみたかったからな、巻き込まないつもりとは言えないな」

「てめえもこつらと一緒に私の拳の餌食になるか？」

女の子とは思えないほどの殺氣をまとわせて零ちゃんに詰め寄る
間甯ちゃん。

その後ろを、用心棒の一人が迫る！

「間甯ちゃん、危ない！」

僕は思いつきりそいつを蹴のりつと、走って

「やあ！」

悲鳴の途中で、用心棒が倒れた。

「は、はひ…… や、やひひやひたです……」

手にメリケンサックはめた弥生ひやんが、茫然と言つた。

「やるじやねえか

「……ど、どつかりさんなのを?」

てか、なんで弥生ひやんが?

「わ、わた、私、如月戦闘術、つて、う昔からある武術を、
その、たしなむ程度ですけど、や、やつてます!」

「如月戦闘術、ねえ」

「……ふむ、如月戦闘術、か

「知つてゐるの?」

「ああ。殺人術が多い実戦仕様の武術だな。暗殺や集団戦も想定
していく、ときたま軍隊でも使われることがあるほど完成度は高い。

武器を使うことに抵抗を抱かず、とにかく『勝利し、生き残る』
と『』を念頭に置いた武術だ。

しかし、最近は実戦が減つたから田本でかなりすたれたがね」

「ああ、そりですそりです!その通りです……すいこですねえ

~零さんは

「まあ、そんな感じだ、博学だな、零は」

弥生ちゃんはそう言つて零ちゃんの頭をなでるナビ、その手には

まだメリケンサックがはめられていた。

……なんだか、弥生ちゃんが怖い。

「……むへ、ボクは子供じゃなござれ。せり、敵だ。戦おつ！」

「おひよー。わざとやつてしかけられましたと遊び、ぞーせつかく熱海に

来たんだ、温泉だ！」

「はいです！」

みんなは仲良くなつたと、各自自由に戦っていく。

夜闇は一人黙々と数を減らしていく、もうすぐで半数を彼女一人が倒したことになる。

「おひよーおひよーおひよー！」『裂波昇龍脚』…

間宮ちゃんは闘氣をまとわせた蹴りで相手を上空にかちあげた！

「ほりよ、『追撃降竜拳』！」

落ちて来た敵に闘氣をまとった本気の「ぶしで地面にたたきつけた！」

「……ほりよ、ためえり。かかるでコイや。片端から私の拳、脚の餌食にしてやられー！」

一撃すると、敵は一歩、二歩とがつた。
しかし、それは失敗だった。

彼らはあまりにも間宮ちゃんの威圧が強すぎて、気付かなかつたのだ。

後に、ナイフを構え田を光らせている夜闇と、殺意はないがバットを持ち、何やら居合の構えをしてずっと待っている弥生ちゃんが、いることを。

「行きます。我が名は十三夜月夜闇。主人四季様の命令をお守りする、従者です」

「い、行きますー私は如月弥生。四季君を守る、い、い、いこ、友達ですー！」

その言葉で、間甫ちやんを恐れて下がつた用心棒が、一斉に後ろを振り返る。

その、刹那。

「『月牙十三夜』」「『居合・瞬速散撃』！」

キキイン！

一瞬でいくつもの銀閃がひらめき、用心棒たちは全員もれなく倒れ伏した。

「……」命令、完遂しました、四季様

「や、やったーできた、できたよ『居合・瞬速散撃』！練習だつ

たら何度もやってもダメだったのにー！」

……弥生ちやんだけは戦えない側だと思つたのに……正直夜闇といい勝負なんじゃないか？

「……おこおこおこおこーおこ、弥生。……みびつじだ

「何ですか？」

あ～あ、出りゅうたよ間甫ちやんの悪い癖。

「勝負しろ。てめえの如月戦闘術と勝負がしてえ」

強い人間と戦いを申し込む、つていう悪い癖が。

「……いいですよ、私も間宵さんの戦い方には興味ありましたしああもう、弥生ちゃんもしっかり考え方武人だし！」

僕だけか？僕だけがこの中で戦えないのか！？

「……お兄ちゃん、ありがとう

「……僕は何もしてないよ。お礼ならあの四人にいいなよ」

四様も戦つてなかつたな。……でも、戦えないといふわけじゃないと思ひ。結構筋肉あつたし、身のこなしもそれっぽかつた。

「……言つて來たよ。あとは、お兄ちゃんだけ」「そりなんだ。……どういたしまして」

「おらあ、行ぐぞ！『龍頭直突』！」

「行きます！『居合・鈍速強撃』！」

僕と四様が会話している間に、すぐ目の前では闘氣の拳と居合のバットが激突していた。

「……夜闇、そろそろ旅館行こうか。一人を止めてきて

「了解」

てくてくと、ゆつくりとした調子で夜闇は激戦を繰り広げる二人の元へ行き……

「 もやー。」
「 もー。」

夜闇は一瞬で一人をのすと、やるやくと云ふもつて僕たちのところまできた。

「 任務遂行しました、四季様」
「 ……うん、車に連れ込んでしまって」
なんかこの会話だけ切り取れば僕、完全に悪役だけじゃね……。

とにかく、これでこの家にもつ用はない。それは四季様だつて、一緒だらう。

第一六話／戦闘後の露天風呂！？

僕たちが泊るのは、いい感じな旅館だった。
雑魚寝で、食事も質素なものが多いけど、安いし、何より気が楽だ。

旅館に到着早々、四人はお風呂に入ると言つてきた。まだお昼前なのに。戦つたからかな？

「……さて、と。私は風呂にはいってくるけど……四季、覗くなよ？覗いたら殺すからな！？」

「私は湯浴みさせていただきます。……では

「あ、あのあのあの！わ、私、お、お風呂入つてくる、けど……の、のの、覗きたか、たかつたら、……その、覗いてもいいんだ、よ？」

「……はあ。何を言つているんだいキミは。そんなことしたらボクらも一緒に覗かれる。そんのはごめんだね。じゃ行くよ。四季も、この子のこと本当に受けれるなよ」

そして一瞬うちに、四人が消えた。

「……ふたりきりになつちやつたね、お兄ちゃん

「そうだね」

なんだか、ありえないことのような気がする。もしかしたら四様が一人きりになるよう望んだのかも知れない。

でも、僕は四人が気を利かせてくれたと信じたい。

「私、帰るとこなくなつちやつた。……」この年で、もうホームレスだよ

「……」

「私、家族を不幸にしちやつたよ。……私、悪い子だよ。私、私

……」

四様の浮かない顔を見ていると、何も言えなくなる。

「四様のしたことは、確かに悪いことなのかも、知れないね」
でも、そんなこと、聞ついている場合じやない。妹が苦しんでいる
んだ。頑張らなきや。

「でも、祖父母達がしたことも、悪いことだよ。今まで四様をさ
んざん利用してきた。……その報い、とまでは言わないけど、復讐
の権利ぐらいあるわ。……こんなこと妹に言つ僕も、悪い子だね」

「……お兄ちゃん…………あ、ありがとう……」

ん。少しだけだけば、顔色が戻つたかな。

「……ねえ、お兄ちゃん。一緒に住ませて、もうえないのでかな
?」

おずおずといつた雰囲気で、四様が言つた。何もいちいち言わな
くても願えば手に入るだろ? 、四様はそれをしなかつた。それだ
けで、もう充分に四様はいい子だ。

「いいよ」

即答した。

「……いいの？」

「いいさ。たつた一人妹の頼みを断るわけないよ！」

そう僕が言うと、少しだけ晴れやかになつた四様は、意気揚々と、部屋を出ようとする。

「どこ行くの？」

「お、お風呂！ 視いたら知らないから！ 超絶悶絶級の不幸、お見舞いするからね！」

そう言つてパタパタと駆けていく四様を見ていると、とてもほほえましい気持ちになる。

「……僕も行くかな」

ゆつくりとした足取りで、僕はお風呂場に向かつた。

かぽーん……

そんな音が聞こえてきそうなほど、ゆつたりとしたお風呂場だつた。

露天風呂、という奴だ。

ここから海が見えて、そのきれいさがお風呂間に風呂に入った異和感を完全に吹つ飛ばしてくれる。

「ああ……来てよかつた……」

もしこの光景がなかつたとしても、僕はそつ言つただろう。
なんたつて、四季を救えたのだ。

それだけでもひ、十分すぎるほど十分だつた。

「…………何すんだ夜闇！……おこいいー。四季がいないからつて、おい
…………一」

と、僕がくつひこでこると、隣から声が聞こえた。

え……

じうも、ここは薄いついたてを阻んで隣同士で男女が分かれてい
るよつだつた。

露天風呂はそんなにスペースがとれないのはわかってるけど、そ
れでもやつぱりなぜかおいおい、と思つてしまつ。

「…………なぜ、普段はあなたは平べつたいのにここではこんなにも
あるのですか。四季様に」奉仕するためですか」

「違え！？激しく違つよ夜闇！？つてか、そもそも何言つてんだ
よクソメイド！」

「私は今メイドではありますん、ただ純粹に四季様を好く者です

「うわあ……聞いてるひつちが恥ずかしくなる告白だつた。
…………か、なんで？なんで夜闇は、僕のことが好き？

「…………ほひ、それは実に面白いことを聞いたな。ふむ、ここは裸
の付き合ことこうやつだ、ボクも想いのだけを……おや？……ふむ、

やはりやめておいた方が

何かを言いかけた零ちゃんは、急に一人念願して、言葉を区切つた。

「どうしてですか？」

まるで僕の心を代弁するかのように言った弥生ちゃん。

「ふむ、……そうだね、……どうたとえようか……うん、このそばに神様がいるんだよ、だからだね」

「神様？ そばに？」

神様の運がついた女の子、四様が訊いた。

「ああ、そつぞ。神様だよ。……神様って、何をするかしつてるかい？」

「それはもちろん……あつ！ そつぞ！」

「わかつちゃこましたよ、私

へえ、早いなあ。四様も弥生ちゃんも頭の開店結構早いな。……で、一体どういう意味なんだろう？

「間宮さん、夜闇さん、やめておいたほうがいいですよ。『神様』が聞いています

「はあ！ 何言ってんだよ弥生。神様なんていやしねえんだよ」

「そうです。私の神は四季様のみ。他の神々は必要ありません」

「いや、この場においてはいるのだよ」

「ますますわかんねえんだけどー！？」

「わかりませんが」

「へへへす……わからないなら、わからないままいいです。続
けといくだせー」

あ、あれ?なんか弥生ちゃんイメージ違つ……

「……弥生、なんか落ち着いてねえか?いつもと違つて言つつか
……」

間質ちゃんの質問に、弥生ちゃんは、

「私はね、好きな人の前だと、どうしても緊張してしまつんです
よーーー。」

必要以上に叫んで、答えたのだった。

……『神様』って一体何のこと？

第一六話～戦闘後の露天風呂！～（後書き）

こんにちは、作者のコノハです。

さてさて、そろそろシリアル部分も終わり、妹も増えてまたまた
どうたばたやつていきます！

……さて、ところで、零がたとえた『神様』、なんのことかわ
りますか？

では、駄文散文失礼しました！

ご愛読感謝、また次回！

第一七話～比喩の真相と四様の気持ち～

私は熱海の露天風呂で、裸で取つ組み合ひのけんかをしている間。宵さんと夜闇さんを眺めながら、零さん、弥生さんと話をしていた。

「……神様、ね。よくたとえたわね」

私、本来なら敬語を使わなきやいけないはずなんだけど、弥生さんも零さんもいいつて言ってくれた。私はそれに甘えることにしたんだけど、敬語を使わないおかげでより親しくなれた気がする。

「ははは、昔見たのをそのまま言つたまで、だよ。たいしたことじやない」

でも、そのわりに考え込んでたから、きっとこれは謙遜なんだろう。

「あはは、でも『神様』、かあ……本当に、よくたとえましたね……」

…

弥生さんが遠い目をして相槌を打つ。

弥生さん、聞いたところによるとかるいあがり症で、好きな人の前だと、どうしても緊張してどもつたりするらしい。が、そうでないならしっかりしゃべれて頼れるお姉さんだ。

「弥生さん、ぶつつこだつて言われません?」

嫌味で言つたわけではないのは、一コアンスでわかつてくれるだ
ら」。

「いえ？ 私、誰にでも、ってわけじゃないですから。私がああな
つたのは、人生で四季君が初めてでした……」

なんと、初恋だったのか。

……と、いつことは？

「……零さん」

「なんだい？」

「お兄ちゃんのこと、好きですよね」

私が訊くと、零さんは顔を私に寄せて、囁くよつと語つた。

「当たり前だ、そうでなければわざわざ研究所など抜けだししてく
るものか」

すぐに離れて、シーカルに笑つ。

「……そうですか」

と、こりこりとは。

間寛さんは、……わからない。でも、お兄ちゃんのことを見にか
けてる。

夜闇さんは、お兄ちゃんのことが好き。

弥生さんももちろん、お兄ちゃんのことが好き。

零さんも、同じく。

そして私も、…………どうなんだらう。

私、お兄ちゃんのこと好きだ。

でも、それって恋愛感情だらうか？

違う、かもしねない。

だつてお兄ちゃんと一緒にいても胸なんかときめかないし、お兄ちゃんのことで頭がいっぱいになつたりなんかしない。

でも、恋かもしねない。

お兄ちゃんに話しかけられたら胸が暖かくなるのは事実で、一緒にいて安らぐのもまた、事実だった。

人によつては親愛の情だと言つのだらう。

でも、私にとつてはこの気持ちは恋に近しい何か、なのだ。

家族愛とも、兄妹愛とも違つ何か。

これつて、どんな感情なんだろう？

知りたい、つて願えれば知れるのかな。

こればっかりは、わかんない。

「おい、いらー神様つて何のことだよーおいー待ちやがれー……つて、いい加減離せクソメイドーなに発情してんだー！」

「間育さんはいつもいつも四季様と共にいました。……もしかたら、四季様の匂いが移つてないか、……」

「移ってるわきやねえだろ！気持ち悪いこと言つなーてめだから、離せつてんだるー！」の、発情メイドーとヒラシコジンサマに尻尾振つてこいやー！私に抱きつくなー！」

いい加減にのぼせて来たので、私たちも抱きつこうぜ」お風呂場を出ました。

「知ってる、間宵さん、夜闇さん。神様ってね、なんでも見てるし、聞いてるんだよ？」

「お兄ちゃんは見ていないだろ？」「聞いてはいるはずだ。」

全ての会話を聞きとる神様。

私の神様は、いつも私に味方する。
でも、この神様だけは、私の思い通りにならないし、してはいけないと思つた。

「……………」

「……………」

僕がお風呂からあがむことに、弥生ちゃん、零ちゃん、それと四様が先に部屋でくつろいでいた。
それからしばらく僕らは話しこんで、気が付いたら結構時間がたつていて、んで、あんまりにも遅いんで心配した弥生ちゃんが間宵ちゃんと夜闇の様子を見に行つて、帰つたらこうなつた。

「……………またく、何をやつてゐるんだい、キミたちほ。のぼせる

まで喧嘩するなんて、バカじゃないのか?」

零ちゃんが適切な応急処置をしながら、うんうん唸る一人に厳重注意をする。

一人はせっかくの休日、それも熱海で過ごす三連休の半日を、寝て過ごすこととなつた。

まったく、お風呂の時、ひりゅうじ仲良くねればいいのに、ねえ?

僕はそう思いつつも、零ちゃんに言われて新しい濡れタオルを用意するのだった。

……明日もこんな調子なのかな?

第十八話／休みの終わり、四様の同居！？

唸る一人を無視して遊ぶのも気がひけたので、僕らは今日は大人しくここで休んでいることにした。

僕はそうじやないけど、間宵ちゃんや夜闇、零ちゃんや弥生ちゃんまでもが四様を助けるために戦つて、その分きっと疲れているだろ？

「……まったく、呑気な。誰のせいでこうなったと思っているんだろうね」

愛おしげに一人の髪をなでながら、浴衣姿の零ちゃんが言った。

「そうですよーせ、せっかく四季君とい、一緒にお出かけできると、思つたのに……」

おなじく浴衣を着た弥生ちゃんは僕をちらりと見て、顔を真つ赤にした。……どこに行くつもりだったのだろう？

「……まあ、それは冗談だとして。正直言つと、ここで休んでいた方がいいかも知れない。間宵と夜闇はある趣味の悪い屋敷で一番の功労者だからね。……今日もしのぼせなくとも、いつか無理が來たと思う。」

ただでさえ必要以上に緊張する旅先だ、休みすぎるといふことはないと思うがね」

ハンガーにかけられた白衣は伊達じゃないのか、的確に一人の状態を分析する零ちゃんはさすがと言えた。

「……そうね。私のために、戦ってくれたんだからね
申し訳なさそうな顔をして、四様が言った。

「何を言つてこる。キミはつこいでだ。……そつ、本来の目的は
ここに遊びに来ることなのだよ。だから、キミは氣にせず旅を……い
や、最後の故郷を楽しむんだ。いいね？」

この中で一番幼そうな外見してゐるくせに、言つてることは一番ま
ともだ。

それとも、僕らがたんに子供っぽいだけなのか。……たぶん、後
者だと想つ。

一見ひどいことを言つてこむように聞こえるが、それは零ちゃん
がついた四様に気にさせないための嘘。

みんな四様のためにここに来たのであって、遊びなんて二の次だ。
僕と四様は兄妹だ。僕がわかっていることを、四様が理解してい
ないはずがない。

だから、

「……ありが、……とう……」

かするのような声でお礼を言つた四様に僕らは。

「――どうこたしまして」「――

優しく、そづり言つた。

それから二日、元気に回復した夜闇と間宮ちやんと一緒に僕らは熱海を心ゆくまで楽しみ、そのままのテンションでアパートまで帰ってきた。

新しい同居人、四様と一緒に。

ちなみに。

四様の祖父母がどうなったかというと、僕たちがアパートに帰る日に警察に捕まつた。四様を利用していいだけでは飽き足らず、いろいろこりと黒いこともやつていたようで、それが表にでてしまったようだ。……いやあ、やっぱり四様はすごいね。

で、その事件の僕の感想。

お風呂、覗かなくてよかつた……。危うく死んでたところだった。

めでたしめでたし、かな？

「お兄ちゃん！」の人たち早く止めて！早くしないと死人がでちゃう！」

熱海から帰った次の日、つまり三連休明けの朝。いきなりたき起こされた僕は、四様の切羽詰まった顔を見ることになった。

「どうしたの！？なんかあつた！？」

僕は飛び起きて、周りを見回す。

「なんかあつた！？じゃないよ！お兄ちゃんが朝早く起きないのが悪いんだからね！？」

「何があつたの！？」

僕はわめく四様を諭して、訊く。

「弥生さんと零さん、夜闇さんがお兄ちゃんのために朝ご飯作るつて言って聞かないの！なんか料理とは思えない行程で何かを作ろうとしてるから、早く止めて！」

あ、さすが神様の幸運、あの三人に料理を作らせることがいかに

危険か事前に察せたか。

「……うそ、とめてく」

デ「一ノ一

「ぬ？」

あ、あれ、今なんか聞こえてはいけない、とか聞こえてほしくない音が後ろから聞こえたんだけど？

僕はおしゃるおしゃる振り向く。

そんなバカな。

そこには、キッチンがあつたはずだった。
あつたはずなんだ。

なんで、そこから青空が見えるんだ！？

「……」「ごめんなさい……」「ご飯、つ、作り間違えて……」

「……すみません、どんな罰でも受ける所存でござります」

「……素直に謝りたい。……悪かった」

三人の手の中には、フライパン、お鍋、ヤカン。

そのどれもが、昨日眠るまではきれいなままだったものだ。

それが、その全部が。

焦げ焦げで破裂して、底が抜けていて……

「もうついでと、二人とも台所に立つな……」

僕がそり叫んだのも、理解してくれると思へ。……ああ、修理ど
うしよう……そんなこのお金ないよ……

第十八話／休みの終わり、四様の同居！？（後書き）

こんにちは、作者のコノハです。
妹登場編はこれでおしまいです。

主人公はこれからどうたばたな日々を送るのですが……
次回からは、『如月弥生編』に入つてきます。

なぜ、彼女は同居を望んだのか？なぜ彼女は四季を好きになつたのか？

それらを解明していくわけです。
では、駄文散文失礼しました！
ご愛読感謝、また次回！

第一九話～些細なことから殺し合い！？～

「いわゆる「おもてなし」の精神をもつて、おもてなしの心で接客して下さい。」

ドガゴキボキュ！

家のキツチンに続いて聞こえてはいけない音が、今度は僕の身体から聞こえた。

僕は地面、つまり教室の床に顔から崩れ落ちる。

崩壊したギッチンを放置して登校した僕は、間宵ちゃんと出会うなりいきなり右フックそして右エルボー、ラストに本気の左正拳突きを食らわされた。

もう意識は半分飛びかけてます。

「ああ！？今度は妹と同居たあい一度胸じゃねえか！しかも夜一緒の布団に寝たんだってな！？」

「そ、それは」

それは、四様がさびしいからって、泣きついてきたから……

「問答無用だシスコン野郎！」

ガシ。

僕は頭をつかまれ、立たされた。

え、間宮ちゃん、僕の頭を両手でつかんでなにするつもり?

「は、決まつてらあ。てめえの色ぼけた頭を叩きなおして…… やんだよー!」

「やめ。

僕の身体は間宮ちゃんを向いたまま、僕は後ろを向きました。向かされました。……って、これ、まずくない?

「わやああああああああああーー四季君、大丈夫?……間宮さん、いくりなんでもやりすぎです!首を百八十度ひねるなんて何考えてるんですか!四季君死んじゃつたりどうするんですか!」

「四季様!大丈夫ですか?……どきなさい、暴力女!今すぐどうないと四季様が……!」

「おいおいおいーいーいくらなんでも死ぬだらーキミは少し力加減といつものを見えたほうがいい!……四季、落ちつか、今ボクが直してやる。だから、もう少しだけ生き延びるんだ。なあに、すぐ済む!」

あ、やつぱりまずいんだ。みんなの騒ぎ方が普通じゃない。
…僕死ぬかな?

「うつせえー!こんなの私たちの間じや日常茶飯事だー!うすりや治んだよー!……ほら、よー!」

ばね

また小気味いい音がして、僕の首は元に戻つて、鬼の形相の間宵ちゃんに視線が戻される。

だな。……死にやがれ！」

ガコ――――――ン！。

すがすがしいほどきれいに決まったヘッドバットを食らつて、ま
た僕は学校で気絶しました。

出席日数大丈夫かな?

最後に見たのは、騒ぐ皆と、……え、ええ？

間宮ちゃんに向かつて飛びかかる弥生ちゃんだった。

「……ん」

起きると面休みになっていた。

「四季様、動かないでください。首、く、首が……」

ああ、あれ、さすがの夜闇も驚いたんだ。

「大丈夫大丈夫、子供のころからやられてるから慣れてるよ」「なれないでください」

まあ、されるたびに死を覚悟するわけだけど、まあ、今生きてるならいいじゃんか。……生きてるつていいなあ……。

「……あれ、みんなは？」

「暴力女と弥生さんの殺し合い……ではなく、大喧嘩の仲裁、および教師への説明をしています」

「え、ごめんもう一度お願ひ。誰と誰が喧嘩したつて？」

しかも夜闇、今殺し合いつて言いかけたよね?どんだけ激しかつ

たのや？

「……私も驚いています。暴力女と、弥生さんです」

「ええと、僕はいつ言つて、なんて反応したらいいんだ？」

「……は？」

「うん、これ以外に言葉が出ないよ、やっぱり。

間宮ちやんと夜闇ならまだわかる。でも、弥生ちやんと……？」

.....何があつたんだろう?

少しだけ、時は巻き戻る。

「四季君ー…… よくも、四季君をー。」

プチリと、彼女、如月弥生の中で何かが切れた音がした。
弥生は去年、いじめられていた。

いじめられていた理由は『おどおどしてるから』『弱そだから』

しかし、後者の理由に当たつてはまったくの間違いであった。

去年彼女をいじめていた張本人達もこのクラスにいるのだが、今日彼女たちはそれを目の当たりにする。

ある理由で弥生への攻撃をやめた彼女たちだが、今はそんな些細な理由よりもとにかく、手をついていじめのことを謝らなければ殺される、と本氣で思つていた。

……さて、ここに少しだけ話をずらそう。

現在クラスの中でも一番女の子に囲われている男子、秀句四季。彼を氣絶させた張本人、東堂間宵のことだ。

この学校にある特定の人物を表すあだ名、というか『通り名』といふものは数多くある。

しかし、通り名を持っている人間は、たつた一人しかいない。

『暴君』だとか『秀句四季の外付け悪意』とか『学園の裏の女王』だとかの通り名は、全てある一人を指している。

その一人が、東堂間宵。

あらゆる武道に精通し、暴力的な技術に異常な関心、興味を抱き、口調は男言葉。

自他共に認める『学園最強』だった。

……ここで、如月弥生の話に戻る。

彼女のイメージは、弱い、おどおどしている。体育でもいつも弥生はビリだし、彼女が入ったチームは必ず敗北を喫することになる。

そして、おつとつとして怒ることがない。

そんなイメージのはずの彼女が、キレていた。

「……んだよ、弥生」

「よ、よくも四季君を一毎口毎口毎口一四季君ばかりいじめて！許しません！」

「くえ、許せなかつたらびひすんだ？」

誰もが、無謀だと思つた。

間甯は脅威こそ感じていたが、こんなところで暴力沙汰を起こすとは、とうてい思えなかつた。

「私を助けてくれた四季君を、今度は私が守るんです！」

行きますよ間甯さん！全力で私の全力であなたを倒します！

「やつてみるか？」

そんなことをしたらいの騒さがビリなるか、わかつてんだらうな？
そう叫びの意味で、間甯は叫んだ。

でも、周囲はやつ受け取らなかつた。
こいつなんて一発で倒せる。

そういう余裕の言葉だと誰もが思つた。

そしてその誰もに、弥生自身も入っていた。

「…………なめられましたね…………。」

弥生はやうやく、かばんからメリケンサックを取り出し、指にはめる。

それだけでも周囲は大騒ぎなのに、今度は、

「…………あなたを殺す氣で行きますので、注意してくださいね」

そんなセリフと、間宵も凌駕しかねないほどの殺氣と闘氣。

「…………マジで、やる気かよ…………！」

ここで初めて間宵は自身の失敗を悟った。
恋する乙女をからかってはいけない。

そんな言葉が、彼女の頭に浮かんだ。

「如月戦闘術次期党首、如月弥生、行きます…………。」

「…………おいおいおい…………！」

一瞬の動作で飛び上がり、弥生は間宵に襲いかかった。

それと同時に、秀句四季が完全に気絶した。

第一十話～頂点を極める戦い！～

「『拳閃・銀光刹那』！」

ヒュン、と振り切った右フックの軌道はメリケンサックの銀色に光っていた。

「ぐ……」

ぎりぎりで、それをよける。今弥生が装備しているメリケンサックは刃が付いているので、もし触れたり受けたりしたら怪我じゃ済まない。

「おおおおおおおーー！」

と、クラスが湧く。

暴力の女帝とも呼ばれている間甯とおどおどしていて弱っちそうな弥生とが互角、いや、ともすれば互角以上に戦っているところだが、何よりもクラスの人間を湧かせた。

まあ、弥生をいじめていた張本人達は青い顔して冷や汗をかけていたが。

「ち……一『進竜撃』！」

湧く教室を無視し、というか本氣でやらないと殺されると直感した間甯はすぐさま闘氣の塊をまっすぐ、振り切った体勢の弥生に放つ。

「『拳撃・直崩滅』！」

それを弥生は左のストレートで相殺すると同時に、間合いを詰めて、間宵に肉薄する。

「『交撃・銀華旋風』！」

下の足払いし、倒れたところを追撃の拳。

これは本来足払いは牽制で、もしこれで倒れたら追撃、という程度の技だった。

しかし、弥生の足払いは、信じられないほど速く、間宵でも見きれないほど、巧妙に隠されていた。

「な……！」

地面から天井を見上げ、そして一瞬もしないうちに刃付きの拳が撃ち込まれてくる。

「うわー！」

間一髪、といふか反射でよけた間宵はすぐさま立ち上がり、攻撃態勢に移る。

「『弧竜蹴拳撃』！」

弧を描くような蹴りと、拳が順に繰り出される。間宵が扱う拳法の中でも致死性の高い技だ。素人に使えば即座に死を与えられるような、そんな技。

「『反衝・心突』」

それを流れるような動作で拳を上に、蹴りを下に受け流し、間宵の中心を開けさせる。

そこに、刃付きの凶悪な拳を、突きいれ

「やめろー！」

どなり声が聞こえて、弥生は止まつた。同時に、今までつづだつたような教室もシンと静まりかえる。

「……え、あれ……」

はつと、周りを見渡す弥生。

「キミたちは一体何をやつているんだ！こんなところで殺し合ひなんかしている場合か！そんなものは熱海で十分やつただろう！まだ足りないのか！？」

そんな弥生に構わず、心葉零は一人を叱責し続ける。

「間宵ー君は四季に対してやりすぎだ！そして、いちいち人をからかうな！」

「い、いや、私は別にからかつたりなんか……」

「キミの言動で襲いかかってきた人間がいるのに、からかわなかつたと言つのか！？ならばキミはよほど無神経なんだろうなー！」

今度は茫然とする弥生に、

「キミはなんで今日に限つてそんなもの取り出すんだ！熱海の時でもそこまで物騒ではなかつただろうー何考へてるーこんなところ

で人を殺して騒ぎにならないとでも思っていたのか…

「ひ、ひ、『』、ごめんなさい……！」

なぜ自分がメリケンサックをはめた拳を間宵に突き出しているのか理解できないまま、弥生は謝る。

彼女はメリケンサックをはめたところまでしか覚えていない。

「なぜ叱られているのかわからないまま謝るな！そもそも攻撃体勢に入つたら我を忘れるような武道をこんなところで使おうと思うな！キミの師匠はそんなことも教えなかつたのか！」

「ひ、う、ち、違います……！師匠はちゃんと、教えてくれて、でも、大切な人を守る時は気にするなって……」

戦闘中はいかなる精神攻撃に耐える武道、それが弥生戦闘術。我を忘れて、というよりは修行中に戦闘用の人格を新たに作り上げるのだ。

「ああ、いちいち間宵と四季のことにキレるな！四季の危険を感じるな！別に間宵は四季を殺したいわけじゃないんだ、その武道は本当に四季が危なくなつた時のために取つておけ！」

「は、はい！」

弥生はちゃんととかとをそろえて返事をする。

「キミもだ間宵！今後は少し四季に対する暴力を控えろ！能力のあるものがないものに能力を振るつてどうする！今のままだと本当に夜闇が言うように暴力女だぞ！」

「う……す、すまねえ……」

間宵もしゅんとなつて謝る。

「ふん、わかればそれで……」

「おい、お前らなにしてるー。」

その時、教師がやつてきた。

カタブツで有名な体育教師だった。

時は戻る。

第一十話～頂点を極める戦い！？～（後書き）

第一十一話／弥生と新しい人物！？

「……で、今まで説教食らつたり説明していたりしていた、とい
うわけだね」

「はい、そうです」

僕は夜闇から聞いた、僕の気絶と同時に弥生ちゃんが間甯ちゃんに戦闘を吹っ掛けた、といふ話を半ば信じきれないでいたが、もう半分は信じていた。

夜闇が嘘を言つとは思えないし、そもそもよく考えたら弥生ちゃんは戦えるんだった。なぜかはわからないが、弥生ちゃんは戦闘をしかけて……

「じつちが勝つたの？」

「うわ、なんか僕最低な質問してる気分。

「おそらく、弥生さんかと。零さんが止めなければあの攻撃は入つていたでしょし、全体的にも間暴力女は後手に回っていました。……暴力女は普段からですが、まさか弥生さんが戦うなんて……」

「あはは、僕もちょっと信じられな」

「四季君ー」

スパークという感じの軽快な音が保健室の扉から聞こえ、件の女の子、弥生ちゃんが入ってくる。

「四季君、大丈夫ですか？その、死んじゃつたりとか、しないですよね……？」

「あはは、気にすることないよ！慣れてもし

「な、慣れないでください、そんなこと…」

弥生ちゃんにも言われちゃったよ。……僕たちがおかしいのか？

ふつう、幼馴染同士って喧嘩するものじゃないの？

「……ふむ、キミが思っている幼馴染との喧嘩、といつものが知りたい、言ってみてくれ」

「心を読んだ！？」

「読めるはずがないだろ？でも、慣れるなと言われて不思議な顔をするということは自分が当たり前だと思っている証拠だ。……そこから推測しただけだ」

「……す、零ちゃん」

少しの顔の表情やしじぐさでそんなことまでわかるなんて……。熱海の時もやうだつたけど、本当に零ちゃんって研究者、っぽいよね。

「……ふん、ほめてもなにも出ないわ。むしむし出してくれ。ほら、ボクに情報をくれ」

「わかったよ……」

僕は半ばあきらめつつも、零ちゃんの質問に答えた。

「……互いのじつちかが気絶するまでするのが、幼馴染同士の喧

嘩……かな？」「

三人が黙りこなつた。

……あれ？

『あはは～私もなんだよ～！』

みたいな明るいノリを期待していたのに……なんで？

「か、かわいいに……四季君、今日からは私が守つてあげるからね！」

「……四季様、今回ばかりは暴力女から四季様をお守りするため、弥生さんと協力します。……一緒に頑張りましょう、弥生さん」

「はい！」

弥生ちゃんと夜闇はなんだが結束しちゃつてるし。

「……ふむ、インプリントィング……いや、習慣か？……どちらにせよ、哀れなのには変わりない……。四季、今までつらかったらう？ボクが間甯を説得しよう……」

「ンンン。

零ちゃんも新たに決意している時、保健室に控えめなノックが響いた。

「はい？」

僕はすぐ元答える。

間甯ちゃんかな？

……いや、あの子がノックなんかするわけがない。……いや、するんだろうけど、僕にはしないだらうな~って思つただけだよ？全然、これっぽっちもノックする間宮ちゃんが想像できないとか、そんなんじゃないんだからね！？

「あの、如月弥生といつ生徒がここにいると聞いてきたのですが

……」

「ひづー？」

扉の向こうから聞こえてきた老齢な男の人の声に、弥生ちゃんは目に見えて動搖する。

「……弥生ちゃん？」

それだけでなく、手に持つたかばんからナイフやらバットやらメリケンサックやらの携帯武器を取り出し、

「あ、あの！みなさん、これ持つて待機しててください！」

夜闇、零ちゃんに渡した。

「どこに行かれるのです？」

「どこに行くんだい？」

二人は武器を受け取つたまま訊いた。

「逃げます！四季君、しばらくの間こめんなさい…私のこと、忘れないでくださいね！」

そう言つて、保健室の方に向かつて走り出した！？

「弥生ちゃん何やつて……」

パリーン！

ええいと、一挙整理しておき。

来客が来た

で、その人は紳士的に弥生ちゃんかしなしかどうか訊いてきた。その人の声を聞いたとたん弥生ちゃんの様子がおかしくなった。

で、そのまま弥生ちゃんは保健室の窓からグラウンドに飛び出し、オリンピック選手もかくやとこつ速度で走り、どこかへ行方をくらまそうとしている。

「すみません、弥生は今いませんか」

送れて、夜闇が扉の向こうにいる人に答えた。

といひが、返答は返つてこなかつた。どいひかせつときから無反応だ。

あれ？

「…………おかしいな？…………あ…………」

不審に思つた零ちゃんが保健室の扉を開けた。

誰もいなかつた。

「……帰っちゃったのかな？」

「い、いえ……違います……」

「え？」

珍しく動搖した感じの夜闇の声。

ゆっくりと夜闇は手を水平にあげ、ある一点を指さす。

僕と零ちゃんは同時に夜闇が指さした方向を見た。
そして、絶句する。

一人で逃げていたはずの弥生ちゃんの後ろに、バイクかと思うぐらいの速度で走って彼女を追いかけるおじいさんの姿が、増えている。

.....
だ
れ
?

第一十一話～円あやと、十円さん～

「……誰？」

「私にもわかりません」

「ボクにもわから……いやもしかしたら……」

まったく正体不明のおじいさんの正体の見当を一瞬でつけた零ちゃん。

「……心あたりがあるの？」

「おそらく、……弥生の保護者だらう」

「保護者？ なんで？」

まさかただ喧嘩しただけで親が出てくるわけがないし、いたとしてもあんなおじいさんではないだろ？

「なんで？ 四季はもう忘れたのか？ 弥生は唯一『親の承諾を得ず』に『キミの家に寝泊まりしている人間だぞ？』

「あなたはどうなんですか、あなたは。研究所から逃げて来たと言つていたではありませんか」

「ボクは違う。ボクはあそこで働くのはごめんだと思つたから自主退社したようなものだ。親はもうとっくに死んでいるのでな。心配してくれる人間などいないのだよ」

零ちゃんは笑いながら言つた。親がいないのは零ちゃんにとってあまり悲しいことではないらしい。それとも、悲しいのを無理して隠しているのかな……？

「わて、四季。もしかしたら今日明日中には弥生が亡くなるかもしねんぞ」

「……なんで？」

「いくらキミでもわからないわけはないだろ？ 保護者が来たんだ、目的は一つ。どこの馬の骨ともわからん輩から愛娘を取り戻すためだよ」

「零さん、四季様は馬の骨では……」

「親御さんから見たら馬の骨にしか見えないだろ？ 娘を誑かしたにっこり仇……なんて思われていても不思議じゃない。……あ、そうそう、ねそらへ弥生の保護者は如月戦闘術の党首だろ？」

四季、骨の十本二十本で済めばいいな？」

「あーっと僕の顔から血の気が引いて行くのがわかった。子供の弥生ちゃんでもめちゃくちゃ強い如月戦闘術。その党首が僕に怒ってその力を振るつたら……！」

「……どうじつとですか、零？」

「ま、運悪かつたり虫のこびりが懲ければボクたちは翌日でも葬式の準備をしなきゃいけなくなる、とこいつ」とさ

「そんな！」

夜闇は悲しそうに囁つが、僕はそれどうではない。

「、殺される……？」

確かに僕と弥生ちゃんは一緒に暮らしている。でも、やましこことなんか何一つしてないし、誑かしたりもしてないよ…？

「…………ふむ、グラウンドにいた彼らはどこに行つたのだ?」「

ふと、零ちゃんが外を見て、今まで走りまわっていた一人の姿が忽然と消えていたことに気が付いた。

え、と僕が疑問に思ひと同時。

「がはははははー。わしから逃げようなー、五年早いわ、弥生!」

「は、はづ……」

がらりと、呵々大笑しているおじいさんが脇に弥生ちゃんを荷物のように抱えて保健室に入ってきた。

「…………あ、ああああ、あの、…………あ、あなた、…………は?」

僕は弥生ちゃん以上におどおど、おひおひ。

「…………お主はなんじや?」

しかも質問に質問で返された。

「ええ、つと、僕は秀句四季、です……」

「わしは如月 師走じや。…………ふむふむ、そつか、お主か?」

そう言いながら、如月 師走さんは僕を品定めするよじりながら

ると全身を見回す。

「な、何がです……？」

ちなみに、夜闇も零ちゃんも師走さんに圧倒されているのか、それとも下手に動いたらまずいと感じているのか微動だにしない。僕だってできることなら動かない側に行きたい。でも、どう頑張つても師走さんの視線は僕に釘付けで、動こうとしない。

それが敵意か親愛かは、まだわからないけど……。

「弥生を誑かして自分の家に連れ込み、うちの弥生を好き勝手しているのは、お主じやな？」

あ、死んだ。

僕はそう思った。

「え、あ、あの……、ぼ、僕は……あの、」

「お、お、お師匠様！ わ、私は、私から四季君の家に行つたの！」

四季君は悪くない！

「弥生は黙つておれ」

「は、はう……」

「ええっと……僕は、何もしません

「ほう、何もしてない？」

「は、はい」

「キスも？」

「は、はい」

「……えつちもかの？」

「……はい！」

最後の質問は僕も弥生ちゃんが顔をまっかにしながら答えた。

「……なんじゅ、面白くない……」

とん、と優しく弥生ちゃんを地面に下ろした師走さんせ、しかめつ面でそうつぶやいた。

「え、今なんと……？」

僕がおつかなびつくりに訊いた。

「面白くなこと聞いたのじゅー・お前さん仮にも男じゃらつ！かわいい女子とひとつ腫根の下にいるくせに、手も出せんのかー？情けないにもほひがあるわー！」

ええ、えええ！？

なんかめちゃくちや不条理なことで怒られてしませんか、僕！？

「あ、ああの、お歸匠様、なにでここ……？」

「決まりでおひりゆ

弥生ちゃんの問いに、師走さんはじやつと僕を見て笑つて、言つた。

「弥生の婿殿として、四季、お主にわしら如月の里まで来てまし
このじやよ」

……ええと、また旅行ですか？

第一二三話 姫月の里へ、レッシマーー！～

如月戦闘術。

殺すためにある武術だそうです。

「ま、わしのひとはいどもここんじやよ、この際」

いつも言つたのは、大型ワゴンの運転席に座る如月師走さん。

「どうでもよくはねえだら。世界一の武術だぜ？」

助手席に座つてその世界一の武術の師範にため口を利く間違ひやん。

彼女は僕らが車に乗る算段が付いてみつやく先生たちのお説教が終わつたみたいだ。弥生ちゃんよりもお説教が長いのは普段の行いが悪いせいだよ、と僕が言つたらまた殴られた。気絶はしなかつたけど。どうもお説教が効いているらしい。

「や、や、やうすよ……お師匠様」

僕の右隣に座つてるのは、ねじねじ度がいつも二割増しひりいの弥生ちゃん。

どうも師走さんは弥生ちゃんの保護者兼師匠といひこ。

「いや、そんなことよりも弥生の縁談の方がはるかに重要じゃよ。どうせすぐ廃れる運命にある武道など、もはやどうでもよいわ」

「……そのような悲觀に走るのはまだ先でもよひこがと」

僕の左隣は、学生服から一転、メイド服に着替えた夜闇。

「ま、事実なんだ、仕方ないだろ?」

僕の後ろの席で冷淡に切り捨てるのは、学生服の上から白衣をはおった零ちゃん。

「そりゃしら? 意外と長持ちしたりして、ね?」

そう思わせぶりな言葉を発するのは、車でアパートまで迎えに行つて連れて来た四様。

師走さんを除けば総勢六名。

「……それにしてもずいぶん大人数じゃな?」

思わず、といったふうに漏らした師走さんの気持ちがわからないでもない。

しかも僕以外の全員が女の子だし。

「……ふむ、そりゃどうか、理解したぞ」「何をですか?」

僕は訊く。もちろん敬語。

「この子たちも嫁候補じゃな?」

「違う! 何勘違いしてやがんだじじい!」

「私は妹ですよ?」

だが、否定したのは四様と間甯ちゃんだけだった。

……え？

「ふむふむ、お前さんは違つのか……おじこの「」

「何がおいしいんだよ」

間甯ちゃんがいぶかしげに訊く。

「その腕と肩、それから脚の筋肉の付き方が格闘家のものじゃからな、てつきり、な」

「……わかつてんじやねえか」

格闘家、と言われて嬉しがるなんてどこの少年漫画の主人公ですか、間甯ちゃん。
なんて言つたらまた氣絶だらうな……なんて思いながらも、車は進む。

高速道路に入つてもつい一時間。師走さんの話ではそろそろ着くらしへけど……

「わで、一つ言つておかなればいから」とが一つだけある

高速道路を下りた時点で、師走さんが神妙な面持ちで口を開いた。
「今から行くところは如月戦闘術の里、つまり住人全員が戦闘員、
这样一个現代社会とかけ離れたところじゃ。今回は婿を迎える、
这样一个田舎で四季殿を連れていているわけじゃ」

全員がうなづく。

「じゃが、おまけがあまりに多すぎる。……まあ、一人は肉親じやから構わんが、それ以外の人間が多すぎるわけじゃ。……じゃから、選別をする必要がある、と言い出す者があるかもしれません」

「それって、みんな同士で戦えつてこと……？」

僕は不安げに呟つ。だ、だつて、みんなが戦つていいなんて、僕見たくな

「……いいじゃねえか。おもしれえ。おい弥生、さつきの決着、向こうでつけねえか？」

「い、い、いいですよ? わ、私も、その、あの、間宮さんとは、その、戦いたかったなあ……つて、ちょ、ちょいと思つていたところですから!」

「私は相手がだれであろうと、勝利します。それが私の意味なのですから」

「……ま、実験したいのはまだまだあつたし、戦闘なんて趣味じゃないが、四季の研究の妨げになるものは排除しなければな。受け立とう」

「……私の能力、戦闘でも役立つか疑問だったの。使えないやがアアップすればいいし、別に私はいいわよ?」

みんな、なんでそんなにノリノリなの? なんで四様までそんなこと言つの? お兄ちゃん悲しくなっちゃつよ?」

「……こや、ノリノリなのは構わんが、戦うのはお主ら同士じゃないぞ。里の者たちと戦つて、それで実力を認められれば、弥生と共に四季殿を取り合つていの権利を得られる」

「ちよつと待てじじー

「なんじや」

めひやくひや 偉そくな間宵ちゃんの言葉に全く不快の意を示さないのは、大人の冷静な態度なのか、それとも師走さんの中ではそれが当たり前なのか。

絶対に前者であつてほしい。

「なんで、弥生が嫁なのが前提なんだよ。おかしいだろ」

「……ふん、ただの順番じや。それとも、勝つ自信がないのか、おぬしには？」

「あるこきまつてんだろー・どつせ弥生みたいなのばつかなんだろ？なら余裕だぜー・さつきも全然私の勝ちだつたからな！」

……ほんと、変なところで見栄張るあたりも男みたいだな、間宵ちゃん。

「……ふはは、その言葉、忘れるなよ？」

「つたりめえだー！」

そう聞宵ちゃんが叫ぶころには、車は右も左もわからないような森の中に入っていた。

目的地はもうすぐだ。

第一回話～如月弥生の思い出話～

闇。

私の中つて、それだけです。
暗くて黒い、それだけです。

私は私、なんて甘えた言葉も言えないくらい、真っ黒に染まっちゃつてます。
助けて、苦しい。つらい、悲しい、さびしい。
そんな感情が全部バツサリ消えてるんです。

の人たち　去年私をいじめていた人たちも、きっと、私の泣き顔見たことないと思います。

だつて、そう感じないように生まれた時から訓練されてるんです。
何をされてもなにも感じないように、訓練されてるんです。
親に殺されてもなにも感じないように、鍛えられてるんです。

幼いころからそんなことばっかりやつてたら、誰だつて私みたいになります。だから、私の家　如月家の人はみんな仲良しです。

だつて、他人を憎むよう『作られて』ないから。他人を愛することしか知りません。愛されなくとも、何も感じません。うれしい、気持ちいいは感じるのに、苦しい、痛いは感じません。

変ですね？でも、私にとつては変じやなかつたんです。

それが、当然のことだと思つてました。

そして、私も家族と同じようなものだと、信じていました。

……でも、でもです。

今でも……忘れません。

『何やつてるんだ、君たちは…』

本気のどなり声でした。

『うわ、やば、暴力姫の金魚のフンよ』

彼女たち 私をいじめていた人たちは、そう言つて『彼』をけなしました。

『それで？僕がフンなら、君たちは？他人をいじめて悦ぶ雑菌かな？』

今では信じられないのですが、『彼』はとつても傲岸不遜に、そつ言つたのです。

『……調子乗つてんじゃないわよ！何よ、あの暴力姫なんかと一緒にいちやつて！あんな女私たちにかかるべ……』

『……だつてさ、間宵ちゃん』

『え……？』

そう言えば、ここはどうだったでしょう。たしか、廊下でした。先生も友達も見てはいるはずなのに、誰も助けてくれなかつたんでし

た。

『……よお、私がなんだつて？』

強い

私は訓練を受けていました。だから、一日で彼女の実力がわかつたのです。

里にいた誰にも負けないような強い思い。

それが、彼女の力の源だといつとも、すぐにわかりました。

『ひつ……！』

『私はな、強い奴と戦いてえんだよ。……お前ら、強いんだつてな？よし、上等だ、やろ？じやねえか。武器だろうがなんだろうが自由に使えよ。私は勝つ』

助けられた、といつことは頭に浮かびませんでした。

ああ、早くこの人の戦いが、戦闘が見たい。

私はそう強く思いました。

一般人に力を振るつてはならない、そんな不文律も忘れて、とびかかりそつになりました。

でも、私が望む瞬間は訪れませんでした。

『……間宵ちゃん、ダメだよ、喧嘩は』

『……つたく、しゃあねえな、……お優しいんだな、四季は』

そう言つと間甯ちゃん呼ばれた人は、いつもたやすくあんなに大きな鬪氣を消してしまいました。

『……あ……あ……』

『早く消えたらどうだ？私の氣が変わる前にな！』

『は、はい！』

間甯ちゃん、ではなく四季、と呼ばれた男の子に敬礼すると、彼女たちはどいかへと消えてしまいました。

『大丈夫？』

さつきの傲岸不遜な態度はどこへやら、とても優しげな顔を私に向けて、手を差し伸べます。

その瞬間、私は直感しました。この人は私を助けるためだけに、あんな演技をしたんだと。

生まれて初めてのことでした。誰から、助けられた、なんてことは。

里にいた時はもちろん、都會に来てからも、誰一人助けてくれる人なんて、いませんでした。

だから、でしようか。

『……ほ、ほつといて、く、ぐださい……。わ、私一人で、な、なんとかできました……』

そんな、心にもないことを言つてしまつたのです。
でも、違和感に気付きました。

知らず知らずのうちに、助けてくれた四季さんの反応をくまなく、細かいところ 心拍数や体温の変化などす まで探っていました。

『……そう。じゃあ、何かあったらまた助けるよ。ねむっかいを焼かせてくれるかな?』

私が想像した、残念がる様子や怒った様子は全く見られませんでした。でも、その代わりに感じたのは暖かい、本当に澄んだ親愛の情。

『……は、はい……』

……あ、れ?

気がつけば、私はそんな返事をしていました。
もつとひどい言葉で袖にするつもりだったのに。
なぜ、私はこんないい返事をしているのでしょうか。

答えはすぐに見つかりました。

私は、彼に恋をしたのです。

私は生まれて初めて、こんな身体に生まれたことを、如月の里で訓練したことを真剣に、どうしようもないレベルで悔みました。

こんな、闇に染まつた女の子なんて、絶対に好きになつてもいいれない

私はあきらめました。あきらめたつもりだったのです。

……でも、私自身、気付いていなかつたのです。

私の闇は、果てしなく深く、大きいことを。

第一五話～到着、そして不穏な影！～

その日から、一週間。

一週間で、私をいじめようとする人は、クラスにはいなくなりました。仲良くはなれませんでしたけど、私をいじめようともしません。誰が止めてくれたのかは、簡単に推理できました。

お礼がしたいな。

きっかけは、ほんの些細なことでした。
知らないなんて、私は言えません。

『……あ、あのー』

私は、さりげなくを装つて、でも全然できなくて、おたおたしながら楽しくおしゃべりしていた四季君に話しかけました。

『なに？如月さん』

『あ、あの……き、来てくれ、ませんか？』

今からしたら、なんて大胆なことをしたんだらう、って思いました。ついてきてくれないかも、って思いました。

でも、四季君は笑顔でいいよと語ってくれました。

私は冷やかされながらも、四季君を屋上に連れ出すことに成功しました。

その時の会話は、昨日のJUTのよひで野ごはんをやる。

「……ねえ、四季君」
「なあに、如月ちゃん、いろんなことに呼び出しだ
「弥生」
「え？」
「弥生って呼んで？」
「……弥生、ちゃん？」
「……ありがと、四季君。……四季君は、わ。なんで私のこと助
けてくれたの？」
「……なんで？……なんでだろうね？」
「わからないまま、見ず知らずの私を助けてくれたの？」
「ううん、見ず知らずなんかじゃないよ」
「え……？」
「クラスメイトだらうへなら、助けあわなきや」
「……そ、そんな」
「え？」

「や、そんな単純な理由で、私を？私だからじゃなくて、クラスメイトだから？」

「えうだよ？」

「……つー」

衝撃、でした。

夢に見ました。思い馳せました。
でも、全部幻想だったのです。

私のことを見ていてくれたんじゃないのか、つていつ夢は夢のままで。

私のことを好きなんじゃないかと、この希望は絶望になりました。
私が特別だからじゃない。私がクラスメイトだから、助けた。
もし、別のクラスだったら？
もし、どこかの路地だったら？

私は、助けてもらえないかったの？

訊く」とは、できませんでした。

気が付いたら、走り出して、こましたから。

その次の日、決心しました。

『私は、出家します』

お父さん、如月 瞳月むつきとお母さん、如月 葉月はづき。

大切な話があると前置きして、私はこう言いました。

『……本気か?』

『じうこうの意味かわかってる?』

いまだに戦闘せんとうこそが世間を渡る方法だ、なんて信じている田舎です、出家なんて家出の理由でも、嘘だとはすぐにはわからないのです。

とにかく、この家から、こんな血と闇にあふれたこの里から、一刻も早く出なくては

私はこう思って、一心に両親を説得し、見事許可をいただきました。

もちろん、お寺になんか行きません。尼さんがなんてやつていらっしゃ
せん。

行くのは、……その、尾行して調べた、四季君のお寺。

古い、年季の入ったアパートです。

私の決心。それは、四季君のところに押しかけて、一緒に住んでしまおうと言うものでした。

私は特別じゃなかつた。じゃあ、特別になればいい。

そんな単純な道順で、私は今まで嘘もついたことのない両親に嘘をつきました。

もしかしたら追い返されるかも。もし住まわせてくれたとしても、襲われちゃつたりするかもしれない。

……もちろん、後者は大歓迎ですよ？

四季君が部屋に入るのを見計らって、四季君部屋の扉の前に立ちます。

すると、私の他にも一人ほど、おんなじことをしようとしている人がいました。

『……同時に行きましょ』

『そうですね』

『だな』

変に騒いで四季君に嫌われたらどうしよう……

私たち三人は、瞬時にそう考えたのでしょうか。意外と喧嘩することなく、私たちは扉をノックし……

『はい?』

そして、私の新しい生活は始まりました。

……あ……

「「」が、如月の里かあ……あれいなとこひだね、弥生ちゃん」

「は、はい！」

出家の話をした時に一度帰つて来たけれど、なんだか一年ぐらい来ていないたいでした。

つい昔のこと思い出すぐら、郷愁の思いにかられていました。

「」に来るたび、私は嫌な嫌な気持ちになります。

……「」が私の闇を生みだした場所。

私の闇を、四季君は知らない。知られてはいけない。

でも、その四季君の隣で私は、何も知らない少女のように振る舞つている。

闇を隠して、何も知らないかのよう。

「……へえ、きれいじゃんか」

間育さんが言います。

間育さんは帰れないかも、知れませんね。

私は少しだけ、慣れない未来予想なんてしてみます。
でも、きっとこの予想は当たると思います。

「……」

夜闇さんが、少し顔色が悪いです。なんか、胸のあたりを押され
て、苦しそうです。ここは空氣、そんなに薄いわけじゃないんだけ
どなあ……？

「……四季様、この里、雰囲気が少しだけ……」

「なあに、夜闇？ 具合悪そうだけど？」

「……いえ、大丈夫です」

そう言つと夜闇さんはなんでもない振りをして、びんと胸を張る。
私の緊張も、同時に張られました。

なんで、夜闇さんは気付いたのでしょうか？

『月』という組織が何かは知りません。けれど、相当な能力を持
つているようです。

私は緊張を隠したまま、四季君の隣で里に向かいます。

「……ふむ、興味深いな」

ぱつりと、零さんがつぶやきました。私はそれにどきりとしまし
た。

「なんでだよ、零」

「……意外なのはキミだ。何故キミは気付かない？……ああ、そ
うか、完全な一般人は、キミと四季だけか……」

「はあ？ 何言つてんだよ、零」

「……いや、忘れてくれていい。へぼ研究者のたわごとだと、聞
き逃してくれ

「はいはい、わかつたよ」

……どうして、零さんまで？

普通はざつぱつあっても気付けないのに……。

あと少しで、里につきます。

あと少しで、四季君が私の生まれ故郷にきます。

「……四季君」

あと一步で、里の領域です。

「なあに、弥生ちゃん」

「……ありがとうございます、私の里に、来ててくれて」「気にしないでよ。旅行気分だし、めちゃくちゃ楽しんでるから」

……胸が痛みます。

「そうですか」

四季君が里に入りました。

声が、聞こえました。

わかつてます。いちいち言わないでもわかつてます。

「……四季君」

あと一步で、私も里に入ります。
でも、私はそこで歩みを止めました。

「……どうしたんだよ、弥生」

「なんでも、ないです」

私のことを気にせず、闇籠さんは里に入りました。

一一名、確認

どうやら、夜闇さんも一緒に入っちゃったみたいですね。

「どうした、弥生。……何かあったのか？」

「いいえ？ なにも」

勘のいい零さんも、首をかしげながらも、私の横を通り過ぎ、一歩、里に入りました。

一一名、確認

「……どうしたの、弥生さん？ しんどいの？」

朗らかな笑顔を、里に入った四様ちゃんは私に向きました。

……これで、全員。

「……おい、早く入らんか」

「……はい」

先にお師匠様が入りました。

もうこれで私の後ろには誰もいません。
いません。いません。

いないのです。

「早く行きなよ。怖いの？」

いないのです。後ろには、誰も、いません。

いません。いない。いない。

「……いま、行きます！」

心配し始めたみんなに気付いた私は、そう言つて一步、踏み出しました。

……これで私も里に。如月の里に入りました。

……さよなら。

私は気を失いました。

第一六話～違和感、そして始まり始まり！～

へりへ。

「うわっー」

僕は駆けて、ふらついた弥生ちゃんを抱きとめた。

「……あ、すみません、四季君。ふらつこじしまつて」

弥生ちゃんは僕にもたれながらしつかりと立つた。
ゆっくりだけどふらつこじてはいいから、充分大丈夫だろうナビ、
何かあつたのかな？

「大丈夫？」

「大丈夫です。気にしないでください」

「う、うん……？」

何か違和感を感じながらも、僕はまた里に向かつて歩き出す。

僕が抱いていた武術の里のイメージは、森に囲まれていて、古い
昔ながらの家が立ち並んでいて、それで住人の人たちを見ても一見
普通なんだけど、実はめちゃくちゃ強いとか、そんな誰でも抱くよ
うなものだった。

実際は山に囲まれていて、森にも囲われているんだけど、しつか
りと開発は進んでいて、家もとにかく洋式のものがある。

「……ふむ、弥生。少しみんなに里を案内してやつなさい」

「はい、お師匠様」

すっと流れゆるひな動作で弥生ちゃんは先頭に立ち、田の前の三と森に囲まれてこむ細々とした村を手のひらで指して、言つた。

「あのが私たち如月戦闘術の親元、如月の里です。過去四百年にわたつて練られ、今もなお進化をつづけてこむ寒戦仕様の戦闘術、それが私たちの武術ですが」

小さっこひから何度も聞かされてこるので、弥生ちゃんの説明はよどみがなく、流ちょうだつた。

弥生ちゃんの説明は里のことから武術のルーツまで岐にわかつて、道中僕らはほとんど暇をしなかつた。

「……では、つまりない私の説明はこれまでにして、あとは里の皆ひととにあこがれいや、少しの余話でもしていただきたい、と思こます」

「へえ～す～」こね弥生ちゃん…

締めくくつまで上手だった弥生ちゃんに、僕はつに拍手して褒めてしまつた。

「……ありがとうございます」

僕のお礼を受けて、微笑みと一緒につと頭を下げる弥生ちゃん。

「……」

でも、すうじいと思っていたのはどうやら僕だけのようだ、他の四人はしかめつ面で黙りこくれたままだった。

……何か面白くないことでもあつたのかな？

「……なあ、四季」
「今はいけません」
「今はダメだ」
「今はダメよ」

口を開こうとした間宮ちゃんは、三人に同時に止められた。

珍しいことに三人の忠告に間宮ちゃんは従い、「……悪い」と言って黙つたのだ。

しばらく僕たちは農村をながらのあぜ道を歩き、田舎らしい風景を堪能する。

でも、みんなのしかめつ面がなあることはなく、僕だけがはしゃいでいるみたいな雰囲気で妙に居心地が悪かった。

「……みなさん、ここがみなさんに宿泊していただく旅館です。
……では、行きましょうか」

指されたのは、一際莊厳な旅館だった。

手入れが行きとどいていて、くすみ一つ見当たらぬ外観。全部木造だからこそ重圧感。

この前の成金趣味の屋敷とは大きく違い、この旅館からは歴史と

威厳が感じられた。

「こりつしゃこせや。『秀句様』ですね？」

「はい」

弥生ちゃんは出て来たおかみさんに慣れた感じで応答してくる。
「こりつちゃんも顔みしつだつたりするのだらうか。

「……みなさん、部屋は一つあります。因幡君、因様ちやんで一
室。他の誰わんは私と同室となりになつまわ」

師走わんはこの里に家があるから、ナレド寝泊まりするよつだ。
つて前たり前か……。

「……僕と因様、かあ……。うわあ、またなんか言いあつだらうな
あ……

「……わかつたわ。お兄わんと一緒ね？」

「はい」

と、思つていたんだけど、意外とみんな了承した。……なんかみ
んな聞きわけよすぎない？こつものパワーぜざつしたんだらう。

「……では、今日は始皿皿田にて廻りつてください。散策するも、
休憩するも自由です」

弥生ちゃんの言葉で、今日は解散となつた。

……なんかみんな大人しいな？

そう思つたのは、どうも僕だけじゃないみたいだ。

「……お兄ちゃん、変だとは思わない？」

与えられた自室に入つて、四様がすぐにそう言つた。
僕たちの部屋としてあてがわれたのは、絵にかいたような旅館の和室。

6畳ぐらいの畳に、緑色の壁。押し入れがあつて、中にはきっと布団とがが入つてゐるのだろう。

「変？確かにみんななんか大人しかつたけど……」

「違う違う。弥生さん」

「弥生ちゃん？」

……まあ、確かに違和感を感じるところはないわけじゃないけど

「特に？間宮ちゃんたちよりかはまじじゃない？」

「……そう。お兄ちゃんってやっぱり鈍いね。程度で言つと『俺、ずっと管理人さんのお味噌汁が飲みたいんだ！』って熱烈な視線で言われてるのに何にも感じない超有名漫画の管理人さんレベル」

「……それって、鈍いのか……」

てか、四様ネタが古すぎるぞ。……僕も読んだからわかるけど、四様の同世代で今のわかる人いるんだろうか？

「……鈍いわよ。一緒にいて気付かなかつたの？」

「何に？」

僕がそう言うと、四様は憐れむように僕を見た。
そして天を仰ぎ、胸の前で手を組み、懇願するように言った。

「……神様、どうかお兄ちゃんの鈍感が治りますように……
『神様に頼むほど僕は鈍いのか！？』

僕は反射的に突っ込む。

「……突っ込みは早いのに」

ぼそりと言つて、四様は部屋を出よつとした。

「どこ行くの？」

「弥生さんのところ。聞きたいこといくつかあるから

「行ってらっしゃい」

「行つてきます」

そんなありふれた会話を終えると、因様は部屋から出て行った。

……独りきりになつた。

暇だな……。

三秒で思つ。

……疲れだし、寝よつと。

布団も敷かずに、僕は横になる。

まあ、仮眠みたいなものだ、わざわざ布団を敷くまでもない。

……めんどくさいつてのが、一番の理由だけじ。

すぐに眠気は襲つてきた。

「……話さたいことがあるの、いいかしら、弥生さん？」

私の問いに、弥生さんは「いいですよ」と微笑んで言つた。

間宵さん夜闇さん零さんも私の隣で弥生さんをいぶかしげな目で

見ていく。

「じゃあ、まず一つ田……」

さあ、なぞ解きゲームの始まりよ。
まずは聞き込み。

最初の証言者、如月弥生。

いや、開始。

第一一七話／質問と四様の意外な趣味！？

「まあ一つ。私たちは何をやらされたの？」

いい、四様。これはゲームよ。この里に入つてから様子の変わった弥生さんを元に戻して、家に帰れたら私の勝ち。

弥生さんが元に戻らなかつたり、誰か一人でも家に帰れなかつたら、私の負け。

そのために、頑張らなきや。能力を使うことは最大限控えて、で起きるだけ、自分の力で。

「……明日、私たちの里の者と戦つていただきます。リーグ戦で、とにかく勝つてください。……」心配なく、負けたからと言つてなにも罰などはありません。……死者に罰など、意味のないことですから

「……なんだと？」

間甫さんが鬼気迫る表情で弥生さんに詰め寄る。

「勝てばよいのです。勝つて殺して、里の者たちを納得させてください」

「……ずいぶんと、冷静ですね？異常なほどと言つてもよいぐらいです。……何がありました？」

「なにも」

夜闇さんの気迫のこもつた質問に、弥生さんは眉ひとつ動かさず

に答えた。

「……ふむ、少し気になるのだが、四季は戦わなくともいいのか？」

「よいのです。婿には子種さえもうえればそれで十分です」

とんでもなことを見顔で言つ弥生さん。

いつもなら、ここで喧嘩でも起つたかも知れない。でも、今は弥生さんの豹変の方が気になるのだろう。

「……私も？」

私はおそるおそる聞いてみた。ちなみに私は戦う」となんてできない。

「もちろんです」

それを知つてはづの弥生さんは一言で斬つて捨てた。

冷静な瞳を崩すことなく、心の奥に何かを秘めたまま、弥生さんは恐ろしい殺し合への説明をしていく。

「……以上です。なにか質問は？」

「あるぜ」

もうこらえきれない、といったふうに閻甯さんが立ちあがり、弥生さんを見据える。

「お前、誰だ？」

「如月弥生です」

「違うな。てめえはそんな堂々としたねえだら」

「これが本当の私です」

淡々と、弥生さんは答える。

「……この里、何かあるな?」

「なにも」

「嘘だな」

「本当です」

「くらり問い合わせても、暖簾に腕押しだ。

「……つたく、強情な奴!私は風呂入つてくる!……いか弥生、絶対に正体暴いてやるからな」

ついに、間甯さんは弥生さんに訊くことをあきらめてしまった。タオルや着替えを持って、部屋を出ようとする。

「……もし」

氷のような声で、弥生さんが言った。
間甯さんは止まって、振り向く。

「もし、それほどまでに私のことが知りたいなら
「なんだよ?」

間甯さんに訊かれて、弥生さんはにいと笑つて答えた。

「勝つてください。最後まで勝ちぬけば、私のことはおのずとわ

かるでしょ」

やう言つて、弥生さんは次の瞬間にはいなかつた。

「……何があつたんだよ、あいつ」

心配そうな顔をして、つぶやくよつと言つた。

「心配なんですか、暴力女」

夜闇さんが揶揄するよつと言つた。

すると間宵さんはみるみる内に顔を赤くして、首をブンブン振つて言つた。

「ち、違えよ！な、なんで私があんなわけわからんねえやつ心配しないでねえんだよ！おかしいだろ！？ぜ、全然心配なんかしてねえぞ！？そ、その、あれだ。わ、私は様子が変だからいじめがいがないな～って思つてただけなんだよ！うん、そなんだよ！」

……間宵さんのことが愛おしくてたまらなかつた。

なんでこの人のかわいさに今まで気付かなかつたのだろう。ああ、私はバカだ。

「そうなんですか。じゃあ、弥生さんはこのままいいんですね？」

つい、私はやう言つてしまつた。

「ダメに決まつて……い、いや、その、あいつがいねえと、その、クラスの奴、心配するだろ。うん、クラスの連中のためだ！弥生が心配だからつてわけじゃねえからな！勘違いすんなよ！」

今、キコンと來てた。」『まだシン「トレを自然に任せの間甯さん
は、きっと天才だ。シン「トレの女王だ。

今彼女にすりすり抱きついても顔真っ赤にしながら『ば、ばか、
なんだよてめえは……氣色悪いな……』とか言いながらも絶対に引
き離そうとはしないんだろうな……

「おい、四様。お前なんで私に恍惚とした表情ですり寄つてくる
んだ！？」

さつと[冗談交じりに『好きですか妹さん』とか言つたら『……わ、
私はそんなガラジヤねえ』とか言いながらもしつかり気持ちを受け
止めてくれるんだろうな……。

「お、おいおいおい！四様、私はそつつけの気はねえぜ！…お、お
い…聞いてんのか！？おーい…」

ああ、かわいらしく、愛おしいな。

「お、おこ、な、なあ、四様さん？な、なあ、頼むから、今なら
[冗談で許してやるから……」

「命じてくれるんですか……？」

「なんでもひとつ詰め寄つてくんだよー…お、おい、夜闇、零！た、
助けて……」

助けて……だつてー…ああ、かわいいー

「……その、お氣の毒ですが

「もとの能力もそうだが、今の四様君なりあそりへ神様でも倒せるんじやないか?」

「お、おい！見捨てんのか！？」

ああ、かわいらしく、かわいい。もっともっと可愛がりたいな。抱きしめたいな、頬ずりしたいな、モフモフしたいな。

「わ、悪かつた！し、四様、悪かつた！私が悪かつた！だ、だから、許してくれ、頼む！何が悪いのかわからんねえけど、許してくれ！」

田舎しへれ……。はい！ もちろん！

「田舎者」

抱きつ！

悲鳴が響き渡った。

かわいい！

第一八話「反省、でもまた！？」

……ああ、私はバカだ。

「……あのな、四様」

「……はい」

私は部屋の隅で壁の方を向いて膝を抱えている。

「私も一応、女の子なわけだ」

「……はい」

多分陰鬱に沈み込んでいるだろう私の背を、間甯さんが優しく撫でてくれる。

「だから、かわいいものが好き、だと、かわいいものに触りたい、つていう気持ちはわからんでもない」

「……はい」

夜闇さんと零さんはさつきからトイレに行っている。

……あいつ陰で私のことを笑ってるんだ、そうなんだ！

「……ま、まあ、その、だな。……ええと、……な？」

「……はい」

ああ、できることなら靈になつて消えててしまいたい。

「……その、私に抱きついたたり頬ずりしてきたり、その、……

胸とか、触つたりとかは、……その、うん、誰にも言わねえ

「……うわあああああああああああん！」

そうだそりだそりだ！私、間宵さんに突発的に詰め寄つて、抱きしめて、頬ずりして、おっぱいとか触つて、それで、それで……もつと嬉しいこともした気がする！

「お、おい、泣くなよ……」

「だ、だつて！だつて！わ、私、私い……」

昔から、じうだつた。

かわいいものに田がない。

可愛い！と思つたらその瞬間頭のヒューズが飛んだみたいになつて、気が付いたら抱きしめたりキスしたりしていたのだ。

で、小学校の時にいたあだ名が『神抱き魔』。

『神様に憑かれた抱き付き魔』を縮めたものらしい。

まったく不名誉なあだ名だつた。

しかも神様に憑かれてる、ってところから何を勘違いしたのか私は抱きつかれたら幸運が寄つてくるといふことにいつのまにかなつていて、田いっぱい可愛い恰好して私のところに可愛いポーズでやつてくるのだ。

でも、全然そういうのは可愛い。可愛いのははやつぱり、さつきみたいな間宵さんとか、普段の弥生さん……。ああそうだ、夜闇さんとかも可愛いところがあるんだよな……。ああ、抱きつきたい

……

「おーおこおこおこおこーまた変な田の色になつてんぞー。」

「……ああ、……モフモフ……つはー?」

「あ、またやるといひだつた……

「……すみません」

「こ、こや、ここはだよ。誰にも言わねえし。……で、ちよつとマジな話すや。クソメイドも零もこねえしちこ」

少しだけ、真剣な顔になつた間薙さんも、かわいらしくして……その無理やり男らしくふるまつてこるといひがまた、イイ!-

「……鉄拳制裁がお望みなのか?」

「ち、違います!」

「あ、危ない……拳がとんでくるといひだつた……

「……まあここや。……で、話始めのやうよ、弥生はあれ、やうになつたんだ?」

「いきなり質問ですか?」

いや、正直書つて私運がいいだけの女の子ですから。荒事には向かないですよ?

「……まあ、私の中でもちゃんと仮説は立てんだけだよ……ちよつと信ぴょう性に欠けるつて言つか、頼んねえつて言つか……まあ、とにかくお前の意見が聞きてえ」

「まあ、まあ、やつはいつ」とだつたら……

意見、ねえ。と言われても本当に弥生さんに関するではわからないことが多いですけど……仮説ぐらいなら……今でも立てれる。

「まず一つ。これオーソドックスだけど『二重人格』。この場合は医学的に言う多重人格じゃないわね。多分この里に生まれてくるものはみんな戦闘人格を持つてる……とかそんな感じ

「で？他には？」

「次に、誰かに乗っ取られてるって場合。……精神を完全に乗っ取るなんて方法聞いたことないけど、実戦仕様の如月戦闘術ならそれがぐらいあるんじゃない？」

「なるほどな、で？」

「最後に、弥生さん自身が里にいた時に精神が戻つてること」「……どういうことだ？」

「昔はあれが、弥生さんで、長い間都会に来てて丸くなつたけど、こつちに戻つたせいで幼児退行みたいに精神が戻つちゃつたってこと

なにも情報のない今の時点では予測できるのは……これぐらい、かな？

「……はあ～！すげえな、やっぱり。お前なかなか頭いいな！私全然なにが起こったんのかわかんなかったぜ……」

「仮説立ててたんじゃなかつたんですか！？」

「まあ、その、あれだ。……てへつ

「『てへっ』じゃない。」

なんだそれ……まったく、横着な人だ。

でも、さつきの『てへ』可愛かつたなあ

「……あの、もう一度やつてくれる？さつきの上

え? どうか? て、てへつ

頭に丸めた手をあてて、『へへ』……なんと単純でなんとかわ
いりしこゞれだわい。

「…………もう一度です」

モニタ

.....

か、か、可愛い！かわいい！抱きつきいいいいいいいいいいいいいいいいいい！

頭のヒューズが飛びました。

抱きつ！カプリ……！はむはむ、もふもふ……

「うわ、なにを

ପ୍ରକାଶନ ପତ୍ର

一 やめ、それは

なめなめ もみもみ

卷之三

あ
h

「お、おい？それは、さすがにまずいんじゃないか？い、いいか、四様、わ、私も、い、一応女の子だ？だ、だから可愛いものがスキつてのはよくわかる。よ、よくわかるがよ？それは、違うんじやないか？」

あ～～～～～ん

かふり

第一八話「反省、でもまた！？」（後書き）

すみません、作者のコノハです。

一週間近く休んでました。

理由はインフルエンザです。死にかけました。

昨日の夜ようやく熱がひきました。

やつと小説書けます。

お待たせして本当にすみませんでした！

駄文散文失礼しました！

ご愛読感謝、また次回！

第一九話　一度ネタ、そしてもう一度！？

「もう！知らない！やめてって言つたのに！ひどい！四様のバカ
…つくつ……ぐすつ……わああああああああああああああああ
あああん！」

たつたつたつた

「…………どなたですか？ セツモのせ」「セツモの誰だい？ セツモのせ」

入れ違いになつた夜闇さんと零さんがまたもふさわしかんだ私に聞いてきました。

「……間窓さん」

「嘘だ!?」

嘘じゃないです……本当に間違ひなんなんです……

泣かせるなんて私最低です。

「…………暴力女が、あんな風に逃げて行くなんて…………」

「キミはあれだね、四様。対間宵最終兵器。今後は『四様を抱きつかせるぞ』の一言で支配できそうだ。あつはつはつはー！」

「笑い」と同じやありません！もぐ……」

なーんで私こうかなあ……？

「まあ、今は彼女はいない方がいいんだ、どうやって払おうか思案していたところだよ」

「……私を笑ってたんじゃないんですか？」

「……最初のうちだけだよ」

「うわああああああああああああああああああああああん！」

笑つてたんだ！笑つてたんだ！

「嘘ですよ。あなたが可愛いものが好きだからと、いつ、て……」

ああ、笑つてるー私から見えないと思つて声を殺して笑つてる！

「キミが気にしてこむ」とをボクが笑うわけがないだ、ろづ、う、く……」

ああー思いつきり笑つてるじゃない！

「もう一笑わないでくださいーーー」

私が振り返つてみると。

「ふはははははー！」

「あつはははははー！」これは面白いー間甯があんな風に逃げて行くなんてなーあはははははー！」

思いつきり笑つてた。

「ふう、と私はほっぺを膨らませてアピールする。

「……む、……」

「ははは……は？」

何故だかわからないが、二人の動きが止まった。

「……ふむ、君のその性癖……笑えなくなつたよ」

「奇遇ですね、零さん。私もです」

「今更そんなこと言つても遅いです！」

私はもつと頬を膨らませて主張してみる。

「……かわいい」

「ええ、そうですね」

「へ？」

私は頬を膨らませるのをやめ、一人の変化に気付いた。

目の色が、違う！

「……ふむ、この気持ちはなんというのだろうな？四季に対して抱くものに限りなく近いが……もつと暖かい」

「それは『萌え』と言つのらしいですよ、零さん」

「……ま、まつひよ、一人とも？も、もしかして私のくせを笑えなくなつたつて……」

「うむ、キミと同じ性癖に発病したよつだ」

「病気じゃあつませんー?」

「関係ないよ。……さあ、ボクとキミで秘密の花園を築いて。あつと、気持ちがいいこと間違いなしだよ?」

あ、ああ……

私は一人から後ずさつする。
でも、引いた分だけ詰めてきて、どんどんどんどんその差がなく
なつて……

「「「いただきまーす……」「

食べられる!?

と、思った時だった。

「……就寝の時間です。布団を敷きますので、情事なら後にして
いただけますか?」

異常に冷めた、暗い声が聞こえた。

一瞬、私は誰の声がわからなかつたほど、その声は普段とはかけ離れていた。

「……弥生さん
「何でしょ?」

布団を持つて、長い寝巻に身を包んだ弥生さんは艶やかで、その瞳は深い闇を覗きこんでいるよつ。

本当にこの人があの堅苦くておどおどしてくる弥生をなんだとまつてい思えなかつた。

「……試合はいつあるんだい？ 今日？ 明日？」

「死合いは翌日明朝より始めます」

それだけの、会話。世間話も無駄な会話もなにもない、事務的なものだけの本当に無味乾燥な会話。
息がつまりそうだ。

「……私、部屋に戻ります」

「……わかりました。四季様によろしくと言つておいてください」

「ま、同上」

二人ともお兄ちゃんのそばに居たいだらうし、弥生さんが何があつたのかできるだけ知りたいし、動向をつかんでおきたいからこれから動けない。……なんてもつたいたい。

「じゃ……」

なんとも歯切れの悪い言い方で、私は三人の部屋を出た。

……お兄ちゃん……弥生さん、何があつたんだろうね？

部屋に言つたらまずそれを訊こうと心に決めた。

第三十話 記念特別編！？（前書き）

アナウンス

……本日は『第三十話記念』、『ファインセ』特別番外編にお越しいただき、誠にありがとうございます。本日は第三十話を記念して、いつもならしないようなネタ、およびキャラクターたちの裏話などを盛大に使っております。

キャラクターについては重大なネタばれはないにしろ、勘のいい方ならわかってしまうようなものばかりです。嫌な方は読み飛ばすようにこので注意しておきます。

では、始めましょう。

それでは、行つてまいりましょう！
しばしの間のお時間拝借！
期待されるは喜劇感激！
そのご期待に添えるべく！
やってきました記念式典！

第三十回記念　　スタアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオ！

朝、いつものように通学路を歩いていると、前を歩いていた四様が言つてきた。

「……ええと、今日はね、大人の事情で文化祭なんだって！」

「……ええと、急になにかな？四様。今日は十一月十七日だよ？」

「うちの高校文化祭は十月に終わって……」

僕の右隣で歩いている弥生ちゃん（どこか遠い）と、ひりで冷たく冷静でちよつと怖い感じのする弥生ちゃんになつてているような気がするけど、それは全部夢で、気のせいだ、こことは無関係である。……無関係なんだ。）が、

「そうですよー。もつとおつづけの世に私と四季君との文化祭は終わ

つちやつてるんですからー！

「そうじやないよ……まあ、とにかく、昨日まで普通に学校だったし、今日も……」

僕がいい終わらないうちこ、隣で歩いていた間宮ちゃんが、

「いや、学校行ってみろよ？多分文化祭やつてんじゃね？」

「いや、やすがにそれはないとおもうんだけど……」

僕の言葉を受けて、後ろをついていた夜闇が、

「……おそらく、魔法でも使ったのではないかと」

「……魔法って、あるの？ないよね？」

僕の疑問を夜闇の隣でちよこんと歩いている零ちゃんが、

「知ってるかい、四季？異常発達した科学は魔法となら代わりがないのだよ」

「知ってる、零ちゃん？こくら異常発達した科学でも一日で文化祭にはできないと思つうんだ」

ふつ、これでいつもは会話が終わって、話しが進……

「こや、この場合の科学は魔法の代替となるほどなのだ、一日で文化祭度できないうはずがないだろ？『某ジャンプ作品』僕の私の勇者』のよつにっ！」

……いや、それは……

「それは、ギャグ漫画だからだろー。ギャグの一環として、いきなり文化祭になつていた学校のテンションから取り残されてんのが笑いになんだよー！」

間育ちゃん内容を含めた突つ込みを始めた！？知らない人誰もわ
かんないよ！

「何言つてるんだよ二人とも！落ちついて！なんで『僕の私の勇
学』の話になつてるのさ！」

「キミが始めたんだろ！」

「てめえが始めたんだろ！一いちいちつるせえんだよ、四季は！『
昇竜拳』！浮いたところを『竜巻旋風脚』！」

「ぐぼあ……ぐぼあ！？」

な、なんて危険な技を！――！

「こ」だけはいつものように、僕は氣絶しました。はい、ちゃんと
やん。

はーい、いつも保健室で「じわこまーす！なんと」の保健室、教室と同レベルで登場場面として多く登場するんですよ奥様！

「……何を独り言言つてるの、お兄ちゃん？」

嘘だ！？心の中を読まれた？

「読んでないよ。…………見ただけ」

「それを読むと言わずになんと言ひつけー？」

四様に新しい能力が芽生えた……だと？

「芽生えてないよ。今日だけ、特別」

「特別？なんで？」

「記念だよ」

「記念？」

よくわからない。

「で、文化祭って言つのは？」

「…………なにそれ？文化祭？10月に終わつたんでしょ、お兄ちゃん」

「あ、うん、そうだった……ね？」

あ、あれ？確かに冒頭でなんか大人の事情で文化祭つて……言つていたような……。

「夢だよ、お兄ちゃん」

ああ、そうか、夢かなんだそうなんだ！尺が全然足りないとか、いまさら書くのめんどくさいとか、そんなんじや全然ないんだ！

僕は一体何考えてるんだ?

「…………おまみ、みゅあめん。やけにへつてね」

うんありがと……つて、なんで四様が学校いるの?」

話の中ではいつもいるのでつい忘れがちだけど、僕と四様は三歳離れてる。

たから今もまた中学生一年生だし、今は中学転校準備中である。

「……大人の事情って、言わなかつたつけ？」

「いや、たぶん！？」「でもあれ夢だよ！？」

「ハーバードは二二一

なんで四様が使ってるんだ、それを！……あれ、なんで使っちゃ
いけないんだつけ？たしか間宵ちゃんあたりが使ってたような
？でも、間宵ちゃんがそんな可愛いことするはず

「誰が可愛くねえだ！」
あああーーー！」

「？」

ドガーニーーン!

保健室の扉を蹴り破つて、顔を般若みたいにした間宵ちゃんが乱入してきた！？

つてか、僕まだなにも言ってないよ？

「なんで理不尽な！」

ライダー キックの体勢になつたまま、間宵ちゃんがつっこんでき
て、僕は死
！

「 わせんせん！」

ぱつと、急に現れた夜闇がその蹴りを受け止めた！

「大丈夫です、四季様！あなたの身体、操は私が守り、そして私が奪います」

奪われるの僕！？

いきなり登場してきて何言つてるのこの人！？

「は！来たかクソメイド！今日とこり今日を殺してやるやんせえええええええ！」

「それは」ちらりのセリフです

ドガガガガガガガガ！

激戦、 激戦！

がらり。

「四季君、包帯替えにきました……ついでに、一緒にお着替えもして、も、もしかしたら、そ、その先も……つて、なんですかこの状況！？」

「四季、僕が開発したどんな傷でもたかどころに直る傷薬だ。学会に発表すればノーベル賞ものだが、今のボクはそんなものよりキミからの賞賛がほしい！賞賛ついでに、……その、こ、子作りとか……。つと、というわけで、くれ！……つて、一体なんだ！？」

一人とも、お願いですからもつと欲望をさらけ出すレベルを下げてください。全ての本音がダダもれです。

「弥生！てめえも来たか！夜闇同様消してやるぜ！覚悟しな！」
「それは、私のセリフです。四季様の隣は、私専用です」
「む！聞き捨てなりません！一人とも！……本気で行きます！」
「ボクだって今のは怒ったぞ。科学者怒らせたらどうなるか、その身に思い知らせてやる！」

ちよつとまつて、みんな、そんな、本気でキミたちが喧嘩したら、学校が……

「あ、お兄ちゃん、私猛烈に家に帰りたくなったね。そして全ての事象が私の帰宅に手を貸してくれる。……うん、じゃ、我家で大人しくしてるね？」

逃げるな！逃げないで！

「……めん、それ無理」

うわあああああああああああああああああああああああん！？

!

「行きます！」

あああああ
!!

「思い知れ、

直後に保健室はおろか学校全体が爆発して。

いつも通りの、日常だった。これがいつもどおりって、

僕は、僕は……！！

第三十話～記念特別編！～（後書き）

「ここにちは！秀句四季です！」

今日はお楽しみいただけたでしょうか？

楽しめたのなら、ありがとうございます！楽しめなかつた方は、「めんなさい。」

ここからは、キャラの紹介に入りたいと思います！

キャラの人に自己紹介してもらいますが、時折ネタばれなどがあるかもしれません。その時は容赦。というか、勘のいい人ならネタに気付く、という程度のものですが。

では、始めます！トップバッターは主人公を務めさせていただきます、僕です！

「秀句四季です。好きなものは特にありませんが、弥生ちゃんたちの料理だけは金輪際食べたくありません。あ、自殺するときは別ですが。」

ずっと前に両親が死んでしまって、その反動でさびしかったんですね。だから、急に現れた三人をすんなりと家に入ってしまった、ということです。

名前の由来は、四季を楽しみ、四季の違いを美しく感じれるような子供に育つてほしかつたらしく……え、違う？

『好色 好く色（古語辞典）しゅうくしき（国語辞典）秀句四季』？

……え、僕つともともとそんなキャラ期待されてたの？ちょ、ちよつと沈んできました……僕の自己紹介はこの辺で……」

.....を、気を取り直して、次の方！一番おしゃれで、でも今のところ大変なことになつているフィアンセ如月弥生ちゃんです！

「え、ええっと、」紹介にあずかりました、如月弥生、です！辛いものが好きで、その影響かしてちょっとだけお料理も辛めの味付けにしてます。

体育とか苦手なんですが、……その、戦いとかは、できないわけじゃ、ないです。

名前の由来は、私が一月二十八日に生まれたから、たそうです。
え、違うんですか？

『なんか中途半端な奴 行つたり来たりな名前（古語辞典パラ
見）一月 ああそう言えば一月つて閏年とかあつたなあ……そう言
えばその日に生まれた人つてどうなるんだ？ おそらく三月だと勝
手に推測 如月（一月）弥生（三月）』……なんです、か。
……なぜか涙が出てきそうです。泣いても、いいです、か……？

え、ええと、弥生ちゃんはちよつと泣いて出てこれないので、次行きましょうか。

「（ペニリ）四季様から紹介されました、十三夜月です。好きなものは四季様、嫌いなものは四季様の嫌いなもの、……つまり、私の、料理、です……。私の名前は満月の一歩手前、つまり十三夜月を意味し、そして夜闇は……え、違う？

……？

……ええっと、コノハ、でしたか。作者は……今から排除してきます。殺してきます。殺戮してきます！…どうせパソコンの前に居るのでしょうか！覚悟なさい！」

……ええっと、ちょっとどこかに行つてしまつたので、次の方！…途中で文が途切れなきやいにけど……

「……心葉零だ。好きなものは研究、嫌いなものは研究所の連中だ。……僕の名前に関するてはまだ言えないそうだ。……ふむ、この作品でもまだまだ謎に包まれたキャラだからな。おいしいところは残しておきたいのだろう。気持ちはわかる。もつ長くない作者よ。余生あと幾分か。ま、せいぜい頑張りたまえ」

……なんかいい感じの言葉残して去つて行きました。……まあ、明かせない、って言うんなら仕方ないんじょうね。

では、次行きましょうー僕の妹、秀句四様です！

「こんにちは、いつもお兄ちゃんがお世話になつてますーさつそく自己紹介行きますね！私の名前は秀句四様！トランプのガラガヒントらしいですよー『四季』に合わせたかつたんでしょうね！変換が面倒だつていつとも申してるけど、自業自得ですよね！好きなものはお兄ちゃん、嫌いな人はお金にがめつい人です！では、失礼します！」

「……

一番自己紹介らしい自己紹介だったね。

じゃ、時間も押してることだし、そろそろお開きに……

「東堂間宵。好きなものは戦うこと、嫌いな事は……いやつって

無視されることだ

「うわ！いたの、間薙ちやん……」

「私の名前は『どひどひまよい』から。けしてハ九寺の奴から来たわけじゃねえからな。ちなみに弥生と間宵たまに書き間違うとか作者のバカがほざきやがる……！私は許せねえ。ありえねえだろ！？『ま』、と『や』、ひと文字しか違わねえんだぜ？……ああもう！あの野郎、ふつ殺してきてやるー！うがああああああああーー！」

……え、ええっと、これで全員、かな？あとほりゅうとしか出てきてない脇役さんとか、そんなん。

では、これにて第三十話を終了します！

駄文散文失礼しました！

（）愛読感謝またじく

第三一話 消灯前の兄妹！？

気になっていた。

僕はかめじやないんだ、変化があれば気が付くし、勘づきもある。

でも、確証がもてない。

何か、何かが頭のピースに足りないんだ。

絶対に何かが弥生ちゃんの中で起きている。それが何かがわかれ
ば……

そう、僕が煮詰まっていた時だ。

「お兄ちゃん」

きい、と実際に普通に扉が開けられるのに違和感を感じ、ああ、慣
れって怖いな……と思いつつも、

「お帰り」

返ってきた妹に、僕はそう言った。

「ただいま」

どうも全体的にいやつやめてかしてかして、血色は良くなっているん
だけど、どうも気が重いみたいだ。

僕になにを訊けばいいのか困ってる……みたいな、そんな表情。

「なにがあったの、四様？」

そんなこの子の顔は、できるだけ見たくなり。よつやくやつと手に入った兄妹同士の生活なんだ、できるだけ笑って過ごしたい。

「……な、なにも、なかつた」

でも、この状況で笑えるほど、僕の妹は神経が太くないよつだつた。

なにもなかつたなら、そんな重苦しい雰囲気にはなつていはないはずだよ？

「なにもなかつたの？本当に？」

「……うん」

あれれ、答えてくれると思ったのにな。意外と答えてくれなかつた。

どうも、何か重大な秘密があるんだと、僕は推察する。

「ねえ、お兄ちゃん？」

「なに？」

「弥生さんのこと、どう思つ？」

「弥生ちゃんのこと？」

それは彼女が豹変したようになつた、といつことだらうか？

「……多分、彼女なりの事情があるんだと思つよ。ここではそうしてなきゃいけない、とか」

あ、とつとに出た言葉のわりには筋が通つている。

彼女はこの里では冷静で冷血でいなければならない、とか。意外

とあります。

「……そう、かも。ありがと、お兄ちゃん」

「どういたしまして。今日はもう遅いよ。寝よっか

もうそろそろ十時だ。四様はそろそろ眠る時間なわけだけど……。

「……う、うん」

どうも、歯切れが悪いな。

「どうしたの？」

何かあつたのかな？

「……その、お兄ちゃんって、口元で寝るんだよね……？」

「そうだよ？それが？」

「私が誰か、わかつてゐ？」

「秀句四様。僕の妹。ちゃんとわかつてゐ？」

本当にどうしたんだろう？

「……したら、知らないから

「え？」

今なんて？

「……私に手を出したら、知らないから。」

「……は？」

手を出す？

誰に？僕が？四様に？

「……そんな心配してたんだ」

「悪い！？」

いや、悪くはないけど……、その。

「かわいらしいな～って」

僕がやつづ言つと、ズサササササ……っと壁の端まで引いた。
そんなにドン引きするほど危ない」と言つたかな？

「……お、襲うつもりね！」

「襲わないよー」

なんで実の妹襲わなきやいけないんだよ！手近なところ二人も
他人がいるのに、なんで！

「……だ、だつて、かわいいらしこうって」

「君の中ではかわいい＝襲うなのかなー？」

恐るべきことに、四様はつなずいた。

……そう言えれば四様、昔は可愛いものがあつたら飛びついて田が
暮れるまで抱きついたり頬ずりしたりしてたなあ……。

「……まさか、あれがまだ治つてない、とか？」

「病気じゃない！」

「あのレベルまで行くと十分病気だよー。」

「な……お兄ちゃんこそ、美少女5人もはべらせといて誰にも
手出しあしないなんて病気じゃないのー？」

「なんで今数に自分を入れたんだー？襲われたくないんじゃなか

つたのか！？」「

「それとこれとは別よ！」「

「別なの！？」「

四様には驚いてぱっかりだよ！

「……何言つてんのよ、私たち」

「ほんとだよ。兄妹で何言つてんだよ

ほんと、兄妹で好きだとか、愛し合つとか、ありえない。そんな兄妹がいたら連れてきてほしいよ。

「……なんか、とっても身近にこる気がしてきたわ」

「奇遇、僕も」

なんでだろ？うね？

「……ま、いいや。布団は敷かれてるし。あとは寝るだけだね」

「……うそ

今日は長い間移動があつたし、もう僕は疲れていたので、布団に入る。

「……お、襲わない…………？」

「襲わない襲わない

僕が念押していくる四様に軽く答えると、みづやへ信用したのか

僕の隣の布団に入った。

……どれだけ信用されてないんだ、僕は。

「……おやすみ
「おやすみ、お兄ちゃん」

僕は電気を消した。

第三十一話／闘技大会！？

「お兄ちゃん……起きてる？」

暗い部屋に、か細く、確認するような声が響いた。

「起きてるにきまつてるだしょ。電気消して一秒も経てないよ？」

なんか調子が狂う。いつもの四様はもつと堂々としていて、力強い。それなのに今の四様はとても弱氣で、頼りなかつた。

「……お兄ちゃん、私ね、明日……戦うんだ」

「何それ、聞いてないよ」

四様が、戦う…？

一体だれと…？どうやって…？

「……私、なんだかこの里の人たちに示さないといけないみたい。お兄ちゃんの近くに居ていいのかどうかを」

「そんなの示すまでもないよ。君は僕の近くに居ていいんだ。いいんだよ」

何をこの里の人達に吹き込まれたんだろう？僕のそばにいいかどうかなんて、誰かに許可を取らないといけないなんて今までこの子は言わなかつたのに…

何考てるんだ、この里の連中は…？四様に戦わせる…？どうせエキスパートをぶつけてきて四様をつぶすつもりだろう…？こんな

女の子を慮めてなにが楽しいんだか……

「……それでね、私、勝とうと思ひ」

「……どうこう」と?

僕の記憶が正しければ、四様は武術の類は一切やつていらないはずだ。喧嘩は確かに強かつたけど、それでも運動は苦手な方だった。

「……私、勝ちたい。勝つて、弥生さんになにが起つてゐるのか知りたい。……知らなきや。友達、なんだから」

友達。

弥生ちゃんの控えめな笑顔が頭をよぎる。

「……僕も、頑張るよ」

「うん」

きっと僕はなにもできないんだろう。でも、見守つて、応援するぐらにはできると思う。

絶対に、弥生ちゃんを元に戻して見せる。

僕は誓つて、目を閉じた。

隣では、四様の寝息が聞こえていた。

「僕の名前は、秀句四季です」

「庄厳と厳格をもつた声色で、堂々と駆け乗りあげる陸月さん。

月戦闘術の長よ」

「これがあの弥生ちゃんなんだなんて、一体だれが信じれるのだろうか。

淡白で簡潔な物言い。

「……ふむ、弥生の許嫁か」

「はい、そうです」

僕は起きてすぐここに里の領主に御用通じをやれることになった。

……次の日。

「私は、秀句四様です」

僕と四様が自己紹介。

「……東堂間宵だ、です」

一瞬ため口を利きそきになつて、言になおす間宵ちゃん。

「十三夜月夜闇です」

「……十三夜月？」

睦月さんの隣に居る純和服の切れ目女性が、夜闇の名前に反応した。

「はい、私は元『月』の住人。今は四季様にお仕えさせていただいております」

夜闇の返答が何かまずかったのか、その女性は睦月さんに何やら耳打ちをすると、元のたたずまいに戻った。

何を言つていたのだろ？

「ボクは心葉零」

睦月さんほどではないにせよ、かなり堂々と言ひ放つた零ちゃん。子供っぽい外見とは裏腹に、何やらすさまじいオーラを感じる。

「……ふむ、よくわかった。……四季殿は顔に似合わず、色好みなのだな」

「違います！」

全然わかつてない！僕をそんな女コマシみたいに言わないでよ！

「ぬはは、冗談だよ」

睦月さんはそう快活に笑うと、指を鳴らして周りの人たちに何かを指示する。

「お主たちに来てもらひたのには二つ、理由がある」

「ががが、と睦月さんと女性の間の畳が割れて行き……いや、その後ろの空間も割れてる？ 一体何が……」

「一つは、四季殿が従えているその女性たちに弥生と並ぶ資格があるかどうか」

ああ、そうか。割れてるんじゃない。開いているんだ。
力パリとさながらドールハウスのように家が開き、外が見えるようになつた。

「もう一つは。

如月戦闘術史始まって以来の伝説、如月弥生の実力を……四季殿に見せたくてな」

その開いた先にある外に広がる光景は、まるで闘技場のようだつた。

中央に位置する一辺20メートル、高さ1メートルほどの中方形の土台。

その周りを十メートルほどを囲つた土の地面。

そして、全体を囲つようとしてある、観客席。

観客席は満員御礼で、立ち見をしている人までいるぐらいだ。

「如月戦闘術は世界に名だたる流派。故に、このよつな公式性のない試合でも、こうして人が集まる、というわけじゃ」

すでに　土台（以降はリングと言おう。ロープこそないがそれにしか見えない）にはもう人が一人上がって、戦闘を繰り広げていた。

斬る。切る。防ぎ、返す。それをかわして、反撃。

武道に関して素人な僕が表現できるのはこれだけであとは一瞬一瞬の連続。

このリングに妹や間宮ちゃんたちが上がるのわかっているのだが、こう思つてしまつた。

きれいだ、と。

こうして全ての技術を持つて、戦う。それはとても洗練されていて、無駄がない。その動作一つを取つてみても、美しい。

「……すげえ……！すげえよー四季もそつ思つだらーー？」

そして、暴力女こと間宮ちゃんも、僕とおんなじことを思つていたようだ。

「……ち、控室へ向かうがいい。お主らの試合は最初の方だ。
… ょもや一回戦で負けるなどとこりは……あるまいな？」

その問いにみんなは、

「おうよー」
「当たり前です」
「フン、当然だろ?」
「当たり前よ」

と、頼もしい返事をしたのだった。

……いろいろ不安だなあ……

第三十二話「さなし準決勝！？」

トーナメントの一回戦。

参加条件はなし。

準決勝までは一試合3分で、降参せらるか、氣絶せらるかすれば
勝ち。殺しは！」法度。

武器、魔法、何でもアリ。

……とまあ、ルールを簡潔に説明すれば、こんな感じ。

僕は殺し合ひのよつたドロドロとしたものを想像していたのだけ
れど、意外とクリーンで安心できた。

これで死ぬ、なんてことないだらうから。

でも、それでも。

みんなが戦うつていうのに観戦しかできなに悔しさは、消えるど
ころか薄れもしなかつたけど。

戦闘は苛烈を極めた。

……「うこんだけじね？」

いや、正直僕の認識が甘かつたとしか言えなこと。

なんにも見えないんだもん。『メントも描画もしようがな』って
言つか……

まあ、里の人たち同士の戦いなら、『せつめつ見えるんだけじね？

間直ちやんとか弥生ちやんとか夜闇とか零ちゃんまでもが僕の、
いや一般常識の認識のおよばないレベルになつていて、戦っている
のかどうかもわからな『ぐりー』。

……手加減されたんだな……ってつづく想ひ。だからと云つ
て感謝なんかしないけど。そもそも一瞬で人を半殺しにできるよつ
な力でなんの訓練もしてない一般市民（僕のことである）殴るなよ
な……

「ふむふむ、なかなか……」

睦月さんはそんな彼女たちを見てもなかなかびまつのようにだ。

「やうですわね、なかなかやりますわね」

その隣の純和服の女性、睦月さんのお奥さんである如月卯月さんが

少し残念ながら言つた。

「けれど、弥生が一番です」

自信に満ちた声で、卯月さんは言つた。
よほど弥生ちゃんの実力を信じているのだろうか。いや、きっと
そうだらう。でなければ……こんな言葉は出でこない。

そう思つてこらへり、放送が流れ、次の試合の開始を告げる。

準決勝。

十三夜月夜闇と、心葉零。

二人の戦闘が今、始まろうとしていた。

「……やれやれ、暴力女と当たらなかつたことを幸運と喜ぶべき
か、キミと当たつたことを悲しむべきか……。夜闇、キミはどうだ
い？」

不敵な笑みと共に夜闇に語りかける零ちゃんに、夜闇はため息一
つついて、

「あなたとだけは戦いたくなかったのですが……これも運命、で
すか」

氷のような表情をわずかに嫌そつにしかめながらつぶやいた。

「運命？それは四様の得意分野だろ？……ま、異常な運の良さは認めるが……弥生に当たつてしまつことを鑑みれば、特殊能力といつほどのものもあるまいがね」

そう、四様は14回戦までは全て不戦勝で勝つていた。でも、15回戦目で運悪く弥生ちゃんとあたり、戦闘開始と同時に降参するしかなくなつた。

……たしかに、零ちゃんの言つよう、少し疑問に思つといふもある。あるけど、14回も不戦勝してれば、それは十分特殊能力なんじやないだろ？……？

「確かにそうだったとしても、私にはそのようなこと、まったく興味ありません。今私がしたいのは、あなたを打ち倒すことです、零さん」

「おや、キミとボクの意見が合つとは、これはまた珍しい偶然があつたものだね？ボクだって今すぐにでも弥生と勝負し、勝利を收め、四季に褒めて……いや、四季が一体自分のために動いてくれた人間にどう反応するのかが知りたいのだ。無駄話は置いておき、始めようではないか」

「ええ」

今一番僕が頭を悩ませていたのは、これだつた。

四様を除くみんなが、ノッリノリで戦つている。まるで心配した僕がバカみたいだ。

まつたく……みんな好きだなあ……

戦つてもいいことなんて、ないのにね。

「では」

「うむ」

白い髪の科学者と、黒い髪の従者。

武闘派と、頭脳派。

本来なら絶対に相まみえるはずのない組み合わせの一人が、激突する。

第三十四話／夜闇バトル！？

静かな戦闘開始。

夜闇が零ちゃんに向かつて真っすぐに向かい、メイド服のビームを隠していたのがついナイフを取り出して切りかかる。

「ふん」

それに対しても零ちゃんはなんのアクションを起さなかつた。よけることも、うけることもしなかつた。

しかしそれでも、夜闇の攻撃は零ちゃんに届く前に、まるで見えない壁が阻んでいるよつて止まつていた。

「なんですか、これは？」

「NO.642『プロテクト』。物理攻撃をほぼ無効化する。
まあ、試していないが核攻撃の衝撃には耐えれる設計だ。……放射能は防げないがな」

いや、それだけ防げたらもう十分でしょー？

「ああ、そう言えばあなたは科学者、でしたね」

「そうだとも。他にはこんなものもあるのだぞ……へりやー。」

白衣から取り出したのは、拳銃。……拳銃ー？

「おにおい、零ちゃん、それじゃ殺しちゃうー。」

ここからだと届かないとわかっているのよ、僕は言わぬこまへ
れなかつた。

ぱあん！

軽い音と一緒に吐き出された、ワイヤー付きの銃弾。速度はゆっくりで、それほど速くはない。それでもメジャー・リー・ガード投げたボールの球ぐらいの速度はあるけど。

それを夜闇はなんてことない動作でよける。

「なんですか？」このよつなおもぢやで……

「……ふむ、『スタンガン』でもだめか」

口上を無視し、拳銃をすぐに捨てるべ、今度は白衣からナイフを取り出した。

カチリ、と零ちゃんが柄にあるスイッチのよつなものを押すと。

ピィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
ン――

すごい高周波の音が、闘技場中に響き渡った。

こんなに離れているといひからでも十分耳に痛いのに、近くに居る夜闇はもつとうるせこだわづ。

「……なんのまねですか？ 音で攻撃ですか？」

まったく意に介さない、といった風に零ちゃんに訊く夜闇。え、うそ平気なの？

「ふむ、これでもだめか？自信あつたのだがな……。まあ、いいON・235『ソーックナイフ』！」

叫びながら、零ちゃんは高音を発するナイフを夜闇に突きつけ、突進する。

「いくら強い武器兵器を身につけようとも、やはりあなたは素人ですね。『十六夜月十字』」

零ちゃんは思い切り振りかぶり、渾身の一撃を夜闇に繰りだすが、ナイフが夜闇のいたところに届くには、彼女はもういなかつた。どこに行つたのか、と零ちゃんが確認する前には、夜闇は零ちゃんの後ろで、その白い首筋にきらめく刃を突きつけていた。

「……そのナイフ、なんですか？」

不思議そのもの、といった風に夜闇が訊く。顔は無表情のままだけど。

「刃を高速振動させて切れ味を上昇させたナイフだよ。まあ、ありていにいえばチョーンソーを小型化したもの、かな？」

その答えを訊いて、夜闇はしばらく考える。

そして。

「ここで降参して私にそのナイフを譲るか、ここで死ぬかを選ん

「でぐだれこ

#まるで当然であるのかのよつこ、降伏の次に自分の要求を告げた。

「やれやれ。この状況で選べもなにもないだらうへ。降参だよ。こいつは少々ボクには身に余っていてね、ちよづじよかつたよ。末永く、みるしへね」

「了解しました」

零ひやんはナイフのスイッチを切って、高音を止める。

勝者、十三夜月夜闇。

決勝進出だった。

第三十五話／弥生と間宵／

準決勝、もう一組は弥生ちゃんと間宵ちゃんだった。予想はできていたし、多分この二組が組み合わせになることぐらい僕にだつて覚えていたよ。

……でも。

この二人は、他の参加者とは格が、核が違つた。

弥生ちゃんは驚異的な技術と戦況を読む力で。

間宵ちゃんは純粋に圧倒的な暴力で。

それぞれ、勝ち上がってきた。

一人が、リングに上がる。

「……よお、弥生」

「こんにちは、間宵さん」

片方は敵意むき出しに。片方は感情が消え去ったかのように冷静に。

「……さあ、弥生、話し合おつぜ。……私ら流になー！」
「ええ、話し合いましょう。話し合いましょう！」

しばらく、無言。僕ら常人ではあざかり知らぬ会話を、一人はし

てこるみたいだった。

「行くぜー。」

沈黙を破ったのはやつぱりか、間宮ちやんだった。
鬪気をまとわせる」とのない、純粹な拳。

それを無言で横に受け流すと、弥生ちゃんは脚払いをかける。

「はーまたかよー。やつ何度も食ひつかってのー。」

軽やかに跳んでよけると、こつたん距離をあける。

「それにしても、昨日もバトったといひのにまたお前と戦つて
んだからなあ。やつ言えば最近バトってばっかだな? やつ思わねえ
か、弥生?」

「やうですね。その大半はあなたのせいですが……。」

言葉の途中で弥生ちゃんは間宮ちやんに突進し、手刀で首を薙ぐ
みつて振る。

もちろん間宮ちやんはよけるけど、もし当たつていたらあれ、死
んでいたんじゃないだろうか?

「は? 知らねえよんなこと。つうか今私らバトってるのは間違い
なくお前のせいだよな、弥生?」

「それほど戦いが嫌なら彼の前から消えたらいいのでは? 使える
い戦士はただのクズですよ。」

辛辣に言つ弥生ちゃんは、悲しそうなんだけど、表情には出ない。

「はあ？ 私が戦士い？ 私はただの女子高生だよ！ いつ私が戦士になつた！」

「闘氣をまとえてこの里の人間に余裕で勝てるただの女子高生がいてたまりますか」

「だから、私は高校生だつての」

「なぜそこまで頑なに否定するのですか。あなたらしくない」

「てめえがそれ言うか？ 自覚してんのか？ 自覚なしか？ 天然か？」

言い合いながらも、拳と脚は激しくぶつかり合い、競り合い、いつしかその勢いは命を研ぎ澄ますよつにだんだんと速く、強くなつていった。

それと同時に言葉の強さも純粹に攻撃力を増していく。

「ええ言いますよ。普段のあなたなら笑つて肯定するぐらこのことはしたでしょに。……彼がいるからですか？」

「はあ！ ？ もつとわからんねえし！ なんで四季がいるからつて私がそんな殊勝にならなきやいけね」

「私は『彼』と、言つただけですが？」

「！ ！ ？」

顔を真っ赤にして、心なしか攻撃の勢いがました間宮ちやんは大きな声で否定する。

「ふざけるな！ 私の知り合いで男つつたら四季しかいねえだろ！ てめえはどうなんだてめえは！ 四季のことがさんざ好きだとかぬかしやがつて、勝手に部屋上がり込んで！ そのわりにやすいぶんとあいつに冷てえじやねえか！ ああ！ ？ 学校でのお前は可憐子ぶりっこだつたつてか！ ？」

「違います！私は、私がこうなったのは仕方のないことで、あれは別に可愛子ぶっているわけではありません！」

「必死に否定するじゃねえか。図星かこの野郎！」

闘気をまとわせた必殺の一撃。それをかわしてカウンターで心臓を狙った拳を放つ弥生ちゃん。

「つぶねえ！殺す氣か！」

「それもいいような気がしてきましたよ。そう言えば私とあなたは、恋敵、でしたね！」

「違え！私は別にあいつのことは好きでもなんでもねえ！」

「何でもないならなぜこんな辺境にまでついてくるのです！せめてあなたの存在がなければ幾分かやりやすかつたものを！」

「は！ずいぶんと暗え考え方だなあおい！そんなことだからいじめられんだよ！」

攻撃をかわしつつ、二人はどんどんどんどんヒートアップしていく。

「いじめ？違います、私が我慢してあげていたのですよ！」

「は！私だつたら死なねえ程度に痛めつけるけどな！それもできなかつたのかよ！」

「私はあなたではないのです！手加減なんてまだうこじいことをやつてられますか！」

「てめえとことん極端だな！殺すか無抵抗かのどっちかしか選べねえのかよ！」

「そうすることしか知らないのですよ！」

互いの衣服はボロボロ、裂けた皮からは血が滲みでて、二人はも

う充分に疲弊していた。

でも、互いに一步も譲らない。

一切も一瞬も手を抜かず、戦っている。

「いいですか、私はこの里に生まれました。如月の名を背負った
ために生まれました！期待にこたえるには戦う術が必要不可欠だった
のです！そしてそつやつて戦つて戦つて戦い続けて、気がつけば殺
すかそうでないかの一者折一しかできない頭になつてているのです！
武器を取れば全て反射で動くから、絶対に手加減なんてできないの
です！戦うたびに血に濡れます。戦うたびに汚れます！その度その
度に、私は普通の生活ができなくなつていいくのです！」

あなたにこの気持ちがわかりますか！？

じゃれあいすらもできない、そんな私の気持ちが！手加減ができる
あなたのじれほじりやらんでいるか、わかりますか！？

気軽にになれあえるあなたたちがどれほど恨めしいか、わかります
か！？

「わかるかよんなもん！」

今までで一番大きな鬪気の塊が弥生ちゃんに命中し、弥生ちゃん
は吹き飛ばされる。

仰向けの状態からすぐに起き上がり、膝をついた状態にまで立て
直すけど、そこからは立たない。

……いや、立てない、かな？

「血に汚れてる？手加減ができない？ななこと私に言つな！誰に

も言つた！そんなんの私らに言つてどうすんだ！これからはずつとで
めえに気い使えってか！？ふざけんな！甘えんじやねえよ！」

「でも！私は、それでも」

「！」

図書一覧

「てめえほんとは弥生じやねえだろ？わかんだよそれぐらい！私は格闘家だ、一度戦つてその次に太刀筋全然違つたら馬鹿でも気付く。……ああん？どうしてそうなつたんだよ、てめえはよ！」

弥生ちゃんが、別人？それってどういう……。

「いいが、私はてめえが人格一つあるうが三つあるうが気にしねえ。でもなー・ウジウジされるぐらいだつたら相談に乗られた方がまだマシだつつうのー。」

で、ついでに書くべきではない

一でめえは愚痴と相談の判別もできねえのか！愚痴はごめんだが相談ならいつでも受け付けてやるってンだ！ああん？どうすんだよ

弥生！

弥生ちゃんは、信じられないものを見る限りを見開いていた。

「……」、降参します。だ、だから

「だから、なんだよ？」

そして、ぎゅっと胸の前で何かを決意するよつに手を握る。……

「だから、相談に乗ってください」「わかつたぜ。……しゃーねーな

照れくさうに露面ちやんが言つと、準決勝は終わりを告げた。

勝者、東堂間宵

決勝は、もうすぐ。

第三十七話／決勝！そして…～

「……ったく、なんでもめえと戦わなきゃいけねえんだよ、夜闇」
「いえ、戦う必要はありませんよ？」
「は？」
「降参します」
「…………マジで？」「マジです」「マジですか

そんな情緒もへったくれもない会話だけがかわされ、この如月の里主催の格闘大会は終わりを告げた。
あとは、帰るだけ……だと思つ。

「……私は、この里に生まれました」

まるで悪役が最後の締めに自分の出血を詰めよつて、弥生ちゃんは自身の身の上を話し始めた。

あまりこもあつたりとした決勝の後、表彰式を終えて、如月の長一人からおほめの言葉をいただいて、自室に帰つて、じょらくした

後のこと。

さつきまでの愚痴のよつなものではなく、純粹にどうすればいいかを、僕たちに訊きたくて話していくみつだつた。

「でも『私』は優しすぎたのです。攻撃一つにもためらいを見せ、そんな優しい子供だったのです」

でも弥生ちゃん、祖父母の屋敷でも、学校でも、結構暴れてたような気が……。

いや、きっと氣のせいですよね、はい。

「でも、戦わなければいけなかつた」

そんなことよりも、ついつわれた衝撃の告白につけてはみんな突つ込まないのかな?

「……ふうふ、血に染まらなきやいけない運命、つてやつか」

「うん、そこだよ、そこ。なんでみんな納得してるかな?」
「日本だよ?人殺しはいけません。」

「実戦訓練は、外国でやつていきましたから……日本の法律には触れないと思います」

「触れなきやつていいってわけじゃないよー?」

すかさず突つ込んでしまつた……けど、うん、これは仕方ないよね?

「……殺さなければ、殺されていたのです。正当防衛です」

……これ以上突っ込んだら日本の法律に大いに引っかかる気がしてきただので僕はもう突っ込まないことにした。確かに人殺しは悪いことだけど、うん、その、もう過ぎたことだし。これから先しなければいいこと何じゃない、かな……？

「…………殺すには、覚悟が必要です。しかし、『私』は覚悟を決められなかつた。だから、別の誰かに肩代わりしてもいいことを祈つた。願つた。その結果が、私です」

「一重人格、つてやつか？」

「ありていにいえばそつなります」

弥生ちゃん（これからは今の彼女のことを裏と言おつ）は自分が作られた存在だと言うのに、意外とけろつとしている。

「私ですか？『私』の願いは私の願い。『私』が私に汚れると言うのなら、いくらでも汚れてあげますよ。……それに、戦うのは嫌いではない、ですしね」

…………ええと、ここ一番の笑顔でそんな怖いこと言われても……反應に困っちゃうな、僕。

「…………ふむ、おそらく戦闘するための人格なんだろうな。だから戦うことにかんする物はなんでも好みになる。……つまり、今のキミは戦闘嫌いの四季があまり好きではないだろ？？」

「はい」

即答……。

「……ど、言つても好きではない、だけです。『私』の記憶を引き継いでいるのであなたへの想いは覚えていますが、私は戦いを好みません」武士らしくない殿方は苦手です

はつさつと言われちゃつたよ。好きな記憶を持つていてもなお嫌いだと言われる僕……。

そんなに男らしくないかな？たしかに武士らしくはないだらうかど……。

「で？どうすりやめてめえはいなくなんだ？」

「いなくなりません。しかし、私がいると『私』の『私』を困らせていくと『私』の『私』もまた事実。どうすればよいと思います？」

やつと、本題に入った。

……つまり。弥生ちゃん（裏）はいなくならないけど、このままだと弥生ちゃんが困るからなんとかしてほしい、ってわけ……かな？

「……難しいな。……が、でもなんとかなんだろ。ちよつといつかにいや」

「え？」

驚く僕に気にも留めず、間甯ちゃんは弥生ちゃん（裏）を連れて隣の部屋に……。ど、どりして？

「……はつとナ」

やう言ひと、昨日と同じく、一人は自分の部屋に消えたけど……なんか意味合に違つような？

「……ボクはしばらく、そうだな、一時間ばかりでいいと聞いてる」と
する。そっち方面はまだ、ボクには早いと思つからな

「わ、わたしはしばらくと言わず、もう今日は絶対にあっちに行
かない!……食べられたらいやだもん」

ふたりとも……何を言つてゐるのかな?

あはは、全然わからないなあ……わからないよ……。わかつてた
まるか!

「……四季様」

「夜闇」

ふつと、後ろから夜闇が僕の名前を呼ぶ。

見慣れた光景からか、四様も零ちゃんも特に何も言わない。二人
で姦しく会話を楽しんでいる。

その会話はどこか遠く、まるで別世界の様。

まるで僕と夜闇だけが空間から切り離されたような氣さえする中、
夜闇は言った。

「「」命令、完遂いたしました」

「……「」めんね、夜闇」

僕はまず夜闇に謝る。

「いえ、命令の変更に少々戸惑つただけです。特に不満には思つ
ていませんが

「……それでも、頑張つてただろう?それなのにいきなり『決勝

戦で降参しろ』なんて……』

「構わないのです。私はあなたの従者。
従者とはただ従つにあらず。主人が間違つて居るのなら、正すのが役目。

……しかし、今回私は四季様に間違いがあるとは思いませんでした。よつて、従つたまでです」

「……それでも、『ごめん』

僕はもう一度、深く頭を下げた。

「……四季様、頭をおあげください」

「でも」

「私は命令を完遂したのです。……謝りられるよつけ、その『なに?』

何かしてほしいことがあるのだらつか?それなら、僕にでもある」となら、なんでもする。

「褒めてください」、四季様

そのあまりにもかわいらしい頬みに、僕はつい頬が緩み、
「いいよ。ありがとうございます。よくやつたね」
その雰囲気に流されるまま、頭をなでしました。

「…………」

一瞬夜闇は感極まつた表情をして、でもすぐに無表情に戻った。
「ありがとうございます。これからもなんなりとい命令を……」

そう言つた夜闇が言つた瞬間。

「で、だな、その理論を完成させた暁には、全ての人間が等しく人間を愛するようになつて……おや、どうした四季？」

「どうしたの、お兄ちゃん」

ふつと、一人の会話が急に近くなつた。

いや、今までが遠かつたのだ。

一步も動いていないはずなのに……どうして？

「あ、いや、なんでもないよ」

「そうか」

「そり。……じゃあ零せん、これは

……れつとり、弥生ちゃんのことは間育りちゃんがなんとかしてくれ
る。

相談を受けて引き受けたら絶対に解決するのが間育りちゃんなんだ。

だから僕は、座つて待つていろ。

また、平和な日々が戻ることを確信して、僕は口を開じた。

「へんと、畠が頬に当たる感触がする。

ああ、いい気持ちだ……

く――

第三十八話／ライバル登場！そして帰宅…～

「……………帰りましょ、」

……………どうしたのかな？そんな風に顔を赤くしてもじもじしながら
なんでそんな風に恥ずかしそうに言つのかな？

「うし、因縁。わいつと帰るだいじんなとこ」

心なしか間宮ちやんせりつをよりも肌のつやがいい……とこつか
なんかすつきりとした感じだった。

…………まさか、たべちやつたんじや…………

氣のせいだ。妄想だよ。そんなの、間宮ちやんがするわけが

ありそつだけど、ないことにした。

「やうだね」

なにも知らないふりをして、僕は言った。

少しだけ、時間は戻る。

「よくおわかりに」

「もつたいぶらずに教える」

少し強く言ひ、弥生は簡単にうなずいた。

「……特に、何もありませんよ。あえて言ひのなら、『IJの里』と『IJの里以外』では、空気が違つのです。……世界が違つ、とも言えますか」

「ふうん」

なんじことなによひ、間甯はつぶやく。

弥生にはこれ以上訊いてきても教える氣などなかつたし、間甯はそれだけ知れたらもう十分だつた。

「間甯さんよ……どうしてこのようないふを？」
「IJのよがな、つて？」

いたずらっぽく話を返す間甯はほとんび黙のようだつた。

「その、『私』を氣を使って封印する、などと……そんな芸術、よほどの武芸者であつても、できるとは思えません。……IJれはもはや、祈祷師の領域です」

「んなもん大丈夫だよこれぐらい。ちよつとした余技つてやつだ。こんなの技のうちにもはいねえつて」

弥生は恥ずかしそうに顔を伏せた。自身が感心したものが、使う本人にはまるで価値がないかのように言ひ。弥生にはそれが、自身の武芸者としてのそこが相手に知れたように感じられて、恥ずかしか

つたのだ。

「……といつ」とは、いのよつな時は、いつもしていゐのですね？」

「……ま、そういうことになんな」

「……ほかにこれをしたことがある人は？」

「言うなよ？」

「はい」

「……一人だけ」

「は？」

「一体何を言われたかと、一瞬弥生はわからなかつた。

「お前とあと一人だけしか、これをしたことがねえ。……まあ、実用レベルじゃねえから、技のうちに入んねえんだよ。……その一人つてのがな」

少しだけ悔しそうに、間宵はその名前をつけたした。

「……四季の野郎だ

四季の過去に何があったのか、つい想像してしまつ弥生（裏）であつた。

時は戻る。いや進む。

「つ～～か～～れ～～た～～！」

間宵ちゃん部屋に戻るなり叫んで寝ころんだ。

「そ、それは、あんなふうなことすれば誰だつて疲れます!」

『のままわとに戻らないんじやないか、と心配していた僕だったけど、その心配は杞憂に終わつたようだ。

里を出たとたんに『あ、あれ?』みたいなことを言つてこつもの弥生ちゃんに戻つたのだ。

それから行つた時と回りよつに歸走さんに乗せてもらつて、帰つてきた。

師走さんは僕らを送ると『じやな、若いもんは若いもんじへ過ごすんじやでー』と豪氣なことをおつしやつてから帰つた。

「ほんとによかつたよ、君がもとに戻つて……」

「……四季君」

悲しそうに、弥生ちゃんは言つた。

「……な、何?」

僕は何かまざっこいとでも言つたのだらうか?

「『私』は私です。あの『私』も間違になく、私なんです。だから、まるで『私』のことをそのまま、害悪みたいに、言わないでください……」

「あ……『めん

素直に謝る。今のは僕が悪かった。

こぐら弥生ちゃん(裏)は無表情で無感情でも、弥生ちゃんなの

だ。あんまり否定したらいけない。

「……いいんです。それよりも……」

そう言つて、弥生ちゃんは長い前髪を振り、僕らの前に出る。隠れた瞳からな、今にも泣きそうにつるんだ瞳があつた。

「ありがとうございます……これで、私みなさん隠し事、しなくていいんだ、って思つと……」

「弥生ちゃん

僕は何かを言おうとした。

何だつたんだろう?

偽善に満ちた、意味のない言葉だったのかもしれない。
優しい嘘に満ちた、優しい慰めの言葉だったのかもしれない。

でも、それは今の彼女には、よくないんじゃないかな?
今、僕が、僕たちが言つのは。

「……どういたしまして

みんなが同時に口を開いて言つ、どういたしまして。

「や、キッチンの修理をして、明日から元気にがつり、……うへ

みんなで一緒に部屋に入る。

……穴があいて青空が見えていたはずのキッチンが、きれいに治っていた。

いや違う、直っていた。

「ああ、秀句さん？ 昨日ガス爆発あつたみたいでね。しちゃいけないミスを向こうがやらかしたらしくてね、無償で修理させていただきます！ なんて言つちやつて、しかも仕事もすつゝく早かつたのよ？ よかつたわね、怪我なくて～。じゃあね～秀句さん」

下の階の大家さんから、そんな言葉が聞けた。

僕はおそるおそる自身の妹を見る。

すると、僕の妹、神様の運を持つ少女はそっぽを向いて、そして逃げれないと悟ったのか、舌を出して、

「てへ」

「へへっ、じゃな～～～い！また力使つたのか！？それもなんて無茶苦茶な……」

まさか一田でいいがでできるとはいいへり僕でも思わなかつたよ！？

「……まさか、あの時不戦勝にならなかつたのは、このことを祈つていたからか？ならば、本物、か……？これほどまでとは、思いもしなかつたぞ」

零ちゃんがかなりびっくりしていた。

「……まあ、いいんじゃない、お兄ちゃん? どうせ修理しなきゃいけなかつたんでしょう? タダで修理なんてめつたにできないんだし、よかつたじやん!」

「……まあ、うる

……あ、うなづこちゃう僕大概だよね。

あんまり四様には世界は自分の思い通りになるって思つてほしくないんだけどなあ……。

「じゃ、明日は早いし、今日は疲れたから、早く寝よっか?」

「そ、そうそうそうそううだね! ……うん、そうだね?」

「では、今日の夜のご奉仕を……」

「では、男性の身体を研究しようか」

「お兄ちゃん、私と一緒に寝よ?」

びく!

僕は震えた。異常な殺氣が、僕の後ろで発生したから。

「……な、何かな、間宵けやん?」

僕は悪くないよ? 聞いてたよね、今の会話? ボクナーカワルイコトシマシタカ?

「てめえの存在が悪だよ! そんなに早く寝てえなら寝かしつけて

むやすみ、
みんな。

第三十八話／ライバル登場！そして帰宅！？（後書き）

第三十八話 暗闇の中での一々

そ……と微かな衣擦れのよつな音。

？？

？？草木も眠る丑三つ時。

？……と、いけないいけない。微かな音も今は立てはいけません。

？？

？？なぜなら、私、如月弥生は絶賛夜這い中なのです！

？

？？『私』にそそのかされた、と言つのもありますが、それよりも間宵さんにあんなことをされたから、というほつがわりかし多いです。私はもう、ここに誰にも隠し事をしなくていいのです！

？？それに、ライバルが四季君を狙っている以上、私は先手をうたないといけないです！

？？……あ、四季君のお布団につきました。会つて四日も経つてしないのに、この人はスヤスヤと私達を警戒することなく眠つています。

？？戦いに身を置いていた私や『私』にはこの無防備さが不思議でたまりません。

？？だつて、こひして唇同士がひつちぢりいそな程近くにいるのに、起きる気配も感じられない、なんて……殺してくれと言つているようなものです。

？？「こただきまあ～……す

?

？？小さく呟いて、私は四季君の顔を

？？ギラつ

？？「……弥生さん？」

「な、ななんなんですか？」

二つの間にか、私の首筋にはきらりと光るナイフがひとつ。それもこれ、刃をつぶしていなかから普通にこれ引かれたら私死にますよ？殺す氣ですか夜闇さん？

「何ですか？それは私の言葉です。なぜ四季様の寝所に侵入しようとあなたは画策しているのです？」

「それは、私が四季君のことが好き、だからです」

「好きならば何をしててもよいと言つことにはなりませんよ？」

むう。正論を言われて少し黙る。

「じゃあ夜闇さんはなんでここにきてるんですか？まあ、どうせ私の気配を感じたとかそんなのでしじうさだ」

「添い寝をさせていただきたくて」

「同じ穴の貉じゃないですか！」

ちなみにこの会話は四季君に聞こえたまゝこので本当に小声で

す。

「違います。私は従者、あなたは他人。その違いがあります」

「ほとんど変わらないですよ！？」

あれ、夜闇さんってこんなにお茶目な人だったかな？

「……それにしても、いきなり夜這いをするとは思いませんでし
た。私たちの中では一番常識人だと思っていたのですが」

四季君に絶対服従の夜闇さん。研究好きの零さん。それから戦闘
狂の間宵さん。

……あれ、この状況でも私が一番常識人だと胸を張つて言える気
がするのはどうしてだろ……？

「と、とにかく、今日はもう寝ましょうか、夜闇さん」

「ええそうですね」

話を切り上げるため、私はそう言いました。

警戒させないためにも自分から布団に戻ろうとして……

ヒュッ
キラリ

「……むう。二人とも、故事成語の漁夫の利と言うものを知つて
いるかい？誰かと誰かが争つていて、第三者がその利益をかすめ取
る、というものだ。元となつた話では動物相手だからうまく言った
のかもしれないが……人間同士ではうまくはいかないものだね？」

「それは自分のことを言つてゐるのですか？」

布団に入ったじゅを見計らつて、零さんが自然な動作で四季君の布団に這入る「としました。もちろん拳で威嚇して止めましたけど。

「やうや。軽い自虐のようなものだよ。……しかしだね。よくよく考えてみたまえ。ボクはこの場合また新たに争う側になるのかな？いや、違うよ」

妙に自信のある零さんの口調に、私と夜闇さんはいぶかします。

「……どうじゅ」とですか？」

「ふふふ、そう急くな。急いては事を仕損じるぞ？そうだな、あえて言わせてもらおう。ボクはいまだに利をかすめる漁夫である、と」

「何言つて……」

るんですか、と問おうとしたとき、零さんの狙いがわかりました。

「う、ううん……？」

そう言えば、私と夜闇さんは四季君を起ことないよう遠慮して声をひそめていましたが、零さんは妙に声高にしゃべっていました。

今四季君の布団の横には私のと夜闇さんの布団どが敷いてあって、私と夜闇さんはそれぞれの布団に居ます。

でも、零さんは自分の布団から抜けだして四季君の布団の上に這うのです。

起きた四季君は一番最短にいるのは、零さん。

「やあ、おはよー、だな。今は草木も眠る丑二つ時。ボクの「」とは夢か何かだと思つといい。起こした罪を償いたい」

「うひん……れい、ちやん……あれ、もうあれ……？」むぐぐー？」

うめつ。

そんな湿った音が、四季君の唇と零さんの唇の間で起きました。あまりに一瞬で零さんが動いたので、私も夜闇さんも反応できませんでした。

戦闘に特化した私たちの目をかくべぐるなんて、零さんって何者！？……って、そうじゃなくて。

……え？

「……安心しろ。ほっぺただ。勘違いしてもうちは困る」

「あ、そうですか」

訂正です。四季君のまつべたと零さんの唇とが合わせつて、つい、やうじやなくて！

「何してるんですか！？」

「キスだ。罪滅ぼしのようなものだ」

「やつてうれしい」とは罰じゃないですよー?」

「ふむ、ならば身体でも捧げようか?」

「いいですよー。」

もう、何考へてるんでしょうな、この人はー。

「……ふふふ、明日が楽しみだな、一人とも」

「ええそうですね!」

「……そうですね」

私たちがわめきあつているのにもかかわらず、四季君は一瞬まどろんだだけでまた眠りにつきました。意外と眠りが深いんですね。一つ発見です。

……はあ、明日からどうやって攻めて行こうかな……?

まず明日起きたら零さんと話をつけないといけないな……と思いつながら、私は眠りました。

第三十九話～朝の目覚めと信賞必罰！～

夜中起にされたせいか、僕はその日の目覚めが悪かった。体内時計はすでに朝を告げている。けれどいくら根気を振り絞つたところで眼氣は飛ばず、目は覚めず。

「うひそ……」

おどろみながら、起きなきや起きてもと意識を総動員して起床に全力を注ぐ。

『うん、おはよっみんな
『はい、おはようです！』
『おはよっ四季』
『おはよっ四季さま』
『おはよっお兄ちゃん！』

あはは、うひそ、うひそも今日も平穏に日々を過ぐして……

「起きてーお兄ちゃん起きてー早く起きないとー昨日のーの舞だ
よーキッチャンがーキッチャンが爆発するーお兄ちゃんー！」

「嘘でしょーー？」

ま、そんなわわやかな朝なんてのは夢のかなたに吹き飛んでいて。

「…………おはよー…………四季君…………」

「おはよー…………おはよーこます、四季様…………」

みんななぜか機嫌が悪い。ヒトツカ顔色がよくない。

「やあー今日もすがすがしく寒にすばりしご朝だー。そ、うは思わな
いか四季ー今日とこいつは今日限り、とこいつ言葉は誰が言つたもの
だつたかは忘れてしまつたがなるほど、実に的を得ているー。今日と
いつ特別な日は昨日とこいつ特別な口とは全くの別物なのだー。それには
気付かせてくれたのはそ、他でもない四季、キミとキミを存在させ
てくれていた世界なのだよ！ キミが生きていると言つことはボク
にとってとても喜ばしく、また同時にある種の幸福をもたらしてくれ
るー……まあ、つまりボクが何を言いたいか、とこいつどだ。

……おはよひ四季。今日もいい朝だね？」

「あ、うん。おはよひ、零ちゃん」

なぜかいつもの冷静沈着な零ちゃんらしくない饒舌で感情的な口
調だつたが、でも、楽しそうだつたからそれでいいか。

「……元気いいね。なんかいいことあつた？」

四様が苦笑交じりに言つた。

「あつたさーあつたともー！ ボクには何もないーなにもないがーそ
れゆえにー四季の酒を、奪えたのだつー」「

…………は？

「え？ なんですかそれえ！？ 私聞いてないですよー？ 昨日零さん
確かにほつぺたに、つて……！」

「ふははは！ そんなもの嘘に決まつてこるー！ ボクは田的のためな
ら手段を選ばない人間なのだ！」

小さい身体を大きく偉そうに反らせて勝ち誇る。

かわいらしさ。まあ、感想としてはそれぐらい。

卷之三

「あ。……いや、よ、夜闇。待つてくれ。な?少し、少し茶田つ
氣を見せただけなのだ。それぐらい聰明な貴女ならわかってくれる
だろ?……?ほんの、ほんの冗談なのだ……」

と音が聞こえてきそうなほど何かの雰囲気をまとった夜闇に、さ
っきまでの威勢はどこやら、零ちゃんはたちまち狼狽した。

卷之三

「ま、待ってくれ、お願ひだ。ぼ、ボクは一般人……いや、正直言おう、その水準をはるかに下回る身体能力、耐久力しか持っていない。この前の戦闘で順当に勝ち上がれたのは科学の力添えあつてこそものなのだ。わ、わかってくれる……だろう? ぼ、ボクは障子紙よりも簡単に破けてしまう自信がある。……だから、な?」

なんの怠慢だらう。そう思いながら、事の成り行きを見る。……
決して、怒つてなんかないよ?つん、勝手に脣奪われたぐらいで、
怒つたりするもんか。

……そう言えば、今何時だ？

「…………それはそれは」

「な？ボクは貴女のよつに強くはないのだ、だから

「破つた後の処理が、楽そつて何より……」

「…………」

ああ、もつそろそろ準備しないと遅刻してしまつ。

「し、しも……一た、助けて……」

「…………ごめん、それ無理」

「そんなつーっ」、後生だ、頼む……」

「…………それなりに、理想はあつたのに」

「…………」

すぐに、キスのことだと悟つただろう。

うん、理想はあつたのだ。告白して、いい返事をもらひて、その時気持ちを確かめあう時にそつと、とか。

「それは、その、悪かつた……と、思つてゐる」

「うん、じゃあ。僕は準備してゐるから

「…………」

僕は黒い影をまとつて悪鬼になつつある夜闇になつても叫ばず
学校に行く準備を始める。

「…………御覚悟」

「ま、待つてくれ夜闇たのむ頼む後生だお許しあじつか」慈悲をお願いします何でもしますからっ！」

「…………御覚悟」

「ま、待つて待つてすまなかつた四季！勝手に頭を奪つたのは謝

るから、謝るから頼むからその機会を設けてくれ、いやくださいお願
いしね……。やあああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああ

零ひやんの悲鳴が朝のアパートに響き渡つました。

……………くすん。ファーストキス、だつたのに……

第四十話～こまちら氣付く事実！～

？？「……ああ、珍しくてめえじやなく零のやつが倒れてたのは、そういうわけかよ」

？？いつものようなさわやかな朝の登校風景。

？？右側に真面ちゃん、左側に弥生ちゃん、後ろ側には氣絶した零を運ぶ夜闇。

？？……僕、ほんの数日ですごいぐらこ変わった氣がする。

？？それもこれも、全部……

？？「な、ななんなんですか？な、なんでも言ひてください！」

？？「んだよ。こっちみんな」

？？「なにか御用ですか、四季様」

？？「この子たちのおかげだ。」

？？「いや、なんでもないよ。ただ、賑やかでいいな、って思っただけ」

？？「へ？い、いや、あの、その、わ、私も、し、四季君といられてい不知不つて思つてます！」

？？「私も、弥生さんと同意見ど！」ぞこます

？？「つたく！相変わらずてめえは氣障つたらしいなー！」

？？真面ちゃんはそつ言つて僕を小突く。本気の拳じやなくて、軽

くはたく感じ。

？？「てかさ」

？？校門前まで着いた。莊厳、といつほどではないけど、ある程度は威厳のある校門。まだ早い時間だから、生徒のかずもまばらだ。

？？「てめえは賑やかでいいのかもしけねえけどよ、四様はどうするんだよ？」

？？「う……」

？？真面立ちやんの言葉がぐさりと僕を貫いた。

？？四様。彼女は僕の妹で、三人が来た次の日団つたように現れた超絶ラツキーガールであり、今は僕達と一緒にボロアパートに住んでいる。

？？……重要なのは、ボロアパートに住んでる、という所。

？？僕の妹は十三才ぐらいだから、本来なら中学生であるはずなんだ。

？？けれど、今のところ僕は四様が中学に行っているところを見たことがない。

？？……とか、僕はあの子がどこで通つてるかさえ知らない。

？？「あんな、あいつ今どこに行つてねえんじゃねえの？」

？？「え、そうなの？」

？？「私は訊くんだじゃねえよ。てめえの妹だろつが」
？？「…………ううん、確かに」

？？でも、それがわかつたといひで、僕にまざつこいつもないんだよなあ。

？？お金があるわけでもないし。はあ、ほんと僕って甲斐性なしだなあ。

？？「あいつが学校に行きたくなけりや、そりゃあそれでいいんだけどな」

？？「え？」

？？

？？随分珍しいセリフが眞理ちゃんの口から出ってきた気がする。

？？「優しいんですね、眞理さん……。私はてつきり『ああ？ひきこもりなんて人間味のすることじやねんだよとと学校にいかせやがれ！』ぐらー言つうんだと思つてました。……女の口、だからですか？」

？？弥生ちゃんが不思議な微笑みと一緒に声を出した。

？？「あのな。私は別にひきこもりが悪いことだとは思つてねえし、学校だつて行かなきやいけないここでもないと思つてんだよ」

？？「…………優しいんですね」

？？「違えよ。私はなんか別の事情があるような感じがしただけだよ」

？？そりがうつあひひまつて眞理ちゃんは言つたけど……

？？優しいところもあるんだな、といつ僕の感想は変わらない。

？？「まったく、暴力女らしからぬ発言ですね。……何か悪いものでも食べましたか？」

「うつせえよクソメイドーほつとけー」

夜闇が余計なこと言わなきゃこい話で終わってたのに……。

第四十一話「悩み事!」

「……で、……」それが、じつなつていいわけだ。……これを現代語訳してみようか」

妙に尊大な国語教師の授業を聞き流しつつ、僕は四様のことを考えてみる。

あの子は本来中学生。ならば中学校に行つていなければいけないわけだ。けれど、あの子が朝中学校に通つていい姿を僕は未だに見ていない。

「いいか、わざわざ『春は朝が一番風流だ』などと訳す必要はない。単語単語の意味としては抑えておく必要はある。が、いちいち面白みのない文章にしようとするから古文がつまらなくなる。だからあえて単語の意味を無視し、文脈で訳す。……『春は朝がせいこ——』……これでいいのだ。

あえて言つまでもないと思つが、これをテストでやつたらバツだからな

意味ないじゃん、とか思いつつ、思考を戻す。

……………どうするべきだらうか。

「…………さて、そこで真剣に何事やらを悩んでこる秀句四季君

「…………」

そもそもあの子は学校に行きたいのか?……いや、行きたくなくとも、兄としては行つてほしいけど……。

「四季君。弥生君たちの」とド恼むのは勝手だが……」

「……」

そもそも、あの子まだ向いつの学校に籍を置いたままなんじゃないか?と云つことは、向いつの学校からしたら、無断欠席が続いている状態……と言つことになる。

「…………ふふふ、いい度胸だ」

「…………え」

そこまで考へて、僕は教室中が静まりかえっていることに気がついた。

「わて、ようやく思考の海から帰還したようだが……。いやほやあと数秒遅かつたな」

「え、いや、すみません!」

僕は信じられないほどの怒氣を放つてゐる国語の先生に謝った。

「いや、謝つてもらつ必要など……ないよ。代わりに……」

「か、代わりに……?」

「漢字書き取りと、特別問題集をプレゼントだ」

「はい……」

彼が下す罰はいつも決まって、書き取りと問題集。別に鬼のよつに難しい、と言つわけではない。ないのだが。

狂うよつの量がある」とで有名だ。

「漢字などは基本、応用関係なく『覚える』」とでしか学習できないからな。小学一年生でも『書』を書いひと思えば書けるし、覚えようと思えば覚えるだらう。英語でもやつだ。」
「いつ『言語』は基本的に単語の量で決まるのだよ。……と、このわけだ。

四季君。来週までに漢字一千文字、テキストの中から選んで書いてきなさい」

「……はい」

もちろん、これのほかにも問題集が渡されたのはいつまでもない。

「……し、四季君が授業中呆けてるのって、その……め、珍しいですね……」

「ん? ああ、そうかな?」

「は、はい……、いつもなら、ちゃんと先生の話を聞いてるのに何があつたんですか?」

その授業の休み時間。当たり前のようすに弥生ちゃんと夜闇、それから零と間宮ちゃんが僕の机の周りにやってきた。囮むような形なので、僕は椅子を引けもしない。……これって、見方が違えばいじめにも……見えませんね。クラスの半分からの嫉妬の視線が痛いです。突き刺さるようす。

それよりも弥生ちゃん、授業中僕見る暇あつたら授業聞こいつよ。

「……何か悩んでいるようすですね、四季様」

「うん、まあ、四様の」とでね

夜闇は制服を着てこるのだけれど、妙に似合つてない。うん、男の僕が言つたら変だろ? うけだし、夜闇にはメイド服が似合つてるね。
……言つた瞬間修羅場になる気がするのね、気のせいじゃないはず。

「やつぱ氣になんのか、四様のことへ。

「まあ、僕はお兄ちゃんだから」

「ずいぶんと長い間、会えなかつたけど。

それでも僕は、あの子がお兄ちゃんと呼んでくれる限り、お兄ちゃんでこよつと囁く。

「そうか。…………てかよ、あいつまともに学校行けんのか?」

「え?」

「あいつ、異常に運いいじゃねえか」

「そうだね」

「可愛い物好きだろ?」

「…………病的なぐらいにね」

ほんと、まさかまだあの頃すりぐせが治つていないとは思わなかつた。

「やつぱむ、運がよすぎると、氣味悪がられんじゃね?」

「…………そんなこと」

ないつて、言い切れる? まさか。

「ボクが思う」。問題は能力以上に彼女の性格だと思つたけれどね

「……どうしてそう思つの、零っ？」

「彼女、怒ると手をつけられなくなるだろ？？」

「まあ、ね」

「そんな人間と、友達になりたいと思つ人間はいないと思つ」

「……言ひすぎだよ」

そんなことない。きつと、きつと。

「じゃあ、君は不良と仲良くなれるとしても？」

「……四様は不良なんかじゃなこよ」

「そりだ、彼らの方がよっぽどましだ」

「零、怒るよ？」

わざわざからなにを言つているんだら？？なんで零はこんなひどい
！」と……。

「不良を怒らせたら、拳がとんでもくる。しかし彼女を怒らせたら、
何がとんでもくるかわからぬ。石ころかもしれないし、車かもしれない。
はたまた、隕石なんかかもしれない」

「いくらなんでも……」

言ひすぎか？

少しだけ、不安になつた。

「……まあ、単なる予想だよ。彼女が積極的に学校に行こうとし
ないのは、それが原因じゃないかと、思つてね」

「……」

ああもう。なんでこんなにも悩み事が多いんだ。

「……ふむ、少し、霧雨氣にそぐわなかつたかな」

「何の？」

「ククク、この教室の、だよ。おやらいヘキリを殺さんばかりの勢いでにらんでいる男子諸君は……きっと、ボクと四季との昨夜の甘い出来事のことでも話してると思つてこられるのだろうね？」

なんで今蒸し返して……と、詫ぐ前に。

「何今ここのでその話を蒸し返してんだよー！ てめえまた吹き飛ばされてえか！？」

「遠慮しておくれよー今日の行為に差し支えるからなー。」

どかん！

今日は間宮ちゃんと零が戦ってる。

はあ。

この光景を見て安心する僕つて……何？

第四十一話／喧嘩……だよねー！～

間宵ちやんと零が戦つてゐる。と言つても零ちゃんは防戦一方だけ
ど。

「……四季様」

「夜闇」

ふうっと、周りの時間がゆっくりになつた気がした。事実、零に飛びかかつてゐる間宵ちやんの動きがスローモーションになつてゐる。

「あまり、お氣になさりずとも」

「四季のこと？」

それ以外に何があるのだね？

「ええ。私とは『違ひ』のが彼女です。幸運……それは本当に神様からの贈り物なのですから、大丈夫です。彼女はおそらく、誰よりも神様に愛されてゐるのですから、四季様が心配なさりずともよいのです」

ふうっと、今度は時間が元通りになつた。
教室のやかましい音が僕の耳もう一度入つてくるようになる。

「……夜闇」

「何でしょ？ 四季様？」

「……さつきの、何？」

弥生ちゃんの時もそうだった。なんか時間がすりと遅くなつた
よつな気がして……。

「……スーパー・メイドパワーと云つものがありまして、それを四季様にかけると、『はいぱーめいどたいむ』になつて……」

「……説明する気がないのはよくわかつた」

不思議だけど、いくら不思議だからつてまるでこの場で作ったような嘘にはだまされない。

「……わうですか。……あ、そろそろ暴力女が零にとどめを刺しそうな勢いですが、びくしまじょいっ。」

「……止めてきて」

「御意」

うん、幼馴染に入殺しになつてほしくないからね。止めなきや。すつと夜闇は間宮ちゃんの前に立つた。

「……んだよー今私はこいつを」

「……」

「みがわやつー?」

クルリ、ダン!

夜闇が少し手を動かすと、間宮ちゃんはひっくり返つて床にたたきつけられた。

「な、て、てめえ……こつ之間に、こんな力を……」

天井から夜闇を見上げながら、間宮ちゃんが言った。

「……メイドと並ぶのは、『主人様の命令があれば二倍強くなるのです。心得ておきなさい』」

夜闇は間宮ちゃんに最大限の冷笑を浴びせ、あざける。対して間宮ちゃんは茫然とした表情で立ちあがり、次の瞬間には怒りの表情と感情をめいぱににたぎらせ、夜闇に「いや、いつちに……いや、…………もしかして……僕に向かってる?」など

「おい、『リ』
「な、ななななにかな……?」

ずんずんとまるで不良のよつな足取りで間宮ちゃんは僕のところに来た。

「だ、ダメです!四季類はやひせませ……ふわわわー。」

間宮ちゃんの進路を阻もうとした弥生ちゃんが、一撃で視界から消えた。次の瞬間どつからがつしゃーんとす「」に音が聞こえた。
「だ、だいじょうぶ……かな……?」

「……メイドはてめえの命令があれば三倍強くなるんだ」「そ、そうみたいだね……?」「つてことは、だ。てめえが命令しなきや強くなれねえって」とだよな……?」

あ、今心配すべきは弥生ちゃんの体じゃなくて、自分の体だったんだ。なんて、後悔してももう遅い。

「……ええ、つと……その、零がね、その、危なかつたから……」

「ちなみに、教えといつてやる」

「な、なにを？」

冷や汗だらだら。体温急上昇。危険な状態に陥った男女は恋をするなんて話がどこかにはあるみたいだけど、僕に限ってはなにようだ。……危険な状態に陥ってるの僕だけだし、原因は目の前に居るし。

「私はな、お前への怒りなら……」

あ、そう言えば次の時間なんだつけ。……数学、その次が英語、か。まあ、休んでも特に問題ない教科かな。じゃあ、何も問題はないわけだ。……涙が出そつ。

「三百倍は強くなれんだよおおおおおおおおおおおおお……」

ブツン。

意識が途切れる音なんて、初めて聞いたよ。……いつ起きれるかな……？

「どうしてそんなにないてるの？」

卷之三

「うん、しませうがひいんだ」

「アーティストの心」

「？」

なにほり、……ばかじやなにがすだもん」

۱۵۰

……はい、さくや、一き』からきたんだ！へえ、お、一きさまには、人がいるんだ～！」

「え? まへのが無い?」

11

「ほくのまえはね、しゅうりく、しゅうじくしゃつと書いたんだよ。」

二〇一

卷之三

「もう一、どうして『わが』なんてつけるのさ……ねえ、もうだ

卷之三

「そう！ よかつたよかつた！ 元氣でかんばつてね！」

1

少女は去り際、一言少年に言った。

「しき様。わたし、新月 朔夜の心は永久にあなたさまのもとであります。どうか、おわすれなきよ。……」

「そ、そつなんだ……」

ふと、僕は思い出した。

「え？ 夕食の、ざ、材料！？」

「そうでござります」

え、え、あの、あの三人に材料を選ばせるのか！？そ、それは！

「大丈夫です。皆には鍋だと伝えてあります

「余計不安だ！」

鍋つて、よりもよって鍋つて！ 閻鍋になる可能性大じやないか！

「は、はやく止めてこなきや…… つて、あれ？」

いぐら立ち上がつて走ろうとしてもへたり、と腰が抜けてしまつ。
……ど、どうして？

「……四季様、あまち無理をなさらぬよう

夜闇がやさしく僕を布団に横にさせん。普段なら抵抗するだろうけど、今はどうしても力が入らない。……なぜ？

「……四季様は、気絶なされていましたのです
「びのぐりい？」

ちなみに今は外が夕焼けに染まつていゝ具合の赤色になつてゐる。たしか氣絶した音が聞こえたのが毎過ぎちよつとだから、だいたい

4 時間くらい?

「三田ほび」

「……は？」

み、みみみ、三田？

「……お気を確かに。氣持はわかります。けれど、その。零さんや私、果ては四様さんの力まで借りて、三田です。よほびのショックだったのでしょ？……」

「……ええっと、意外と僕、ピンチだった？」

「かなり」

「ええっと。いつもと変わってやつぱり叫んだりしたほうがいいのかな？」

まあ、三田くらい氣絶するのは慣れてるけど、高校生になつてからほとんどなかつたからなあ……。

「驚かれないのですね？」

「慣れてるから」

そう返すと、夜闇はしばらく何かを思案し始めた。

「……あの暴力女、真剣になんとかしなければなりませんね……」

「あ、あの、夜闇？」

「なんでしょう？」

「暴力は、駄目だからね？」

「それは彼女にこそ言つべき言葉では」

「うう……それはそつだけど……」

でもねえ……。僕にとって間宮ちゅんのは暴力といつよつ『ハリコ
ニケーションだし……。

「…………す、ぐく、 哀れです」

「ほつといてよ、 もう」

それからしばらく、 僕と夜闇は一人きりの空間を楽しんだ。

……え、 そりいえば二人きりだつた！？

第四十四話／みんなの帰宅…～

「人きりになつてゐることを自覚すると、急になんだか、その、一人きり、という状況が強調されていく気がする。

？？「どうかされました？」

？？「え、いや、あの、どうして夜闇はつこいついかなかつたのかな、つて」

？？

？？苦し紛れ、といつか照れ隠しにそんな質問をしてみる。

？？「私が四季様の従者だからです」

？？「……え」

？？返つてきたのは、そんなそつけない言葉。

？？「……と、言つのが建前で、本当は不安だつたのです」

？？「不安？」

？？も、もしかして、心配してくれてたのかな？

？？「最初はみな、四季様を看病すると言つて聞きませんでした。普段なら跳ね除けるのですが、状況が状況でしたので、がまんして四季様の隣を譲りました」

？？え、えつと。なんか僕が普段と違う気絶をしたと言われた気がする。なんか、深刻な病気にかかっちゃった、みたいな。

？？「しかし……その」

？？ふい、と夜闇は田を背けた。

？？「どうしたのだろうと思いつてよ」

？？

？？どうしたのだろうと思いつながらも、先を促した。

？？「う、『命令』あらば」

？？いや、命令なんて強い口調じゃなかつたよね？

？？でも、夜闇が『命令』にしたがつていた理由は、すぐにわかつた。

？？「まず、暴力女ですが、四季様を起しそうと躍起になつて、その、ほつぺたを叩き続けました。……あ、もちろん軽くですよ？だから、大丈夫です。そう、大丈夫なんですよ？、だから、何も心配はいりませんよ？」

？？「余計不安になるよー！」

？？何があつたんだ一体！？

？？「こほん。次に、零です。彼女は四季様を治そつと躍起になつて、その、あの……い、いえ、命令なのです、包み隠さず全てを言います。あなたを改造しようとして、裸を」

？？「も、もういいよー！」

？？その先は言わないで！きっと夜闇が止めてくれたんだろうけど、もし僕が知らぬうちに改造人間なつっていたとしても、僕はいい。知りたくないよそんな事！

？？「そうですか。では、最後に四様さんですが

？？「ですが？」

？？きっと、あの子だけだよ。四様だけが、ちゃんと看病を……

？？「怪しげな祈祷を始めまして、危うくこの部屋が燃えかけました」

？？「まさかの失敗だよ！？」

？？というか僕、気絶しても全く平穀が戻っていない！なんて不運だよ……。

？？「けれど、四季様の意識回復を一番助けたのはおそらく、四様さんの祈祷かと思われます」

？？「四様が一番僕の回復につとめてくれた、ってことはよくわかった。けど、けどそれでも……」

？？「そろそろみなさんが帰つてきます。騒がしくなると思うので、今はお休みください」

？？「う、うん、わかつたよ……」

？？なんか、あの子達が帰つてきたら平穀なんてない、みたいな言い方だね……？でも、たしかに今僕すっごく疲れてる。お言葉に甘えて、休ませてもらおうかな……。

？？ガチャ。

？？「ただいまです。……っ、し、しし四季君！起きたんですか！？よ、よかつたです！わ、わ、私四季君の晩御飯買ってきました！」

？？弥生ちゃんが、たくさんのスーパーの袋を抱えて帰ってきた。

？？「あ、ありが

？？「四季、食材を購入してきたわ。」それで君も……つと、起きていたのか

？？次に零が、弥生ちゃんと同じくらいこの量の荷物を手に、帰ってきた。

？？「あ、零もなんだ、ありが

？？「おこいいら四季！とつと起きやが、つて、起きてんのか。おら、Hサだ。喜んで食いやがれ！」

？？やつぱり真宵ちゃんが前の二人とおんなじぐらいこの手荷物片手に帰ってきた。

？？「あ、真宵ちゃん、ありが

？？「お兄ちゃん、おはよう！私、頑張ってお兄ちゃんを守ったよ！」

？？四様が満面の笑顔で帰ってきた。手に荷物はない。

？？「あれ、四様は何も買わなかつたの？」

？？「私も買っちゃつたらお兄ちゃんのお腹が破裂しちゃつよ

？？「じゃあ、なんでついていったの？」

？？「そう、それですよ！」

？？弥生ちゃんが、不機嫌をあらわに言つた。

？？「四様ちゃんが、あれは買っちゃダメ、あれもダメ、これもダメ、ダメダメダメって言つて全然お買い物させてくれなかつたんです！だから、その、あんまりおいしいお鍋にならないかも、しれません……」

？？申し訳なやうに、弥生ちゃんは言つた。

？？「あのね、弥生ちゃん、鍋にする、って言つてるのになんであなたは辛いものばっか買おうとしたのー？お兄ちゃん辛いもの苦手なんだよー！」

？？あれ、四様は僕の好みを覚えてくれていたのか。……妙にうれしいな。

？？「大丈夫だよ、お兄ちゃん、みんな好き勝手に買おうとしたけど、私が全部阻止したからー安心してー！」

？？「う、うん、ありがと」

？？本気で四様の親切がありがたかつた。

？？？

第四十四話　みんなでお鍋！～

くつくつ、くつくつ。

おこしそうな匂いが部屋を包む。

？？小さなちやぶ台に、お鍋が一つ。それをみんなで囲つてこる。

？？鍋の中身は普通のもの。変に赤かつたり錠剤が入つていたり炭が入つっていたりはしない。いや、これは鍋なのだから、それらがないのは当たり前だ。でも、なぜがその当たり前が、とてもとても、身にしみてうれしかった。感動したとも言える。いや、感動、なんて稚拙な言葉でこの気持ちが表現しきれるだろつか、いや、ない！

？？「なんだよ。幸せそつな顔しやがつて」

？？真面ちやんが気味悪そつて僕に言つ。でも、全く氣にならない。

？？「あ、あいつと、お鍋がおいしそうなんですよ。四季郎、一緒に食べましょ？」

？？「うん！」

？？昨日とかだったらたじろいだかもしれないけど、今は本心から、そう頷けた。

？？「……そつか。そだつたのか。これが、キリヒトののおいしい料理、か。なるほど……」

？？煮立つ鍋を興味深そつに睨みながら、零が呟いた。

？？「……それでは四季様、いただきましょつか

？？「そつだね！」

？？みんなが各自の小鉢へよそつていいく。

？？「あ、お兄ちゃん！お肉ばっかり食べちゃダメー野菜も食べな
きやー！」

？？「えー。僕野菜よりもお肉の方が好きだもん」

？？「今後一週間野菜しか食べられないような状況になりたい？」

？？「なにするつもり！？」

？？四様の怖るべき脅しについ叫んでしまつ。ま、まさかこの世から牛とか豚とか消しちゃうつもりじゃ……。

？？「私は、何もしないよ。私の予想だと、お兄ちゃんがお肉を買おうとしたら売り切れる、とか、そんな地味だけど確実なやつをオネガイするつもりだよ？」

？？「ひひ、野菜も食べます……」

？？僕はしづしづ、野菜をよそつ。

？？「つたぐ！四様もなんでそんなに野菜を食わせようとするんだよ
？別に肉だけでも死なねえぞ？」

？？「そんなことしてたら健康によくなじよー偏食は健康の敵なん
だから！」

？？「でも、私毎日肉しか食つてねえけど元気だぜ？」

？？「それは、真宵さんが大人になるまでの話ですー大人になつて、
運動しなくなつたらだんだん酷いことになつてきますよー！」

？？「な、なんだつて……？」

？？驚愕の表情で、野菜を見つめ始める真宵ちゃん。その表情には不確かな未来に感じた不安と絶望がいい感じに混ぜられて、普段とはまた一味違つてしましが……。

？？「…………かわいい

？？あ。

？？「え？」

？？「…………可愛いな。可愛いな。眞宵さん、可愛いです」

？？「え、あ？」

？？普段言われなれない言葉と、雰囲気の切り替わった四様に混乱しているのか、近づいてくる彼女を跳ね除けよつともしない。

？？「…………あ、しまつ…………！」

？？「もふもふさせてくだせーーー！」

？？「ちょ、あ、そういうとまは許可もひつたり、みやあああああああああああああーーー！」

？？意外にも、四様は十分ぐらごど正氣に戻った。あれ、昔はまつとしたのに。

？？「とこつか。まだ治つてなかつたんだね…………」

？？「病氣じやないつてばーーー！」

？？だから、そのレベルまでいけば十分病氣だよ…………。

？？「むひーーー！」

？？四様は頬を可愛くふくらませ、ポカポカと猫がじゅれつくよう
に僕をたたくのだった。

？？……ああ、なんだか平和だなあー。 ?

第四十五話～四様、聞に詰めりやるー～

？？「うひへ、おこしー……」

？？僕は鍋を口に入れで、そのあまりのおいしさに打ち震えた。

？？「お兄ちゃん、三田ぶりのうー飯だもんね。なんでもおいしくて感じると思つよ？それじゃ、この人たちのゲテモノ料理でも」

？？

？？そんな恐ろしこことを四様は言つてくるけど、全然気にならない。もし田の前にあるのが弥生ちゃんや夜闇が作った料理でも、僕は喜んで食べただろう。それほどまでに僕はお腹が空いていた。餓えは最大のスペース、つてこりのは誰の言葉だつたつけ？

？？「四様さん、ゲテモノ料理は少し心外です。私だつて本氣でおいしい料理を四季君に食べて欲しくて……」

？？「あなたのは香辛料を使いすぎです。辛みに含まれるカプサイシンはとりすぎると人体に影響を及ぼすのですよ？」

？？「…………むひ。じ、どうしてあなたはメイドさんなのにお料理できないんですか？掃除洗濯だけでなく、お料理も重要な家事ですか？」

？？ハウスメイドさんの名折れじゃないんですか？」

？？「…………あなたはどうなんですか？」

？？「わ、私は、四季君のお嫁さんですから？」

？？ならなおさらお料理の勉強しなきやいけないんじゃないかな……

……つて思つけど、僕は告白された側だしつていうか今僕告白されたつー？

？？「え、あ、あの、や、弥生ちゃん、い、今何を

？？「あれ、言ひてませんでした？私は四季君のお嫁さんになりますよ。」

？？「そんなこときこてなによつて、よく考へたら僕まだ十七歳だから結婚できなこよ」

？？よかつたよかつた。

？？「待つてますから、大丈夫ですよ」

？？「……」

？？？「じつじつね。」

？？？「おこいの因縁」

？？ゾクッ！

？？底冷えするやうな真宵ひやんの声。

？？「……あた、三日へりに氣絶するか？」

？？

？？ふるふるふるふると、僕は必死で首を振る。いや、嫌だ。まだ、まだ僕は死にたくない！

？？「ふん、わかりやいいんだよ、わかりやな

？？「う、うん」

？？わからなかつたがりつなるのだろう。……いや、今度いや、いや、殺されちゃつたり……しなくな。うん

？？「……もくもく、うそ、おこしにね、お兄ちゃん……」

？？お肉を頬張りながら、四様が朗らかに微笑む。

？？「…… そうだね」

？？「うん、やつぱり平和だ。」

？？「…… 四様、少し真剣な話になるが、かまわないか？」

？？と、思っていた矢先、零がそんなことを訊いた。

？？「…… なに、零さん」

？？「君の、学校のことだが」

？？「……」

？？パタリと動きを止めて、四様は零の言葉を聞いている。

？？「君は、一体今どこの学校に通ってるんだ？」

？？「…… 通つてない」

？？四様は、半ば諦めたような感じで、そう、答えた。

？？「…… そうか」

？？零も、ある程度は予想できていたみたい。

？？四様はただ、僕を見つめている。

？？その姿はあるで、イタズラがバレた子供のようだった。

？

第四十六話 四様の決断！？

？？「……通つてないって？」

？？

？？僕は四様に訊く。

？？「……だ、だつてあいつら、……私のこと、怖がるんだもん」

？？「……」

？？僕は悲痛な顔をして黙り込んだ四様に、何も言ひことができない。

？？「なぜ、そのようなことに？」

？？「……私、あそこじやかなり、名前知れちゃつたから」

？？「は？お前、別に幸運のこと触れて回つたわけじやねえんだろ？」

？？「…………そじじや、ないけど」

？？四様は所在なさげに黙る。

？？「四様さん、黙つていては、誰も何もわかつてくれませんよ？」

？？「……私、向いづでは、願い屋さん、つてこのをやらせていたの」

？？「ね、願い屋さん、ですか？」

？？四様はこゝと頷いた。

？？「誰かのお願いを聞いて、私が願うの。それで、お金をとる。かなり、有名だったみたい」

？？そのお金は、今は櫻の中にいる祖父母の元に転がり込んでいるんだろう。

？？「そのせいで、キリは向うでバケモノ扱い、か。さすがに気の毒だな」

？？「……いの」

？？「よくなじよ

「み

？？でも、どうしようもないのもまた事実だと思つ。だって、僕に四様の学校を変える権利なんて、ない。

？？「……でもよ。お前に今学校がない、ってことは、てめえ、行きたくねえだろ？」

？？「……」

？？恐る恐る、四様は頷いた。

？？「が、学校には、いかないとダメだと、思います」

？？「いや、それは一般論だろ。四様は一般人ではないのだ、それが適用されるとは思えん」

？？「だからといって行かなくてよいところはなならないでしょ」

？？「でもよ、やっぱり辛いと思つぜ、バケモノ扱いなんてよ。私だったら耐えられねえ」

？？へえ。

？

？？「真宵ちゃんも女の子らしいことあるんだぶえ」

？？「黙れ四季」

？？思いつきりではないけど、僕は殴られて畳をなめた。

？？「だから、殴ってはいけません、暴力女」

？？「はいはい、気をつけますよ。……で、どうなんだよ？」

？？「い、行くべきです！」

？？「たかが学校、行かなくとも事足りる」

？？「私は、むじうかこちらかはともかく、通つべかど」

？？「通つ必要なんてねえ。行きたいやつだけ行きやーい」

？？みんな、みーとに意見が別れてるね。

？？「……お兄ちゃんは、びつぱつ？」

？？「……僕？」

？？四様はすぐるように僕を見つめてくる。「ひさ、びつしたもののか。

？？「……そうだね。僕は君の好きにすればいいと思つよ」

？？「……して、いいの？」

？？「いいんじゃない?よく考えたら、君は運がいいんだから。君の好きに、世界は回ると思つよ」

？？だから、結果的に四様の好きになる、つたりと。

？？「……私、いちで通つ」

？？「それはよかったです」

？？「だから

？？四様は僕を見つめぐる。じつと、射抜くよつて。

？？「だから、褒めてくれる？」

？？「…………もひむせ」

？？なぜ、そんなことまで言つのだひつ。僕はそれを聞いたナビ、四様は頑張つてゐんだ、褒めてあげなきや。さきで

？？僕は四様の頭の上にポンと手を乗せて、くじゅくじゅと撫でる。

？？「よく決断したね。普通にできる」とじやない。…………めく、頑張つたね

？？「…………さつ」

？？つづくと四様の皿に涙が浮かぶ。よほど、辛かつたんだひつ。

？？「…………や、お鍋が冷めりやつよ。食べよつか

？？実際は未だごくべつと煮立つてこるので、そこは雰囲気とか情緒とか、ね。

？？「は、はいです。お、おこしかづります……」

？？「まったく。なぜわざわざ辛い想いをしてみつとするのか理解できません。が、まあ、よしとするか。…………つまそつだな

？？「そうですね零さん。では、いただきます」

？？「…………つたぐ。無理すんなよ、四様。ござとなつたら私たちを頼れ。わかつたか？」

？？「…………はい」

？？また再び、平和な時間が戻ってきた。

第四十七話／試験前！？

？？四様の中学校が決まったので、僕たちはその後楽しく過ごした。

？？鍋を囲んで、楽しくはしゃいで。夜闇が真宵ちゃんを皮肉つて、
真宵ちゃんがキレたり。

？？零や弥生ちゃんはそれを楽しそうな顔で眺めたり。四様と僕は
いつものように、とばっちりくらつたり、笑つたり。

？？そんなことをしてくるひさしへ夜が来て、僕らは眠つた。

？？

？？次の日。

？？「そついや、そろそろ中間テストだよな」

？？いつもの登校風景。僕が真ん中で、右に弥生ちゃん、左に真宵
ちゃん、前を零、後ろに夜闇の完全包囲網。

？？「あ、そ、そうですね！」

？？「テスト、か。ケアレスミスに注意しないとな」

？？「テストですか。本来なら四季様以外の人間に試されたくはないのですが……」

？？みんなはたのしそうに話しているが、僕は気が気がない。

？？「……そういえばよ、四季。お前、テスト勉強やつてんのか？」

？？「できるわけないでしょ！？」

？？最近僕は旅行行つたり氣絶したり氣絶したり氣絶したりで忙しかつたんだ！しかもほとんど、眞實ちゃんのせいじゃないか！

？？「お、おう。そうだったな。お前最近氣絶しつぱなしだったから」

？？「何を他人事のよつて。それら全ては暴力女、あなたがしたのですよ？」

？？「だから、悪かつたつて言つてるだろ」

？？「なら、いいんだけど」

？？「それで済ますのか？」

？？零ほか一人が目をまんまるにしていた。

？？「え、何か変なことでも？」

？？「あるにきまつてるー。君はいったい……ああ、もつ」

？？何かを言おうとして、とうとうやめた。

？？……何を言おうとしたんだろう？

？？そんな感じで、僕らは学校について、教室に入った。

？？「よう、四季！ また美人四人もはべらせて、うらやましいねえ！ ちよつとは自重しろよこの野郎！」

？？

？？と、同時に男友達の喜田 政臣君がいきなり僕にヘッドロックをかけてきた。

？？「い、痛い、痛いよ！」

？？「うるせえ！ なんでお前だけ！」、「うー」

？？「さあーさあー締め付けてくるけど、正直言って眞理ちゃんに比べたら全然痛くない。」

？？「……つたぐ。お前はほんと幸せそうだな。テストも余裕だから？」

？？効いてないことがわかったのか、政臣君はあっさりと離しててくれた。

？？「え、ええっと……」

？？「当たり前です」

？？「うつと夜闇！？」何勝手に言つてゐるのー？

？？「へえ。じゃあ勝負しようぜ、四季ー。」

？？「は、なに言って」

？？「構いませんとも」

？？おーい！ いつもの忠誠心はいつたにじこじー！？

？？「オッケー！ よし、じゃあテストの合計点数で勝負だ！ 負けた方は、昼飯一週間奢りな！」

？？「え、ちょ、政臣君」

？？「のぞむとこりです」

？？ええ……。

？？「……もう好きにして」

？？僕は呆れながらもそつづぶやくしかなかつた。だつて聞いてくれそうにないんだもん。

第四十八話「テストに向けて！？」

？？それからしばらく、僕は平和な授業を受けた。なんだか久しぶりに何もされずに普通に授業を受けた気がする。相変わらず内容は全然頭の中に入つてこなかつたけど。そんな風に過ごしていると、あつという間に昼休みになつた。

？？「夜闇、どうして朝あんなこと言つたの？」

？？

？？いつものようにみんなで僕の机を囲み、お弁当を食べる。

？？「すみません。しかし、ああでもしなければ四季様が勉強をすることはない、と思いましたので」

？？「まあ、確かに。四季は致命的なまでに勉強嫌いだからよ」

？？「…………あ、あなたがそうさせたんじゃないんですか…………？」

？？「いや、弥生。別に、四季が勉強を好きになる必要はない。勉強など所詮作業だ。未来の自分に投資していると思つて耐えるしかないぞ」

？？零の言葉が妙に心にしみる。

？？「つたぐ、これだからカガクシャは嫌いなんだよ。なんでもかんでも理屈っぽく言いやがる。ちょっとは普通に頑張れって言えねえのかよ」

？？「頑張れ？」そんな言葉は四季には意味がないだろう。頑張れる環境ではないのだからな、キミのせいだ

？？「ああん？」やんのかこら

？？「まるで不良だな。キミを慕う人間が一人でもいるというのが不思議でたまらないよ」

？？一気に険悪な雰囲気になつた。ちなみに、僕も信じられないんだけど、間宮ちゃんつて結構女子に人気あるみたい。横柄な態度だけど、根は優しいし、リーダーシップがあるし。

？？「ま、まあまあ、二人とも落ち着いて」

？？「四季、元はキミが勉強をしないのが悪いのだ。少しだけ勉強を見てやるから、あの男の倍の点数ぐらいとつてみせろ」

？？「む、むちゅくちゅ言わないでよー」

？？そんなのできるわけないじゃないか！　？政臣君は赤点ギリギリだけど、僕はもつと低いんだよ？

？？「そ、それは、いい考えです、ね。わ、私も、その、勉強あまりできませんけど、その、教えて、あげます」

？？「よし言づきよ弥生ちゃん」

？？国語に関しては学校一番なのに。

？？「もちろん私も見て差し上げます。私は歴史が得意なので」

？？それは意外だ。

？？「ちなみに私は英語が得意だぜ。英検一級、TOEICで九百点とつた」

？？「……それは得意と言づレベルではないでしょう。もはや通訳レベルです。……ちなみに、将来の夢はなんですか？」

？？「格闘王！」

？？「な、なんでそんな夢なんですか」

？？

？？といつがなんでそんな夢なのに英語が得意なんだか。

？？「いいじゃねえかよ格闘王。世界でも通用する実力が欲しいと思つのは男だと当たり前だろ？」

？？「君は女の子だよね？」

？？「なんで疑問形なんだよ…」

？？

？？……いや、なんどつて言われても。

「どうか、なぜその夢でそれほど英語を勉強したのだ？」

「はん… わからねえかな、零。将来格闘王になろうとするだろ？ そうしたら、日本一になるまでは日本語でオッケーだけど、世界に行つたらやっぱり英語は要るだろ。それも相当詳しく、だ。

『』によ糞野郎』ぐらご一発で英訳できるぐらじゅねえとな』

「……それで英検一級、TOEIC九百点ですか。化け物ですね」

「ほめるなほめるな」

「ま、ま、間違いなくほめていないとおもこます……」

「うわ、弥生ちゃん んゅうじい勇氣ある。

？？「……とにかく、今日から四尋様には勉強漬けになつていただきます」

？？「ええ~……」

？？「ええー、じゃねえ。てめえ留年したらどうすんだよ」

？？「うひ~……」

？？僕はつなるしかなかつた。うひ。勉強いやだなあ。

？？

第五十話～テスト勉強と四季の不運！～

？？それから放課後まで授業を受けて、僕たちは家に帰った。“じへ
普通にじへして帰る、といつことがずいぶん久しぶりな気がする。

？？「ただいま～」

？？「お帰り、お兄ちゃん！」

？？アパートに帰ると、先に中学校から帰っていた四様が普段着に
エプロン姿で出迎えてくれた。

？？「どうしたの、四様？」

？？「ご飯作ってるの。じへでまともにお料理作れるのって、私と
お兄ちゃんだけでしょ？」

？？恐ろしいことに、後ろの四人はそろって首を傾げた。つて。

？？「なんで真宵ちゃんがいるの？」

？？「いたら悪いか？　？四季の勉強見てやるって話だっただろう
が」

？？「……あ」

？？「そういえばもうだった。

？？「忘れてやがったな？　？つたく、都合のいい脳みそしゃがつ
て」

？？真宵ちゃんはそういつと、部屋にさかずかと入り込んで、卓袱
台の上に筆記用具等を用意した。

？？「あ、あのむ、まづ、『』飯食べてから……」

？？「逃げんな。殺すぞ」

？？君が言つたら洒落にならない！？

？？「すぐに脅すから、あなたは暴力女なのです」

？？「うつせ。黙れクソメイド」

？？「喧嘩している場合か。さ、四季、早く始めよつか」

？？零は卓袱台の上に、化学と数学の教科書を広げた。

？？「おこいり零。なんでもめえが一番先にやつてんだよ。『』は幼馴染の私がやるところだろ？」

？？「知るか。四季はただでさえ成績がよくないのに、化学と数学はダントツで悪いからな。先にやつて、時間を取るのが当然だろ？『』

？？「こいつ英語も壊滅的なんだぜ？ What time is it now? もわからねえぐひー」

？？「それぐらいわかるよー！」

？？真面ちゃんに僕は一体どれほど勉強できないと思われているんだ？

？？「なら、訳してみる」

？？「え？ ええっと、ワットが何だが、いつ、になるんだよね。じゃあ、『』はその今ですか』だー！」

？？四様を覗く全員が僕を可哀想なものを見る目で見た。……え？

？？「……悔しいが真宵の案に賛成だ。化学より何より英語をしな

ければ……」「

？？「だろ？」「

？？「……四季様……」「

？？なんだか、夜闇の視線が、本気で僕を心配しているような表情で僕を見た。その視線はまるで、出来損ないの領主を遠くから見守る忠臣のようで……。

？？「ね、ねえ、お兄ちゃん」

？？「な、何かな、四様」

？？四様まで、何がなんだかわからない、といつぽを向けてきた。
き、君もなの、四様？

？？「英語つて、何？」

？？「……」

？？中学生、だよね？

？？僕だけでなく、みんながそう思つてゐると思つ。だつて顔に書いてあるもん。

「し、知らない、のか？」

「うん」

「今まで学校はどうしていたのです？ テストも、授業もあった
でしよう」「でこ」

「私、中学からは行つたことないよ？ それに、テストも授業も小学校
の時から『偶然』テスト用紙がなくなつたり、『偶然』先生が失踪
したりして、一回しか受けたことない」

「……そ、それは、虐待、ではないんですか……？」

弥生ちゃんが四様を心配そうな顔で見る。僕も知らなかつた。といふか、重い！

「……まあ、まあ、キリコにはその神の運があるから勉強はできずっと生きていけるだろ？だが、問題は四季だ」

「お兄ちゃん、テスト、嫌なの？」

四様の質問に僕は唾を飲み込む。だって、こじりもしつなづけば、テストはなくなるだろ？からだ。

「う、うう、うう。ほ、僕は、テスト、したいなあ……

「もうなんだ～」

四様は残念そうに言つた。……くう。

「へえ。てめえにも見どひのあんじやねえか」

ありがとう間甯ちゃん。キリコの言葉が一番の励みだよ～。

「じゃあ、うんと難しくしてくね」

「……へ？」

「だって、『困難は大きければ大きいほど、乗り越えたときの達成感は強い』んでしょ？ どこかの本で読んだ」とあるよ

「え、で、でも」

「ええっと、神様神様、どうかお兄ちゃんの学校のテストを難しくしてくださいますよ！」……

それから、本気で四様は願い始めた。神の運を持つ四様が本気で願つたら、何もかもが思い通りになる。と、いふことは。

「……み、みんな、勉強しよう!」

「賛成です。私も自信がなくなつてきました」

「わ、私もだぜ!」

「わ、わわわ、私も、その、赤点を取つてしまふかも、なんて……」

「……」「まづいな。これは勉強せねば……」

僕たちは、今までのテストを大きく上回るであろうテストに備え、勉強することを決意した。

第五十一話／みんなカリカリ！？

？？カリカリ、カリカリ……。

？？「……もうダメだつ！」

？？

？？僕はシャーペンを卓袱台の上に投げ出した。

？？「諦めんじゃねえ！」

？？「無理だつ！ ？なんのこの暗号！」

？？今僕は長文読解をやつているわけだけど、だんだん英語で書かれているはずの文が、H-1-2-G-M暗号機で打たれた暗号のようにしか思えなくなつていた。

？？「までこらへめえ。なんで英語わかんねえくせにH-1-2-G-M暗号機知つてんだよ」

？？「なんで君は僕の考えが読めるのつ！」？

？？「私とてめえは幼馴染。忘れんなよ？」

？？それはあれかな、幼馴染は以心伝心できるといつ都市伝説かな？

？？「……え、H-1-2-G-Mなんぢゃら、つて、何なんですか？」

？？「第二次世界大戦中開発された、日本の暗号機だ。専用の解読表がなければ絶対に解けず、世界有数の諜報機関が解読表を求めて日本中を歩きまわつた、とかいう噂もある」

？？「へえ～、そなんだ。さすが零さん、博識」

？？「キミには負ける。H-1-2-G-M暗号解読表が欲しいと願えば手に入るかもな？」

？？「……そんなの欲しくないもん」

？？「む、 そうか」

？？なんかこひらはひらで雑談してるし！

？？「四季様、 手が止まつておられます。今は心を機械のようにして努力なさつてください。暴力女、あなたも、同様に」

？？「う……」

？？「うぐ……」

？？何も言えずに僕らは黙る。そう、僕たちは四様のせいで、異常なまでの勉強を強いられているのだつた。あれ？ 勉強を強いられる、つて重ね言葉じやないのかな？ だつて勉強つて、もとから無理やつさせられるものだもん。とかいう現実逃避も、そつとくは続かない。

？？「……ああもうひー！ こんなのがやつていられるかっ！」

？？

？？ついに、今まで我慢かつた零が、ボールペンを叩きつけた。

？？「なんで一研究者のボクが『世界平和を実現させる科学的方法』を考えねばならないのだつ！ こんなものが高校の、それも四季が受かるようなレベルの高校のテストに出るものかっ！ もし出たとしても、『全人類にロボトミー手術を受けさせる』と書けば凌げるつ！」

？？「ろ、ロボトミー……？」

？？「それくらい自分で調べろつ！ 今のボクには時間がないんだ

つ！」

？？

？？というか零、ロボトミーって……。

？？「つたぐ。みんなカリカリしてんなあ。夜闇、てめえはどじだ
？」

？？「話しかけないでいただけますか。今英語が得意なあなたに話
しかけられると、例えよつもない怒りがどこからかふつふつとこみ
あがってきます」

？？無表情で言われても説得力がないよ。でも、説得力がないのは
表情だけで、他の所はちゃんと怒りを顕にしてる。おもに、腕と
か指先とか。

？？「はん。持てない者の僻みつてか？」できる者はつらいねえ

？？「……今の発言、許しません。……殺つ！」

？？ダン！ ？と夜闇は飛び上がると、黒と白のメイド服をはため
かせ、真宵ちゃんに飛びかかる。手には、無骨すぎるナイフ。

？？「はつ！ ？ヤル気か？ ？いいぜ、やつてやるぜ！」

？？真宵ちゃんはノリノリで全身に鬪氣を纏わせ、構える。

？？「うるさいですよつ！ ？私今苦手な数学の勉強中なのです、
黙ってくれないと気が散るじゃないですかッ！」

？？今までおとなしく零と話していた弥生ちゃんが、そう叫んでバ
ツグから刃付きのメリケンサックを取り出し、指にはめた。すると
弥生ちゃんの皿の色が変わった。

？？「……殺して差し上げます、お一人とも……」

？？「裏弥生ちやんだ。」

？？「上等だ弥生！」

？？「いいでしょ。時間浪費、いえ、暇つぶしに付き合つて少し
あげます」

？？「三つ巴でいらっしゃる二人。またここで暴れるの！？」

？？「まてーーー！」

？？その時、零が立ち上がった。あ、やつぱり止めてくれるんだね、
零。

？？「キミには一体いつまでそんな原始的なことを続けるつもりだ
？？ボクが文字の奔流に狂いそうになるのをしつていながら、隣
でそんな非科学的なことをされたら……」

？？ふと、零がさつきまでやっていたテキストを見てみる。国語の
教科書だった。そうか、理科が終わった零は、苦手な国語をやり始
めたんだ。

？？「……吹き飛ばしたくなるじゃないか」

？？「ロ、ロロロ、ロロロロ、ロロロン。

？？重低音がして、物凄く小さな黒い塊が、いくつもいくつも零の
白衣からじぼれた。

？？「……くふふ、くふふふふ！ ？これは『ボム』。ボクはこ
れにその名以外を名付けるつもりはない。この爆弾の役目はたつた

ひとつ、単純にして明快！

？？「え？」

？？ひょっとまって、今爆弾って！？ ？なんで急にそんなこと！

！？

？？「ちつー？零を潰すぞ！」

？？「わかつてます」

？？「理解しています！」

？？真宵ちゃん、裏弥生ちゃん、夜闇が零に向かって攻撃を放つ。真宵ちゃんの極高密度の鬪氣は寸分違わず零のお腹にクリーンヒット。げほ、なんて悲痛な声を上げて零は吹き飛んだ。

？？次に裏弥生ちゃんの鋭いかかと落とし。ぱきぐしゃ、なんて残酷な音が零の首から聞こえた。

？？最後に夜闇の破壊的な峰うち。ただのナイフでの攻撃だが、夜闇のは桁が違い、メリメリイツ、と袈裟懸けに零は切られ、どこか遠くへと吹き飛んで行つた。その途中に零が呟いた一言は、僕の耳に絶望をもたらした。

？？「くふふふつ！ ？あと三秒……」

？？一、弐の、

？？あ、だめ、死んじゃつ

？？惨。

第五十一話／みんなレベルが上がつてゐる…？

？？？気が付けば、青空の見えるようになつた部屋で僕は目覚めた。
どいつも朝になつたみたい。

？？？学校、いかなきや。

？？？」みんな、起きて！」

？？

？？？」反応はよつとつあつた。

？？？」お、おー！」

？？？よろよろと、真面ちやんが立ち上がつた。その姿はまるで戦が
終わつたばかりの武士のようだ。

？？？」は、ははは、はいですっ！」

？？？しゃせん、と一瞬で瓦礫を押しのけ、立ち上がつたのは、表弥生
ちやん。

？？？」……不覚」

？？？夜闇が冷静にそつとして、音も立たせずによくつと立ち上がつ
た。

？？」「……ひたすら、おはよ、ね兄ちゃん」

？？

？？？やつぱつとこつつか、恩のべれい」とこ様はむじむじと田を
「あつながら起きた。その体には瓦礫の一斤どひりか埃一つついて

いない。さすが、神様の運。

？？「大丈夫、四様？」

？？「むにゅ？……あ、うん、大丈夫」

？？でも、もしかしたら頭を打ったかもしれない。病院に連れていつたほうがいいのだろうか。なんて説明しよう？　？同居人の爆弾で部屋が崩落して……。

？？ダメだ。零に手錠がかけられる光景が簡単に浮かんだ。

？？「あれ、零は？」

？？「知るかあんなヤツ！」

？？真宵ちゃんはすぐさま言つた。

？？「おそれく、どこかへ吹き飛んだかと。本氣でやつましたので」

？？「ど、ビビビれくらい飛ぶんですか？」

？？「約一百メートル前後かと」

？？「へえ～。そんなものですかあ～」

？？世にも恐ろしい会話がここになされている気がする。人を一メートルも飛ばして、『そんなもの』…？

？？「とにかく学校行こうよ、学校」

？？「ま、それには賛成。とつと�行こうぜ。勉強道具も全部吹っ飛んだし、手ぶらで行つてもかわんねえだろ」

？？「ですね」

？？「そ、そそそうですねー」

？？「行つてらっしゃい、お兄ちゃんー」

？？四様は手を振つて僕たちを見送る。……もしかして。

？？「君も行くんだよ、学校」

？？「……あ

？？もつぱり、忘れてたな。ダメじゃないか。

？？「あ、あはは……いつてきます、お兄ちゃん」

？？「行つてらっしゃい、四様」

？？僕は挨拶をして、学校へ向かつた。

？？「……まー？」

？？学校に来て、一時間目。さつそく僕は来なきやみかつたと思つた。

？？「この問題をといてみる。テストに出るからな

？？先生がいつものように、そもそも簡単そうな口ぶりで囁つ。そんな簡単なものじゃないよ。

？？「なん……だと……？」

？？ビニからかいつのまにか復帰していた零がバケモノでも見るか

のよつな田で、黒板にかかれた式を凝視していた。

？？「どうしたの、零？」

？？「これは、フュルマーの最終定理だ。……高校生解けるようなものでも、ボクが解けるようなものでも、ない。……まさか、これ程とはっ！」

？？今更ながらに、僕は四様の実力を思い知らされるのだった。

？？そして、次の時間、国語。

？？「さあ、とっととやれ！　？」この程度の漢字、貴様らにできな
いはずがない！」

？？やけに尊大な先生が、黒板の漢字をバンバン叩きながら言つた。

？？「…………そ、そんなっ！？」わ、私に読めない漢字があるなん
て……っ！　？」漢検一級なんかじゃ、全然足りないんですかっ！？」

？？「はははっ！　？」甘いぞ如月！　？」我が校の生徒でいたいなら、
漢検一段は持つていないとな！」

？？「そんな」……

？？弥生ちゃんの地味な実力も、じどじとぐ上回つていた。つて、
こんなのでよくみんな我慢してるなあ……。

？？「…………おい、どうする？　？」やるか？」

？？「そうだな。今は四季の野郎より、あいつらだ

？？あ、全然我慢してない。秘密会話で殺人計画練つてる。
？？このクラスから犯罪者がでないことを祈りながら、国語の時間
を過ごした。

？？次の時間も、その次の時間も、世界レベルの難しい授業になつていて、ただでさえ勉強ができなかつた僕は、背筋が凍る思いだ。

？？……いや、冗談抜きで、大丈夫かなあ？

第五十二話　お昼休みの話し合い～～

？？その日の昼休み。いつもなら昼食をとっているクラスメイトで賑わう教室も、今日はやけにひと気が少ない。主に男子の数が。先生方をどうこうするつて思卷いていたけれど……。

？？「……先生方、大丈夫かなあ……？」

？？「心配すんなよ。マジで殺るわけじゃねえだろ？し、大丈夫だろ」

？？「しかし、みなさんかなり殺氣立っていたようですが……」

？？「能力的に不可能なことを強制されるぐらいなら、多少のリスクはあっても原因を消す、と思っているかもしだんな」

？？「だ、大丈夫なんでしょうか……」

？？みんなは昨日とおなじように僕の机を中心に包囲網を敷いている。右側に夜闇、左側に零、正面には弥生ちゃんと真宵ちゃんが狭そびに座っている。

？？「ほ、ほ本当に大丈夫でしょうか……男子さん達」

？？「心配するのそつち！？」

？？「当たり前だろう。午前中のような授業内容ままのテストなど出されればもはやボクらに未来はない」

？？「ですね。それを阻止するためにも、先生方には消えていただかないで。せめて安らかに逝けるよう、祈りましょうか」

？？「だな。あとそれと男子連中が成功することも一緒に祈つてやうぜ」

？？「みんな何言つてゐのつ！？」

？？なんて物騒なことを平然と……。僕の必死の叫びをあざ笑うか

のよつに、真宵ちゃんは冷徹に言つた。

？？「何言つてるか意味くらいわかんだる。……ま、てめえには現実を知る必要があるな。周りを見てみな」

？？僕は言われた通りに周りを見渡す。今教室にいるのは弁当組の女子生徒だけだ。……でも、なんか様子が変。いつもなら僕たちに否定的な目を向けるのに、まるで正義のヒーローを見るような、そんな目で僕たちを見ている。

？？「ついでに、聞き耳も立ててみたらどうだ？」

？？零の言つ通りに僕は話をしている女子生徒一人に聞き耳を立ててみる。その一人は特に声も潜めていないので割と聞き取れる。

？？「……いつつも暴走してるあの人達だし、きっと今回も、だね」「うん。変に難しい問題を出してくる先生におしおきしてくれよね！」

？？「おしおきって……まったく、あなたは純粹ね。殺してバラバラにして埋めちゃえ、とか言つてもいいのよ？」

？？「そんなの悪いよ……」

？？「まあ、そうだけど。きっと勝手に暴走して勝手に排除してくれるわ」

？？そんな会話が聞き取れた。

？？「な？ セン「一〇じもの排除はクラスの総意なんだよ。わかるか？」

？？「この国は民主主義。ならばキミも、大多数にならつべきだろう」

？？「数の暴力じゃないか！」

？？「数の暴力が気に入らないとおっしゃるのなら、私が純粋な暴力で教師連中を片付けて来ますが」

？？「しなくていいよ！」

？？「な、なら私が、男の人達止めて来ますね！？すぐに行つて来ます、し、四季君の前に、男子全員分の亡骸を耳揃えて」

？？「両極端にもほどがあるよー！」

？？びつちにしろ人死んじゃつてるじゃないか！？それじゃ意味ないよ！？と「うか弥生ちゃん、人殺ししたくないから裏人格できちゃつたんじゃないの！？？なんで嬉々として向かつて行くのさ！」

？？

？？「うひ……怒られちゃいました……」

？？困つている顔をして「いんだけど、ビニカ嬉しそうなのは氣のせいかな？」

？？

？？「……ならば、びつするのだ、四季」

？？ひづく面倒くさいに零が聞いてきた。

？？「びつするって言われても……」

？？

？？思いつかない。

？？「皆さんの意見を取り入れたとするのなら……やはり」

？？「やはり？」

？？夜闇の提案なんて口クなものではないだろ？！」「一応聞いて

おべ。

？？「教師連中、男子連中全ての殲滅かと」

？？「なんでそうなるの？！？」？なんでそつ恐ろしこ」と考えるの！？」

？？「……お氣に召しませんか」

？？「お氣に召すわけないでしょ！」

？？みんな実はただ暴れたいだけなんじゃ？？急に勉強しはじめたからストレス溜まつてゐるのかなあ……。

？？「……まつたく。教師も消すな、男子も消すな。一体ボク達は誰を消せばいいのだ？」

？？「誰も消さなくていいよつ！」

？？といつかぢりして誰かを消すのが前提なのわつ！

？？「……つたぐ。冗談はともかくこのままだとマジでやべえぞ？」

？？「どうすんだ四季」

？？「冗談だつたの？」

？？「誰がたかがテストで人殺しすんだよ。少なくとも私はやらねえぞ？」

？？

？？そ、さうなんだ……ちよつと安心。そう僕が胸を撫で下ろしていふと。

？？「ボクはわつと本氣だつたがな。教師連中はともかく、研究対象の四季をどうこうしようと企んでいる連中を生かしておへわけにはいかない」

？？零は「冗談めかして言つて」るが、真意はどうかわからない。もしかしたら真剣に……なんることもありえないわけじゃない。

？？「あ、ああああのー……ど、どうするかはとりあえず置いて、今日はとにかく乗り切りましょう!」

？？「うん、それが一番平和的だよ」

？？「私もそれでいい。なかなかいい」とつづけたが、弥生

？？「…………四季様が賛成なら、私も賛成です」

？？「いろいろ言いたいことはあるが、とりあえずは賛成しよう」

？？弥生ちゃんの提案に、みんなが賛成する。うん、平和的解決が一番だよ。うんうん、よかつたよかつた。

？？「…………でも、またあの授業受けなきゃいけないのか……」

？？「…………」

？？確かにうれしいんだけど、気分はあんまりよくない。むしろ憂鬱な気がする。

？？……はあ。

第五十四話～よつやくの放課後！？～

?
?

? ?
.....お、おい、四季？ ? 生きてるか？「

? ? -
い、生きてるよ~多分上

？？真宵ちゃんの問いに、僕は力なく答える。地獄のような一時間が終わって、放課後。僕は全体力を使い果たして机に突っ伏していた。めずらしいことに真宵ちゃんも同じように倒れ、机を枕にしていた。

……全く、変に理解しよひつかないが、どうなるのだ。どうせ

理解できないのが羨ましい限りだ。

だ、たんですね」

が
…
」

？？「私は午後は眠つて過ごしましたから」

？？零や弥生ちゃん、夜闇が僕の席の前でぐちぐちと言つてこる。
？？うう。あたまいたい。

？？「…………」？全快ひー！？よし、いくぞ四季！？

早く帰ろうぜ！」

? ? - うん

～～ ピンチと飛び起きた真面丸やんと反対にのっやりと起き上がる業。

？？「……わへ、ヒ。早々て歸ひへ。臣様て嘗めぬりござりが

あるからな」

？？「……？」

？？因様に嘗めわなきやいかなことへ。？なにそれ。

？？「四季様、肩をお貸ししましょうか？」

？？「い、いや、ここよ。自分で歩ける」

？？

？？夜闇の魅惑な提案をかりついで断ると、僕はようやく歩める田
す。

？？

？？「無理すんなよ。つたぐ」

？？「え？」

？？「あつー？」

？？体がふつと軽くなつたかと思つた。でも本当は少しでも重くないで、

真宵ひやんが肩を貸してくれたから、つて……

？？「ま、真宵ひやん？」

？？「んだよ。私が肩貸すんじゃ嫌か？　？んん？　？お前肩貸し

てくれる相手選べるような身分じやねえだらうが

？？「あ、あはは、や、やうだね~」

？？照れ隠しどとかじやなく、本気でやつ想つてゐみたい。

？？「ま、ま、真宵わざつー？」

？？「んだよ？」

？？「し、し、四季君に何を……！」

？？「別に殴つたり殺したりしてゐわけじゃねえんだ、別にいいだろ？」

？？「そりこいつ問題じやあ、ああ、もひー！」

？？弥生ちゃんは一度つなると、眞宵ちゃんの反対側に来て、空いてこる方の僕の肩をとつた。

？？「なにこんだおまえ？」

？？「い、いうすればもつと楽に歩けますよな、四季君？」

？？「え、ええっと……」

？？実のことをこつと、もつとくの昔に元氣になつて、歩かるどころから走り回る」とだつてできそつなんだけビ。まあ、まあ、楽だし、このままでいつかな？

？？「つたく。教師連中どもが、四季をこんなにも疲れさせやがつて……許さねえ」

？？「……普段あなたがしていることよりかは遙かにマシだと思われますが、暴力女」

？？「そつか？？いつも通りだと罪つたびな

？？「……不憫な四季様」

？？よよよと効果音までつけて、夜闇が悲しむふりをする。

？？「し、し、し、四季くん、だ、大丈夫、ですからねつー」

？？「僕は君の方が心配なんだけど……」

？？カタカタ震えてるし、声も上ずつてゐるし。弥生ちゃんの方がよっぽど疲れてるんじやない？

？？「……」「人とも」

？？「んだよ、零」

？？「なんですか、零さん」

？？教室を出ようとしたとき、零の冷ややかな声が後ろから聞こえた。

？？「四季のことなんだがな」

？？びくり。僕の肩が反射的に跳ね上がる。ま、まさか……。冷や汗が背筋を流れる。

？？「歩き方が常人と変わらん。もうひとつこの昔に回復してやる」

？？「……」

？？すつと、真宵ちゃんが貸してくれていた肩が外れた。

？？「え、え、えっと、ま、真宵……ちゃん？」

？？「ガガガガガ……。今の真宵ちゃんが持つオーラを擬音にすれば、そんな感じ。背中からなにか得体のしれない化け物が見える気もする。

？？「……へえ。なんかよ、四季」

？？僕を睨みつける真宵ちゃんの顔は、なぜか真っ赤つかった。

？？「てめえは私の好意を利用して、あんな恥ずかしいことをさせたんだな？ せつかく私がゆうき、じやなかつた、仕方なく肩貸

してやつたの」「よおひー」「

？？え、え、ま、い、殺されるつー！？

？？僕は希望を求めて弥生ちゃんを見る。彼女は涙目になりながらふるふると首をふつっていた。

？？「そ、そんな、し、四季君……わ、わた、私を、私を騙していたんですね……？」

？？「騙してなんか」

？？「いひ、四季」

？？ぐい、と無理やり首を回され、真宵ちゃんの方を向かされる。ほつぺたに真宵ちゃんの柔らかい手があたつて、ちょっとといい気分……じやなくて！

？？「な、なにかな？」

？？「なに私と話してゐる最中に弥生の方を向いてんだよ。弁解聞いてやるから、早く言へ。ともなきや全身の関節を逆に曲げる」

？？真宵ちゃんの手が肩にかかる。力がどんどんかかつて……いた、いた、痛いつ！？

？？「痛い痛い！ や、やめて真宵ちゃん！」

？？「わかったから、早く言えってんだ

？？少しだけ力が弱くなる。今言わなきや多分僕は……。早く言わなきや、当たり障りのない嘘を……

？？「嘘ついたら針千本飲ます」

？？「乐だし、気持ちがよかつたから黙つてました

？？あ、余計なことまで言つた。

？？「…………ほお。へえ。わかった。とつあえず、そつだな……死ん
どくか？」

？？「え、ちよつ、真宵ちゃん」

？？真宵ちゃんの手が肩から首に動いていた。何をするつもり？

？？「四季和一…？」

？？「え、なに、弥生ちゃん」

？？「…………この期に及んで…………っ！　？私によくも恥ずかしいこと
をさせてくれやがったな！？　？しかもそのつえ他の女ばっかりつ
！」

？？「あ、しまつ」

？？「キツキコ。

？？「首から、異音。

？？「四季和一…？」　？しつかりしてんだぞ、四季和、四季和ー
ーん！」

？？弥生ちゃんの叫び声を聞きながら、僕は意識を失った。

第五十五話～異常テストの終結！～

？？もう僕は一度と復活できないかもしない。そんなことを考えながら目が覚めた。考えられる時点でもうすでに矛盾してることに気が付いて、ほつとする。……いや、ここがあの世つて可能性は……。

？？「……お兄ちゃん」

？？四様の顔を見て、僕はここが現世であることを確信する。だつて四様は生きているし、神様に守られてるんだから死ぬはずもないし。

？？僕は身体を起こして周りを見回す。どうやら、ここは僕の部屋みたいだ。どうも皆は氣絶した僕の身体をアパートまで運んでくれたようだつた。空が見えているから、部屋と呼べるかどうかもわからぬけど。四様は僕の左側で起き上がつた僕を心配そうに見ている。

？？「お、おはよう、四季君」

？？「うん、おはよう、弥生ちゃん」

？？僕は正面で正座をしている弥生ちゃんにあいさつをした。彼女はどことなく不安そうな表情をしている。僕が死んじゃつたと思ったのかな。「めんね、心配かけて。

？？「四季様、おはようございます……」「あ、うん、おはよう。どうしたの？」

？？僕の右隣には、制服からメイド服に着替えた夜闇が正座で座っていた。どうしてかはわからないけど、夜闇は酷く申し訳なさそう

にしている。

?

？？「……その、また暴力女の暴走を止める事ができませんでした。今は彼女自身の部屋に監禁……いえ、謹慎させていますが、不手際だつたのは事実。申し訳ありませんでした」

？？彼女は深々と三つ指をついて謝った。

？？「こうなれば四季様に私の身体を捧げ、満足して頂くしか……」

？？「それ、全く罰になつていなし」

？？僕の後ろの方から、零の声が聞こえた。後ろを振り返ると、白衣姿の彼女が立つていて、冷ややかな目を夜闇に向けているところだった。

？？「罰になつていなし、とは？」

？？「お前、悦ぶだらう？　？苦痛が伴つていなければ罰とはいへん。路地裏にでも立つか？　？そうすれば罰にもなるし金も入つてくる。一石二鳥だな」

？？「な、なんてことをこうんだよ、零！？」

？？僕はとんでもなこと言つた零に叫ぶ。何てこと残酷なことを。「冗談にしてもひどいぞ」と。

？？「…………お兄ちゃん、どうして路地裏に立つのが残酷で、ひどいことなの？」

？？「なんで君は当たり前みたいに僕の心を見透かすの？」「？」

？？僕が悲痛な叫びをあげると、四様はにまつと笑つた。

？？「兄妹だからだよ。知ってる、お兄ちゃん？　世界にはね、死んでもお兄ちゃんのことを想い続けて、生き返った妹がいるんだよ？」

「？」

？？「それが読心術の原理なの？」

？？四様は「クリと頷いた。

？？「うん。……それで、どうして路地裏に立つのが残酷なことなの？」

「？」

？？「え、えっと、それは……」

？？僕は言いながら、零を睨む。どうして四様に持たなくてもいい疑問を持たせたんだっ！？

？？僕はそういう意図を視線に含ませたつもりだったけど、零はそうは取らなかつたみたい。

？？「ふむ、了解した」

？？「え、なにが」

？？僕が止める暇もなく、零は、口を開いた。

？？「いいか、四様。路地裏に立つところのは簡単かつ明瞭に言うならば、ばいし」

？？「夜闇、止めてっ！」

？？「はい」

？？ギリギリで僕が言うと、夜闇が音もなく零に近づいて、何かをした。僕の後ろで行われたことなのでわからないけど、静かになつたから、きっと口を塞いでくれたんだろう。でも、もじもじ、とかの零がもがく声が聞こえないなあ？

？？「……お、お兄ちゃん、れ、零さんが……」

？？「え？」

？？僕は振り向いて、絶句。零が倒れていて、ピクピクと痙攣している。

？？「四季様、止めました」

？？「口を塞いでって意味なんだけどーー？」

？？「塞めましたが……」

？？わざわざこう物騒な塞ぎ方をする意味を小一時間問い合わせたのをからうじて我慢する。

？？「……そ、やう。じゃあ、起こして」

？？「はー」

？？少なくとも、誤解をするようなことを言った僕が悪い。零には悪いけど、夜闇にはなんにも言わないことにする。

？？「……つ、つむう……？」一体なにが……？」

？？「零、四季の教育に悪い言葉は謹んでください」と四季様のお達しです

？？「……むづ。確かに、ボクの配慮が足りなかつたか」

？？零は素直にうつひとつ、白衣の乱れを直して再び立ち上がった。

？？「さて、四季。確かに罰として夜闇と交わるのも悪くはないし、四季が床で女をどう扱うか興味もあるが……今はそれどころではない

い

？？淡々と、とんでもない」とをなんでもない」とのよつて「？」零は、まさしく浮世離れした研究者、つていう感じだ。

？？「……そ、そうですね」

？？今まで黙つていた弥生ちゃんが、切実な表情で言つた。

？？「確かに。何よりもまずやうねばならない」ことが今、確かにあります」

？？夜闇も、真剣な表情で言つ。

？？「え、えつと、なに、かな？」

？？皆の視線を一様に浴びた四様は、戸惑いながら言つた。

？？「頼みがある。テストの難易度を下げてくれ」

？？「お願いします、その、あの、テストを簡単にしてくれださい！」

？？「テストを私にも解けるレベルに戻していただけますか？」

？？三者三様に、『願い』を四様に言つ。願いを聞いた彼女は、目に見えて不機嫌になつた。

？？「……なんで？　いいじゃん、ちょっとくらい難しくても」

？？「世界レベルの学力がなければ解けないテストをちょっとと言わせるわけにはいかない」

？？零が皮肉げに言つた。

？？「……だからって、私に願い」となんてしないでよ

？？寂しげに四様は言つたのだった。……そつか、四様は前、願い事屋、なんてことをやらされてたんだ。だから、願い事をされることは、四様にとつては嫌なことでしかないんだ。

？？「……四様」

？？「なあに、お兄ちゃん？……お兄ちゃんも、私にお願いするの？」

？？「……」

？？お願いするべき？？いいや、違うよ。そもそもこんな風にテストが難しくなったのは四様が勝手に勘違いしたせいなんだ。それを当然だと四様が思つてゐにせよいにせよ、悪いのは四様。……なら、ここで『お願い』するのは間違つてるんじゃないだろうか？？僕がするべきことは、兄がこの場面であるべきことは……きつと。

？？「四様はや、なんでテストを難しくしたの？」

？？「難しくした方がいいと思つたから」

？？「そんなの、僕が言つた？」

？？「……」

？？四様は突き放された子供のような顔をした。少し胸が痛むけど、今は我慢。

？？「今すぐ、元に戻すんだ。……いいね？」

？？僕が少し厳しめに言つと、四様はなぜか嬉しそうな顔をした。

？？「うん、わかった、お兄ちゃん。」めんなさい。いますぐ戻す
ね」

？？「こやかに微笑むと、四様は手を胸の前で組んで、祈る。……
怒られて喜ぶなんて、変な四様。

？？「ふむ、そりそり」と、か

？？祈る四様を見ながら、零が興味深そうに呟いた。

？？「どうしたの？」

？？「なに、簡単なことだ。今まで四様を叱る人間がいなかつたの
だろう。誰もが自分にひれ伏し、願い事を言つていいく……。叱られ
たことのある人間なら、喜ぶ状況だろうが、生まれた時から叱られ
たことがないとなると、それは苦痛以外の何ものでもないだろう」

？？零の説明はもつともだつた。祖母も祖父も、きっと理不尽な怒
りをぶつけることはないとも、正しく導くために叱ることはなかつ
ただろい。

？？「……よく歪まずに育つたものだと感心します」

？？

？？夜闇はそう言つけど、僕はそう思わない。こんなに簡単に世界
が変えられると思つこと無体、すでに歪んでる証拠じやないだろう
か。

？？「……私のようにならなければいいんですけど……」

？？弥生ちゃんが珍しくどちらも、どちらもせずにセリフを言つた。
……裏人格のことを言つているんだろうか。

？？「…………うん、 できたよ、 お兄ちゃんー。」

？？祈り終わると、 四様はぱあっと明るく笑った。

？？「うん、 よくできました」

？？本当はお礼を言いたかったけど、 それを言つたら、 わつきひとつたのがテストのための方便みたいに思われちゃうかもしない。だからこゝは、 壊めるために留める。

？？「もう勝手に勘違いして世界を変えちゃだめだからねー。」

？？「はあー……」

？？四様は嬉しそうに返事をした。

？？「………… やすがだな、 四季。 いーお兄ちゃんをしてこるではないか」

？？「ありがと、 零」

？？零の単純な褒め言葉が、 純粹に嬉しかった。 僕も、 ちゃんとお兄ちやんでいるかどうかが不安だったのかな。

第五十六話「えつと」れつてもしかして!~

??それから僕たちはいつものように四様の「」飯を食べて、みんなで固まって眠つた。時々喧嘩をすることもあつたけど、みんな概ね仲がよかつた。うん、いいことだよね。

??そして、それから僕らはテスト勉強をしたり、学校に行つたり、他愛もないケンカをしながらも一週間を過ごした。難しさが元に戻ったテストを受けて、結果も返ってきた。

??真宵ちゃんは相変わらず英語が満点。弥生ちゃんは国語が満点だった。夜闇は社会が、零は理科がそれぞれ満点だった。僕？？あはは、いつも通りボロボロだった。だからみんなさんざん色々と言われたけど、まあ、政臣との勝負には勝つた。昼食一週間分は払う必要がないみたい。よかつたよかつた。それが決まったのが、金曜日。今日は、その次の日だから、土曜日だ。

??「……おい？」

??「え、なに真宵けやん？」

??そんな風に昨日までのことを思い出していくと、隣を歩いていた真宵ちゃんが声をかけてきた。他には誰もいない。弥生ちゃんも、零も夜闇も四様もいない。それは、今日真宵ちゃんが全国大会の試合だからだ。みんな、真宵ちゃんの試合を応援したかつたみたいだけど、真宵ちゃんは僕以外来て欲しくないと言つたのだ。

??「お前さ、ちゃんと応援してくれよ？」

??「わかってるよ、真宵けやん」

??大会会場に向かう道で、真宵ちゃんは珍しく不安そうに僕に聞

いた。全国大会で優勝し、格闘王になるのが夢の彼女だけど、大会の成績はあまりよくない。それはいつもいつも反則で退場させられてしまうのだ。

? ? 「でもさ、それよりも僕は真宵ちゃんが反則負けしないかどうかが不安だよ」

? ? 僕がそう言いつと、彼女はショボんと頃垂れた。

? ? 「……わかつてるよ。わたしは喧嘩つ早いからな。いつもの感覚でやつちまつて、ミスるんだよなあ……」

? ? 「そつそつ。だからこの前の大会なんか、真宵ちゃん謎の飛び道具使つたつてことになつて負けたんだよね」

? ? 「……いつも癖だつたんだよ」

? ? 「」の前の大會で真宵ちゃんは僕にするみたいに闘氣の塊を対戦相手にぶつけて失格となつたのだ。まあ、時々真宵ちゃんが何の拳法学んでいるのかわからなくなるときがあるけど、それは大会審判も同じみたい。

? ? 「……なあ、四季。私、勝てると思つか?」

? ? 「反則しなきゃ勝てるんじやない?」

? ? 「軽く言つてくれるぜ……」

? ? 真宵ちゃんを励ますつもりで言つたのに、逆に落ち込んじやつた。なんとかならないかな……

? ? 「ね、ねえ、真宵ちゃん。勝つたらお祝いしよう」

? ? 「お祝い?」

？？「ピクッと真宵ちゃんが反応した。

？？「そうだよ。勝つたら何が欲しいの？」

？？「……私は……」

？？真っ赤になつてもじもじしながら、真宵けやんは口ひもつた。

？？「私は、その、お前と、じゃなかつた、ええと、その……。よしー。欲しいものがたくさんありますぎてすぐには決められねえから、てめえ、私と一緒に来て荷物持ちしる。他の奴らにさせられるわけにはいかねえから、お前以外は呼ぶんじやねえぞ！」

？？「あ、うん、わかつた」

？？僕は頷く。真宵ちゃんったら、欲張りだなあ。まあ、真宵ちゃんじしくていいけど。

？？「お、おう。そ、それから、何があつてもあいつらは呼ぶなよ。そ、その、あいつらは女の子なんだから、荷物持ちなんてさせられねえだろ?」

？？「うん、そうだね。真宵ちゃんだって女の子なんだから、重いものは持たせたくないよ」

？？「……」で怒らせても意味ないので、女の子、って呼ぶ。多分真宵ちゃん僕より力持ちだらうけど、そこは見栄つてやつだ。

？？「……つ。お、お前、私のこと女だつて……？」

？？「……？違つの？」

？？「い、いや、違わねえけど……。なんか調子狂つな……」

？？真宵ちゃんは氣恥ずかしそうに頬をかいた。なんか照れてる真

宵ちゃんって結構可愛いかも。

？？「……なんだよ、ジロジロ見て」

？？「いや、可愛いなあって」

？？「つ！？」

？？真宵ちゃんの目が見開かれる。まづいつ！？とつさに身構え、衝撃に備え防御体制に入る。

？？「……そ、その、ありがとよ」

？？予期しないことに、真宵ちゃんは何もしてこなかつた。

？？「……と、とにかく！？早く行こうぜー！」

？？顔を赤くして嬉しそうにスキップする真宵ちゃんを見て、僕は違和感を感じずにはいられなかつた。

？？「あれ～？？こんなに真宵ちゃんってこんなに大人しかつたっけ？？こんな調子で大会大丈夫かな……？」

？？

？？そんな僕の不安とは裏腹に、真宵ちゃんは対戦相手の全てをルールに則つた上で瞬殺し、圧倒的差をつけて優勝したのだった。それから僕は怒涛の勢いで翌日にお祝いをする約束を取り付けられたのだった。

？？

第五十七話「これってデートっ！？」

？？「遅い！ ？三秒遅刻だ！」

？？「え、『めん間南ちゃん！』

？？大会で間南ちゃんが優勝した次の日。最寄の駅前で、僕たちは待ち合わせをしていた。今の時刻は朝九時。ここから大型ショッピングモールまで電車に乗つて約一時間。十時には着くと思う。

？？「つたく。三秒遅かったんだから、三秒長く付き合えよ。わかつたな？」

？？「う、うん、わかってるよ」

？？顔を怒りで真っ赤に染めながら、間南ちゃんは僕に念押しした。というか遅くなつたのはみんなの説得に時間がかかつたからで、僕はこれでも急いだ方……。なんてことを言つたら、遙か彼方へ吹き飛ばされるんだろうけど。

？？「あいつら連れて来なかつたろうな！？ ？……その、あいつら、女の子ばつかだろ？ ？やつぱり荷物持ちさせんのは悪いからな」

？？「幼馴染に荷物持ちさせるのはいいの？」

？？「いいんだよ！」

？？「えー……」

？？そんなことを言いながらも、僕は内心楽しみだった。だって、街のショッピングモールなんて、滅多に行く機会がないから。

？？「楽しそうじゃねえか。そんなに私との『トー、じゃなかつた、

荷物持ちが楽しみか?」

? ? 「楽しみというわけではないけど……。まあ、ショッピングは

楽しいしね」

? ? 「お前ホントに男か? ? ショッピングが楽しみなんてやつ、私始めて見たぜ」

? ? 「それ、偏見だよ?」

? ? 「うるせえ。黙つてついてこい」

豪快に言つて駅に向かっていく間宮ちゃんは、まるで男の人のようにだつた。僕はあわてて彼女を追いかけ、隣を歩く。

「……お、おい、四季」

「な、なあに、間宮ちゃん」

間宮ちゃんは僕を親の仇を見るような顔でじりり、と睨みつけてくる。……何か僕ましいことでもしたのかな……?

「……そ、その。……右手が」

「右手?」

僕の右手には、何もない。荷物持ちをやらされるのは決まっているのに、どうして余計な荷物を持つてくるだろつか。……もしかして、それが癪に障つたのかな?

「……ほら、手」

「え」

す、と間宮ちゃんは左手を僕の方へと向けた。これは、どうこう意味なのだろう。

「……繫げ

「うん」

ゆづくつと、僕は間宵ちゃんの手をとつて、握る。格闘家を目指すだけあつて、その手は僕よりもがつちりとしていた。

「どうだ？ 私の手、なかなかいけるだろ？」

「……い、いけるつて、何が？」

「思つたよりも華奢だろ？ な？」

何か期待を寄せるような顔で、間宵ちゃんが聞いてきた。

「……ええつと、うん、びづくつしちやつた」

「そつか！ あはは、私もまだまだ捨てたもんじやねえなー サ、

行こうぜ四季！」

「え、うわっー！」

間宵ちゃんは急に僕を引っ張つて、改札口を抜け、一気に駅のホームまで来た。この駅は小さなホームがあるだけで、売店もなれば待合室もない。人の姿はまばらで、学生の姿もこの時間だとなに等しい。周りの人たちは、急になだれ込むようにしてホームに入ってきた僕たちを見て不思議そうな表情をした。間宵ちゃんは僕と手をつないだまま、うれしそうにぐるぐると回つている。つまり、つまり、彼女と手をつないでいる僕もぐるぐる回つてこるわけで。

「ビ、どうしたの、間宵ちゃんー！」

「ん、なんでもねえよ

僕が、普段と様子が違つこと驚いて聞くと、間宵ちゃんは照れくさそうに顔を赤くすると、回ののをやめた。

「……ちょっと昔が懐かしかつただけだ」

「昔?」

「……気にはすんな。あと一分で電車が来る。……それまで、黙つ

てる」

「でも」

「……」

ぎろり、と睨まれた。あわてて僕は口をつぐむ。

待つている間暇なので、間宵ちゃんの様子を見る。表情は普段と変わらず、どことなくむつとした表情。でも、その中に待望の想いが隠されていることを、僕は見つけた。普段は喧嘩ばかりの僕たちだけど、ちゃんとこういう感情の機微ぐらいは、読みとれる。きっと、早くモールに行きたいんだろうな。

「……」

僕たちはそれから一分間、黙つて電車を待った。

がたん、ごとんと電車は揺れる。人はあまりおらず、僕たち二人は余裕を持つて座っている。

「なあ、四季。今日はどれくらい時間とれるんだ?」

「え? ……そだなあ、五時ぐらいまでかな?」

「……そうか」

僕の隣に座っている間宵ちゃんは、しょんぼりと言つた。

「どうしたの？」

「……もつと時間どれねえのか？」

「うーん……。四様がいるからなあ……」

僕は妹の顔を想い浮かべながら言つた。零や夜闇、弥生ちゃんは多分一日三日放つておいても大丈夫だろうけど、四様はまだ子供だから……。

「……そうだつたな。昔と違つて……今は、あいつがいるもんな」「まあね」

僕は複雑な心境だつた。昔は、僕の隣には誰もいなかつた。今のよつに弥生ちゃんや夜闇、零がいるわけじやないし、間宵ちゃんだつて、今みたいに毎日顔を合わせる、といつこともなかつた。

「じゃあ、最低五時までは、お前は私の物、つてことだな」「そんな、物扱いしないでよ」「うるせえ。その代わり……」

ふと、さつげなく間宵ちゃんは僕の方を向いて、満面の笑顔で、
僕に言う。

「その代わり、最低五時まで、私はお前の物だ

どうしてか、心臓の鼓動が速くなつた。ドキドキする。それと同時に、僕は気付いた。

……あ、もしかして、これってデートなんじや。だって、異性の人と、休日にお出かけする。……つん、完全にデートだ。

……どうしよう。僕、完全に思い違いしてた。今まで本氣で、僕

は間宮ちあさんの荷物持ち、とこの程度の認識しかなかった。でも、わざわざの言葉で、気付いた。これは、もう少しからどうみても「アートだ」と。

……………。

やめ」とは何も変わらないこばずなの?」、アートと認識したとたん、僕は緊張してきた。

第五十八話／ちょっとした異変！？

「この町から一番近いショッピングモールは、街の中で最大級の品ぞろえを誇る超大型のモールだ。多くの人が集まり、いろんな人が和気あいあいとここでショッピングを楽しむ。ファミリーやカップル、子供連れ、いろんな人がここにはいる。

まあ、周りをみると、樂しんでいるのは女性くらいで、男の僕らはちやつちやと買い物を済ませて早く帰りたいオーラが半端ない。僕はちょっと違うけど。

「あ、四季、重くねえか？」

「あのね間甯ちゃん。あんまり馬鹿にしないでくれる？」

今僕は間甯ちゃんの荷物を持っているわけだけど、あんまり大きくなり上にこれ布だからものすごく軽い。にも関わらず、間甯ちゃんはこんなことを聞いてくる。いくら僕がひ弱だと見え、ねえ。

ここはファンシー・ショップ。僕は最初どれほど高級な物を買わされるのだろうと内心びくびくしていたのだが、間甯ちゃんは比較的安全なものを選んでいる。しかも、量も少ない。

『「これほしいなあ』

と間甯ちゃんが口にしたことほかなりあつたけど、

『四季、これ買ってくれ』

と言つてきたのは今のところ一度。僕が『かわいいね』と言つた力チュー・シャひとつだけだった。黒の生地にゴシック調の模様が施されたシンプルなものだったけど、意外なほど間甯ちゃんに似合つ

ていた。

「む。悪かったな。……でも、因縁、これ私に会ひつて思つか?」

そう言つて間宮ちゃんは試着してくるワンピース姿でくつと回つた。赤とピンクの服はかわいらしげで、間宮ちゃんは似合つてない。

「へへん、間宮ちゃんこはまつと似合つのがあると困つんだ」

僕はそういうて、ブティックの中を回る。白くて、窓枠がついたよつな模様がついたTシャツ、青いタイトなジーパン。

「これとか、間宮ちゃんにぴったりだと困つんだ!」

僕はそういうて、間宮ちゃんにその服を差し出した。彼女は服を受け取ると、赤い顔をした。

「ま、まあ、四季が着ろつてんなら、着るけどよ。お前こんなのが趣味だつたんだな、知らなかつた……」

やうぶつぶつ言しながら、間宮ちゃんはさつき渡した服を着て出できた。

思ったよりも胸元が強調されていて、間宮ちゃんの整つたプロポーションがよくわかる。そんなのを着せた僕つていいなんなんだろう。

「……き、着たぞ。どうだ？ 似合つてるか？」

「ばつちつーほんとかわいいね、間宮ちゃん」

僕がやつこいと、間宮ちゃんは頷いた。

「やうか、ありがとよ。……じゃあ、この服買ってくれるか？ その、ちょっと値が張るけどよ」

「大丈夫！ 今日は今まで貯めたお金全部使つつもりで来たから！」

そりゃ、もちろん語弊のある言い方だ。本当に大切なお金は使えないし、使うつもりもない。けど、自由にできるお金は全部間宮ちゃんのプレゼントに使つ氣概でここに来た。

なんたって今日は、今までずっと、万年初戦敗退の間宮ちゃんが初めて優勝したお祝いなのだから。

……そして、僕の初デート。やっぱり、意識すると恥ずかしくなってくる。それを悟られたくないから、必死で普段通りふるまつてるけど、気づかれてないかな……？

「…………や、そこまでしなくていい……じゃなくて、ありがとよ。ありがたく使わせてもらひつい」

間宮ちゃんは不敵に笑った。

けど、それからいろんなどこかを回ったけど、一切欲しがらなかつた。

「ふう……」

僕はトイレで用を足して、手を洗った。あれからしばらくして皿食をファーストフードで済ませ、そしていつたんトイレ休憩をはさむことにしたのだ。

僕が手を洗つて外に出ると、やつを買った服を着て、やつを買つ

た力チユーシャを頭に乗つけた間甯ちゃんが数人の男に絡まれていた。

「ねえ彼女、今暇？ 暇でしょ？」

「いいお店知つてんの。来てくれる？」

こいつらの間甯ちゃんならぱっと止づけて僕が止めるといろなんだけど、今田はちゅうと様子が変だ。苛立たしそうな顔をして、男たちをにらんでいることどめている。悪口をえ言わないのせ、じつしてだろう。

「……ねえ、ってかおい、なんか言えよー。」

どん、と男のうちの一人は間甯ちゃんの肩を押した。

あ、あの人死んだ。

そう思つた僕に反して、間甯ちゃんはじつと彼を見据えるだけに終わつた。

「……あ？ 何怖い目してんの？ いいじゃんちゅうとお茶するべらー」

男たちの雰囲気がどんどん悪くなつてこぐ。

さすがにまずい。

そう思つて、僕は駆け出した。

「おーいー。」

名前は言わず、ただ呼ぶ。間甯ちゃんはそれだけで気づいてくれた。間甯ちゃんは僕を見ると、ほつとしたような顔をした。びきつと、一瞬だけ僕の心臓が跳ねた。

「来てくれたか。助けてくれ」

僕は頷いた。別の意味で、心臓が跳ねる。僕は男たちのそばまで歩くと、間甯ちゃんとの間に立った。

「ああ？ なんだよ優男。どけよ」

男が僕を押した。僕はよろめいて、数歩下がる。すると、背中が間甯ちゃんにあたつた。守らないと。理由は知らないけど、間甯ちゃんは今戦えない。僕が、守つてあげないと。

「イヤ。この子、僕の彼女なの。わかる？ お邪魔虫は消えて。それとも君ら、人の彼女横からかっせりつもり？ ん？ どうなの？」

「なめやがつてこの野郎！」

ぱきりと、顔を殴られた。僕は受け身も取れず、後ろに倒れる。間甯ちゃんは後ろに下がついてくれたおかげで、間甯ちゃんを巻き込んで倒れるなんて無様な真似はせずに済んだ。

「もしもし警察ですか？ 今彼が暴漢に襲われています。はい、
……町の……」

間甯ちゃんが携帯片手にそう言い始めると、男たちは途端に焦り始め、周りの人たちが集まつてくると、あわてて逃げて行つた。

「……すまねえな、四季」

「気にしないで。君がこうならなくてよかった」

僕は腫れた頬をさすりながらそつと語った。

「さ、行こうぜ。適当に治療具買って、手当してやるよ」

「え？ でも警察……」

僕の言葉に、間甫けいやんはにやりと笑って答えた。
嘘、だつたのか。

「治療具くらいは私が買う」

「え、でも悪いよそんなんの」

「私に買わせる。いいな？」

有無を言わさぬ物言いに、僕は頷くしかなかつた。

第五十九話／間宵ちゃんの異変！？

ちよん、ちよんと消毒液に浸したコットンが僕の頬に触れる。

「い、痛いよ間宵ちゃん」

「我慢しろ」

それから間宵ちゃんはガーゼを当てて、医療用のテープで固定した。応急処置は、これで終わり、かな。

「……終わりだ。とりあえずひでえことにはなってねえが、痛みがひかねえようなら医者行けよ」

「ありがと、間宵ちゃん」

間宵ちゃんは照れた様子で頬を搔いた。

周りにいる人たちが、興味深そうに僕たちを見ている。

ここはモール内にあるドラッグストアの前。医療道具を買った間宵ちゃんは、近くにあつたベンチに座り、僕の治療を始めた。こんなところで始めちゃったもんだから、周りの視線が痛くて痛くて……。

「礼を言つのは私のほうだ。ありがとよ、四季」

「いや、いいけど……どうして？」

僕は思わず聞いていた。気に入らない奴ばぶち殺すが行動基準の間宵ちゃんにしては、さつきの様子はずいぶんしおらしかったから。

「……それから、今まで、本当にすまなかつた、四季」

「え？ 何が？」

僕は思わず聞き返していた。間甯ちゃんは、似合わない苦い顔をするとい、申し訳なさそうな声で言つた。

「今まで、殴つたり蹴つたりして」

「え？」

驚く僕に、間甯ちゃんは続けて言つた。

「昨日、優勝して、家に帰つてベッドに入つて、初めて自分の強さに気付いたんだ」

「え？」

もしかして気づいてなかつたの？

「いくら小さい大会だつて言つても、優勝できるくらいの実力があつたんだ。そう思つたら、私、今までお前になんてことを……」

なんだろう、嬉しいなあ。これでもしかして僕、殴られずに済むんじやないか？

「今まで無自覚だったのが、余計に怖かつた。私は格闘家。自分の実力は、なにより把握していくべきやいけなかつたのに……」

僕は驚いていた。まさか、大会での優勝が、ここまで間甯ちゃんを変えるきっかけになつただなんて。僕はてっきり、自分の実力を信じて僕にもつとひどいことをするんじゃないかつて……。

「だから、さつきのやつらにも、攻撃するのが怖かつた。手加減の仕方なんて全然知らなかつた。今までは運が良かつたから……そう、

四様の兄ちゃんのお前だから、私は殺さずに済んだのかもしない。もし私が普通の人人に攻撃したら、もしかしたら、死んでしまうんじゃないか、殺してしまうんじやないか、そう思つたら……」

いつもは大きく見えたその体が、とても小さく見えた。縮こまつて、持つている力に怯える女の子のように思えた。

間宵ちゃんが、苦しんでいる。助けて、あげないと。僕は間宵ちゃんを抱きしめた。

「ふえ？ あ、ええ？ な、し、しき」

「大丈夫だよ、間宵ちゃん」

小さく震えて、あわあわと驚く間宵ちゃんが、妙にかわいらしかった。

「間宵ちゃんは、大丈夫。手加減だつてできる。力の扱い方は、これから学んていけばいいんだよ。ね？ 間宵ちゃんは普通の高校生なんだから、さつきみたいな変なことがない限り、戦う必要なんてないんだよ。ううと、さつきみたいなことがあっても、大丈夫。僕が守つてあげるから」

ぴたりと、間宵ちゃんの動きが止まった。

「ま、まも、まも？」

「うん、守つてあげる。だから、無理に強くならなくともいいんだよ」

ぎゅ、と腕をつかまれた。僕はうつむく間宵ちゃんを見た。

「……ダメ。私は強くならないと」

すぐりと、間宮ちゃんは立ち上がった。

僕と、視線が合つた。

「……励ましてくれて、ありがとな、四季。ホント、見直した。でもダメだ。私は、強くなないと。強くなり続けないとダメなんだ。世界で一番、強くなるんだ」

強くなりたい。間宮ちゃんの幼い時からの夢。でも、中学生の時からは、その言葉は、あまり聞かなくなつた。僕はつづき、『自分が強くなつた』と間宮ちゃんが思つたからだと想つていたけど……。

間宮ちゃんのこの悲しそうな顔を見るかぎり、そうじやないみたい。何か、ある。なんだろう。

「間宮ちゃん、何があったの？ 僕でよかつたら、相談に乗るよ。話して？」

間宮ちゃんは、首を振つた。

「ほんと、お前は優しいよ。ああ、だから私は……。だけどな、こればっかりは、話すわけにゃいかねえ。ああ、そうさ。私にゃ覚悟が足りなかつたんだよ。実際、それだけの話や」

ひょいひょいと笑つて、間宮ちゃんは言つた。

「……私は、今日から修行の旅に出る。場所は聞くな……じゃあな

間宮ちやんは僕のほうに近づいてきて、顔を近づけてきた。その眼はまるで鷹のようで、僕は睨まれた小動物のよう、動けなくなつた。

顔はそりそり近づいてくる。そして、そして。

僕と間宮ちやんは、口づけをした。

すつと、僕の首に間宮ちやんの手が伸びる。

「……四季」

トン、と首に衝撃。

「ま、間宮、ちやん」

僕は地面に倒れ、そのまま気を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6419i/>

三人のフィアンセ！？

2012年1月5日19時14分発行